

幸さば云へません。

漸く甲府の町へ入らうとする時分に辻番がありました。荒川を渡つて元の陣屋跡の處に此の頃臨時に辻番が設けられました。

「これ／＼何處へ行かつしやる」

辻番の中で六尺棒を持つた屈竟な足輕が、通りかゝるお銀様を呼び留めました。

「はい」

と云つてお銀様は立ち留まりました。

「待たつしやい」

辻番はお銀様の頭巾の上から足の爪先まで見据ゑてみましたが、

「見れば女子の一人道、何方からお出で、ござる」

「有野村から参りました」

「有野村は何の何某といふ者でござる」

「はい……藤原の伊太夫の家から……召使の君と申しまする」

「有野村の藤原家の召仕へ、それが一人で此の夜分」

「主人の内密の使で據處なく……こんなに遅くなりました」

「はて、さうして何處へ行かつしやるのじや」

「それは……御城内の神尾主膳様のお屋敷まで」

お銀様は此處で二つの秘へ事を云つてしまひました。自分がお君の名を假りた事と、神尾主膳の屋敷を行先のやうに出鱈目に云つてしまつた事です。

「神尾主膳殿へ」

と云つて辻番は、やゝ掛念を持つやうに、お銀様を見廻してゐたが

「宜しい、通らつしやい、併し、この頃は市中が物騒でござる事をそなたはまた知らぬと見えるな、物騒といふのは外ではない、よく人が斬られる、辻斬が流行るから宵の中さへ人の通りは甚だ少い、知らぬ事さはいへ此の深夜一人で、まして女の身で、此のあたりを歩くといふは危険千萬じや」

「有難うございます」

辻番に通らつしやいと云はれたから、お銀様は其處を通り過ぎてしまふと飯田新町の通りであります。

今、辻番から云はれた事もお銀様は、もう忘れてしまひました。甲府の此の頃の物騒な事も有野村あたりまで聞えてゐないのではなかつたけれど、お銀様の耳へは其れがまた入つてゐませんのでした。さて、甲府の町へ入るには入つたけれど、何處へ行かうといふ當はありません。神尾主膳の邸と云つたのは元より出鱈目ですけれども薄々心の中でお銀様が心當にして來たのは、それ

は役割の市五郎の家でした。

役割の市五郎を訪ねる事に心を定めたお銀様が、案内を知つた甲府の町の道筋をお城の方へと歩いて行くに、子供の泣き聲が聞えました。

その子供の泣き聲が如何にも物悲しさうに聞えて來ました。弱い帛を長く裂いて行くやうに泣き續けて、やがて咽び入るやうになつて消えたかと思つた、また物悲しさうに泣く音を立て、歎息上ける泣き聲が、いぢらしくて堪まらなく聞えます。

お銀様は何處からともなく其の物悲しい子供の泣き聲を聞いた時にはじめて、もう夜も大分更けてゐる事に気がつきました。気がついて立つた處のすぐ眼の前に。こんもりと一叢の森があることを知りました。右の方は城内へつゞくお武家屋敷がある事を知りました。眼の前の森は穴切明神の森であることも、甲府の地理に暗くないお銀様には直ぐに合點が行つたのです。その明神のお燈明も見えるし、その森蔭にはお小人屋敷なんぞもあるのですから、闇の晩さはいへ、それを見極める事に何の手數も要らないわけであります。

甲斐國甲府の土地は太古は一面の湖水であつたといふ事です。冷たい水が漫々と張り切つて鏡のやうになつてゐると、そこへ富士の山が面を出しては朝な夕なの水鏡をするのであります。富士の山の水鏡の爲には恰好でありませうとも、水さへ無ければ人間も生まれよう、畑も出來ようものを、例の地藏菩薩がお慈悲心から或時、二人の神様をお呼びになつて、

「どうしたものじや、此の水を何處へか落して人間達を住まはしてやりたいものではないか」

と御相談になると、そのうちの一人の神様が、

「それは結構なお思ひつきでござる、何さか一つ拙者が工夫して見ませう」

と云つて、四邊の地勢を見廻してゐたが、やがて前の方の山の端の薄い處を、

「エイ」

と云つて蹴飛ばすと其の山の端の一角が蹴破られてしまひました。それを見るより、もう一人の神様が立ち上がつて、

「よし、あさは拙者が引き受けて何さかしよう」

と云つて、今蹴破られた山の端へ穴を開けて、其處へ一條の水路を開いたから、見てゐるうちに漫々たる大湖水の水が富士川へ流れて落ちました。

其を遠くの方で見てゐた不動様が、

「乃公も引込んで居られぬ」

と云つて川の瀬をよく均して水の滞らぬやうにしました。

此の二佛二神のお蔭で甲府の土地が出來たのだといふのが古來の傳説であります。最初に言ひ出した地藏様は甲府の東光寺にある稻積地藏で、次に山を蹴破つたのが蹴裂明神で、河の瀬を作つた不動様が瀬立不動で、山を切り穴を開いた神様が、即ち此の穴切明神であるといふことの縁起

も、お銀様はよく知つてゐるのであります。こゝへ来て夜の更けた事を知つたお銀様は、はじめて自分の無謀であつた事と、大膽に過ぎた事を省みる心持になりました。前に来た時には日中であつたに拘はらず、而もお城の真下であつたに拘はらず、悪い折助の爲に、酷い目に遭つた事を思ひ出して、遂に此の夜更に此の淋しい道を如何して自分が此處まで来て、無事に此處に立つてゐられるのかをさへ思ひ出されて、ぞつと怖ろしさに身をふるはす例の物悲しい、いぢらしい子供の泣き聲であります。

何だか知らないけれども、その泣き聲が自分のあそを慕うて来るものゝやうでありました。自分を慕うて幼な子があそを追つかけて来るものゝやうに、お銀様には思はれてなりません。

お銀様は其の子供の泣き聲が氣になつて仕方ありません。

穴切明神を後にして武家屋敷の方へ向つて行きますと、其處で絶え入るやうな子供の泣き聲が足許から聞えるのであります。

「おや、棄兒か知ら」

お銀様は、まさに近い處の路傍の闇に子供が一人地面へ抛り出されて泣いてゐるのを認めました。

「可哀相に棄兒」

お銀様は其の子供の傍へ駆寄りました。棄兒としてもこれは餘り慈悲のない棄兒でありました。

籠へ入れてあるでもなければ玩具一つ持たせて置くでもありません。裸體にしないだけがお情で、

たゞ道の傍へ抛り出されたまゝの棄兒でありました。

「おゝ、こんな事をして置けば凍死んでしまふ、何さいふ無慈悲な事、何さいふ情ない親」

お銀様は直に其の子を抱上げました。咽び入るやうな此の子は抱上げられて、いぢらしくもお銀様の胸へびつたりと面を寄せて、その乳を求めながら、歎歎くつてゐるのであります。

「お乳が無くて悪かつたね、いゝ坊やだから泣いては可けません」

漸く隻言を云へる位の男の子でありました。お銀様はその子を固く抱いて頬ずりをしました。

その時に、お銀様の鼻に觸れたのは紛さして腥さい忌な臭ひであります。お銀様は其の臭ひが何の臭ひたか知りませんでしたけれど、むつと咽せかへるやうになつて、我知らず二足三足歩いて見ると、其處の地上にまた一つ物の影があるのであります。

「人が倒れてゐる」

お銀様は正しく其處に倒れてゐる人を見ました。その人が尋常に倒れてゐるものでないことを直に感づきました。怪我で倒れたのでもなし、病氣で倒れたのでもない事に氣がつかしました。

「あゝ、さうしよう、人が斬られてゐる、殺されてゐる！」

天地が遽に暗くなつて——暗いのは最初からの事だが、この時は腹の中まで暗くなりました。前後左右四方上下から眞黒な大鐵壁を以て、ひた／＼と押へつけられるやうな心持になつて眼がくらくらと眩んでしまひました。

けれども胸に抱いた子は、いよく固く抱いて居りました。

幼子を抱いて開の中に立つてゐたお銀様の肩を後から軽く叩いたものがありました。

「もし」

お銀様は愕然として我に歸りました。我に歸ると共に慄え上がりました。

「誰か」

お銀様の齒の根が合ひませんでした。其處に頭巾を被つて袴を穿いて立つてゐるのは武士の姿であります。

「驚き召さるな、拙者は通りかゝりの者……してそなたは」

存外、物優しい聲でありました。

「わたくしも通りかゝりの……」

お銀様は辛うじて斯う云ひました。

「この場の有様は、こりや」

武士も又、さすがに此の場の無惨な有様に慄として栗つ立つたきりでありました。

「其處に誰か斬られてゐるのでござりまする、さうして此の子供が此處に投げ出されて居りました」

「また、殺られたか」

「如何致しませう」

この時、武士はさのみ狼狽しないで、

「若しや、そなたは有野村の藤原家の御息女ではござらぬか」

と聞かれてお銀様は狼狽しました。

「左様に仰有る、あなた様は」

「拙者は神尾主膳でござる」

「神尾主膳様」

「伊太夫殿の御息女に違ひないか」

「はい」

お銀様は神尾主膳の名を聞いて一時に恥しくなりました。主膳はお銀様の父の許を訪ねた事もあつて、お銀様も其の面影を知らないではありません。その人に此處で會はうとは思ひませんでした。會つて見れば、お銀様としても、さすがに恥しい思ひがしなればならない筈です。

「お銀様の……如何してまた此の夜更けに此んな處にお一人で……いやそれを承はつてゐる事も面倒じや、これは此の頃流行りものの辻斬、拙者も今宵は忍びの道、かゝはり合つては居られぬ、この場はこの儘にして立ち退き申さう、そなた様は何れへお越しじや」

「はい、わたくしは」

「兎も角も、拙者が屋敷まで見えられるやうに」
 「有難う存じまする」
 「見廻りの者が来ない中急いで」
 「それでも此の子が」
 「さあ其の子は」
 二人が其の子の始末に當惑してゐる時に、火の番の拍子木が聞えました。

三

破牢のあつたといふ其の當夜から、ひそり胸を痛めてゐるのはお松であります。その破牢のうちに宇津木兵馬があつたといふ事は今や隠れもなき事實であります。けれども其の行方が今以てわからぬといふのは今宵も、まんぢりさもしないほごお松の心を苦しめてゐました。お松の耳に入つた色々噂は、破牢者のうちの無宿者の一隊は如何やら山を越えて秩父の方へ逃けたものと、信濃路へ向つたものがあるらしいといふ事の外に、その主謀者と見做されるものは、如何しても此の市中に潜伏してゐなければならぬといふ事でありました。主謀者とは誰ぞ、宇津木兵馬は其の人ではあるまいけれど、その人に加算した時は其の人と責任を共にする人であるとは、お松も想像しないわけには行きません。

して見れば兵馬さんは此の甲府の市中の何れかに隠れてゐる。何處に隠れてゐるたらう。果して隠れて此の地を逃げ延びる事が出来ればそれは結構であるけれど、もう其の評判がお松の耳にまで聞えるやうになつては、此の狭い天地でさても危ない——とお松はそれを考へる。お松の刃を渡るやうにハラ／＼しました。

「お松ちゃん、お松ちゃん」

窓の戸をトン／＼叩いて、わが名を忍びやかに呼ぶ者のあるのは覺えのある聲で、お松に取つては必ずしも寢耳に水ではありません。

「はい」

窓の戸を開きます。其處から首を出したのは七兵衛でありました。

「おぢ様」

「お松、ちよつと耳を貸して呉れ」

七兵衛の來るのは、いつもあわたゞしいものであります。いつ何時來て、いつ何時歸るのたかわかりませんでした。斯うして夜中に合圖をして不意に訪うことには、少くともお松は慣れてゐるのであります。

「兵馬さんはあるよ、うむ、うむ、此の甲府の中に、それはな、思ひがけない處へ逃げ込んでゐるから、まあ今の處は無事だ、今の處は無事だけれども、その大將が此れから如何するつもりか

其れは知れない、一旦隠して置いて養生をさせて、それから改めて突き出すつもりなんだか、それとも隠して逃がすつもりなのか、その處がわからねえ」

七兵衛がお松の耳に口を當て、さ、やくこ、

「まあ、兵馬さんが此の甲府の町の中にゐらつしやる、それは何處でございませう、をちさん」

「それは些と思ひがけねえ處なんだ、俺はな、其處から兵馬さんを盗み出して、無事な處へお送がし申したいと思つてるんだが、其處の家には犬があて……意氣地の無えやうな話だが犬がある爲に俺は其の邸へ近寄れねえのだ」

「をちさん、それは何處なんでございませうよ、をちさんが行けなければ、わたしが何さか工夫して見ますから」

「それはお前、二の邸の御役宅で、駒井能登守様のお邸だ」

「あの御支配の殿様の」

「さうだ、櫓に兵馬さんは、あのお邸に隠れてゐる、そりや役人達にもまた目が届かねえ、外から其れを見届けたのは俺一人だ」

「まあ、あの御支配の駒井能登守様のお邸に兵馬さんが……」

お松は寧ろ呆れました。七兵衛が、また何をか云はうとした時に、裏の木戸口がギョツと云ひました。人があつて開けたもの、やうです。この時早く七兵衛は窓から何物をお松の部屋へ投げ

込んだまゝ、闇の中へ姿を隠してしまひました。

暗い處から入つて来たのは意外にも主人の神尾主膳でありました。

「お松、また寝ないのか」

「はい、また」

お松は窓の戸を締めきらないうちに主人から言葉をかけられてドギマギして、

「今、誰か来てゐたやうだが」

お松はハツとしました。

「いゝえ、誰も」

この返事も大へん慌てた返事でしたけれども、主膳は深く氣にしないで、そのまゝ行つてしまひました。

お松はホツと息を吐いて窓を締めて座につきました。

駒井能登守の名はお松もよく知つてゐます。名を知つてゐるのみならず、郡内の道中で、親しくお近づきになつてゐます。けれども其の人は甲州勤番の支配である。破牢の兵馬を糺弾すべき地位にある人で、それを擁護すべき立場の人でないといふことはお松にもよくわかる筈です。それ故に折角、兵馬の在所を知つたもの、これから先がまた心配で堪まりません。

たゞ一つ心持みなのは能登守といふ殿様が、家の殿様と違つて、物事に思ひ遣りのあるらしい殿

樽である事のみでありました。その思ひ遣りに絶つたならばさ、お松は其處に、いくらかの気休めを感じて、あれよこれよと考へ初めました。

そのうちに、忘れてゐたのは、さき程七兵衛が窓から投げ込んで行つた品物であります。油紙に包んで風絲で絡けてある包みを解いて見ると、五寸位に切つた一本の竹筒が現はれました。その竹筒には何か一杯に詰め込まれてあるらしい重味が何さなく無氣味に思はれます。それでやはり風絲で把手をこしらへて提げるやうにしてありました處へ、懸想文のやうな結狀が括りつけてありました。

お松は、それを提げて見て、思はず微笑しない譯には行きませんでした。その竹筒の一端に「十八文」といふ烙印が捺してあつたからです。

それでお松は、すつかり合點が行きました。「十八文」が一切を了解させて呉れたのみならず、いろ／＼に胸を痛めたり心を苦しめたりしてゐたお松を腹を抱えさせるほどに笑はせました。

あの先生は可笑しい先生であると思つて、お松は思ひ出し笑ひをしながらも、その親切を嬉しく思ひました。これは兵馬さんの爲の藥である。兵馬さんが病氣である爲に、をぢさんが道庵先生に調合して貰つてワザ／＼持参したものと思つて見れば、有難くて其の竹筒を推し戴かないわけには行きません。

して見れば、これを兵馬さんの許まで届ける責任はわたしに在るさお松は勇み立ちました。別に

嚴重な封じもないのだから、その懸想文のやうな結狀を取つて開いて見ると、それは道庵先生一流の處方箋でありました。

もろこし我朝に、もろ／＼の醫者達の出し申さるゝ藥禮の禮にもあらず……たゞ病氣全快の節は十八文と申して、滞りなく支拂するぞと思ひきりて掛る外には別の仔細候はず。

こんな事が本版摺にしてあるのだから問題にも何にもなつたものではありません。

四

お松が寝ついた時分からサラ／＼と降りはじめました。

翌朝になつて見ると、峽中の廿五萬石が雪で埋もれてしまひました。過ぐる夜の霜は墨と胡粉を以て天地を塗りつぶしたのですけれど、これは眞白々に乾坤を白殺して、丸籠空に蟻まる有様でありました。昨夜からかけて小歇みなく降つてゐたのが朝になつて一斛の威勢を加へました。東へ向いても笹子や大菩薩の嶺を見ることが出来ません。西へ向つて白根連山の形も眼には入りません。南は富士の山、北は金峰山、名にし負ふ甲斐の國の西方を圍む山また山の姿を一つも見ることが出来ないのです。たゞ霏々として降り、續紛として舞ふ雪花を見るのみであります。

白いものゝ極は畢竟黒いものと同じ作用を爲すものです。大雪の時は暗夜の時と同じやうに咫尺を辨ぜぬ事になります。この降り驟梅では大雪になると誰もさう思はぬものは有りません。

この朝、駒井能登守の門内から此の雪を冒して一隊の人が外へ出ました。一隊の人さいつては少し大袈裟かも知れないが、その打扮いでたちの尋常でないことを見れば一隊の人さ云ひたくなるのであります。

人数は僅か四人——そのうちの三人は笠を被つて合羽を着てみました。三人の中の一人は正に主人の能登守でありました。その左右にゐた二人は、家來の者らしくもあるし、家來では無いらしくもあるし、さ云うまでもなく其の一人は南條——能登守に「耳理わたり」と呼ばれて舊友のやうな扱ひを受けた人——それから、も一人は五十嵐と呼ばれた人、つまり此の二人は過ぐる夜の破牢者の巨魁なのであります。斯うして笠を被つて合羽を着て、大小を差して並んで見れば、それは物騒な破牢者さ誰にも氣取けられることではありません。

能登守を真中にして二人が左右を挟んで行けば誰が見ても其の用人であり家來であることに異議は無いのであります。たゞ此の大雪に能登守の身分さして馬駕籠の助けを假らず笠さ合羽さ草鞋で出かける事が、勇ましいさ云へは勇ましい、氣輕さいへは氣輕、また例の好奇あやしみかさ笑へは笑うのであります。斯うして、すぐに三人の後に付き添うた一人のお伴の有様を見れば、はあ成程さ納得が出来るのであります。

そのお伴は鐵砲を擔いで彈藥袋を肩から筋違に提けて居りました。能登守は斯うして今家來さお伴さをつれて雪に乗じて得意の鐵砲を試さうとするものさ見えます。さうさすれば成程能登守ら

しい雪見たさ、誰もいよく異議のない處でありましたけれど、その鐵砲を擔いで彈藥袋を提げたお伴なるものが尋常一様のお伴でない事を知つてゐるさ、また別種な興味が湧いて來なければならぬのであります。

そのお伴は宇治山田の米友でありました。前に立つた三人共に合羽を着てみましたけれど、米友だけは蓑を着てみました。三人は脚絆さ草鞋に足を固めてみましたけれど、米友だけは素足でありました。三人は大小を差してゐましたけれど米友は無腰でありました。

さて、勢よく門の外へ飛び出した三人は出巴いせさ降る雪を刎ね返してサツサさ闊歩しましたけれど、米友は跋足の足を引摺つて出かけました。

「米友」

能登守が振り返つて呼ぶさ、

「何だ」

米友は傲然たる返事でありました。

「冷たくは無いか」

能登守も南條も五十嵐も歩みながら振り返つて米友の素足を見ました。

「はッはッはッ」

米友は嘲笑つて却て自分に同情を寄せる先生達の足許を見ました。この一行は勢よく雪を冒して

進んで行きます。何處へ行くのたか知れないけれども、たしかに荒川筋を目あてに行くものと見えしました。

前に云ふ通り天地は皆んな雪であります。往來の人の氣配は極めて少くあります。犬の子は威勢よく遊んでゐました。たまに通るかゝる人も、前に云ふやうな見當から、誰も一行を怪しむものはありません。その中の一人が能登守であるといふ事をすらも氣のついたものではありません。其の同じ朝、神尾主膳は朝寝をして居りました。此の人の朝寝は今に初まつた事ではないけれども、この朝は特別によく寝てゐました。それは昨夜の夜更しのせいもあつたらうし、外は此の雪でもあるし斯うして寝かして置けば何時まで寝てゐるかわかりません。その神尾主膳が急に朝寝の夢を破られたのは、能登守の一行がその屋敷を出ると、ほさんと同時にありました。取次の言葉聞いて此の無精者がガバと匆ね起きた處を見ると、それは主膳の耳に可なりの大事と響いたものと見えます。

「よし、早速こゝへ通せ」

起き上がらないうちから斯う云つた處を見ても、いよ／＼大事の注進を齎したものがあつたことは慥です。

間もなく、主膳の寢間へ通されたものは役割市五郎でした。

「神尾の殿様、逃げました、逃げました、いよ／＼逃げ出しましたよ」

「何方へ逃げた」

「代官町から荒川の筋、たしかに身延街道でございませう、野郎共を三人はかり、後を追つ掛けさせて置きましたから、行方を突き留める分には何でもございませませんが、いざこ云ふ時野郎共では……」

「よし、後詰は此方です、市五郎、其方大儀でも分部、山口、池野、増田へ沙汰をして呉れ、急いで鷹狩を催す云つて此處へ集まるやうに、表面は鷹狩だが此の鷹狩は火事より急しい」

「委細承知致しました、それでは御免」

市五郎はそ／＼に辭して出かけました。それから後の神尾主膳の舉動は氣忙しいもので、面を洗ふ、着物を着替へる、家來を呼ぶ、配下の同心と小人を呼びにやる、女中を叱る、小者を罵る。

主膳がやつと衣服を収めてしまつた時分に、この屋敷の門内へは、もう多くの人が集まりました。

「おゝ、各々方、大儀々々、市五郎からお聞きでもござらう、近頃珍らしい鷹狩、獲物に手ごたへがありさうじや」

「神尾殿の仰せの通り、近頃の雪見、それ故取る物も取り敢へず馳せつけて参つた」

「さあ、同勢揃ふたら、一刻も早く」

「かけ鳥の落ちて行く先は身延街道」

成程鷹狩には違ひなからうが、鷹狩にしてはあんまり悦ばしい鷹狩であります。これ等の同勢十
八人は雪を蹴立て、轟然に代官町の通りから荒川筋、身延街道を目掛けて飛んで行きました。

神尾主膳だけは残つて、彼等の出て行く後影を見送つてみました。

「酒だ、前祝ひの雪見酒」

神尾主膳はそれから酒を飲みはじめたが、雪見の酒よりは何か心祝ひの酒のやうに見えました。
飲んでゐるうちに、漸く心持になつて、

「おい、雪見たく、折角の雪を此んな處で飲んでゐては面白くない、これから躑躅ヶ崎へ雪見
に出かける、誰か二人はかり行つて其の用意をして置け、下屋敷の二階の間を掃除して、火を盛
んに熾して酒を熾め、あつさりとした酒席をこしらへて置け」

と命令し、

「さあ、これから躑躅ヶ崎へ出かける、歩いて行くことも、いざさらは雪見に轉ぶ處までも古いが、
この雪見に歩かないで何とする、伴は一人で宜しい、仲間一人で宜しい、長合羽の用意さ、傘
物」

主膳は立ち上つて、

「刀……」

と云つて、よろ／＼とした足許を踏み締めるさ、女中が常の差料を取つて恭しく差出しました。

「これではない、彼方を出せ」

床の間の刀架に縦に飾つてある梨子地の鞘の長い刀を指しました。

「うむ、それだ」

梨子地の鞘の長い刀を大事に取り下ろして主人へ捧げると、主膳はそれを受取つて、

「これが伯耆の安綱だ」

言はでもの事を女中に向つてまで口走るの、酒が漸く廻つたからであります。

伯耆の安綱、して見ればこの刀はこれ、有野村の藤原家の寶、それを幸内の手から擔き上
けて、今は斯うして捧へを換へて、自家の秘蔵にしてしまつたものと見るより外はないのであり
ます。

五

神尾主膳は酒の勢ひで此の雪の中を躑躅ヶ崎の古屋敷まで、歩いて行きました。

其處へ辿りついて見ると、最前言ひつけて置いた通りに二階の一間が綺麗に掃除されて、そこで
また一盞を傾けるやうに準備が整うてゐました。三ツ組の朱塗の盃が物々しく飾られてありまし
た。

この躑躅ヶ崎の古屋敷といふのは、武田の時分には甲坂彈正と穴山梅雪との屋敷址であつたとい

ふここです。昔は鶴ヶ崎といひ、今は鴈鴨ヶ崎といふ山の尾根が左手の方にズツと突き出てゐます。それと向つて家は東南に向いてゐました。この家は中々大きなもので、すつと前に勤番の支配であつた旗本がこしらへて、その後は長く空屋同様になつてゐたのを神尾主膳が、何かの縁で無償のやうに自分のものにしたのです。

今、主膳が坐つてゐる二階の一間は雪見には詭へ向の一間で、前に云つた鴈鴨ヶ崎の出鼻から左は高山につゞき、右は甲府へ開けて、常ならば富士の山が呼べは答へるほさに見える處であります。

「あの男はよく寝てゐる、餘りよく寝てゐる故、起すのも氣の毒じや、眼が醒めてから呼ぶさしよう」

主膳は斯う云つて三ツ組の朱塗の盃をこはして、ひさりで飲み始めました。ひさりで飲みながらの雪見です。雪見と云つても、眼の下の廣い庭の中に池があつて、その池の傍に巨大なる松の木が枝を擡げてゐます。

この松を「馬場の松」と人が呼んでゐましたのは、恐らく同じ武田の時代に馬場美濃守の屋敷がその邊にあつたから、それで誰云ふさなく馬場の松といふ名がついたものでありませう。

この馬場の松に積る雪だけでも、一人で見るには惜しいほどの面白いものであります。併し、主膳は其れほさに風流人ではありません。馬場の松の雪を見んが爲に、ワザ／＼此處へ飲み直しに

來たものごも思はれませぬ。

主膳が一人でグイ／＼飲んでゐるご時々下男が梯子から首を出して怖る／＼御用を伺ひに來るのみであります。

「あの男は、また眼が覺めないか、起しに行つてやらうかな、併し炬燵へ入つてあゝして熟睡してゐる處を叩き起すも氣の毒じや、疲れて晝は休んでゐる」

主膳があつた男といふのは此の屋敷に籠つてゐる筈の机龍之助の事でありませう。龍之助を相手に雪見をしようと思つて來た處が、その龍之助は今眠つてゐるものご見えます。

主膳は此んな獨り言を云つてゐるうちに、立つ／＼に叫びました。浴びるやうに飲みました。氣が漸く荒くなりました。

「うむ、うむ、この刀、この刀」

と云つて主膳はやゝ遠く離して置いてあつた例の梨子地の鞘の長い刀の下け緒を手繰つて身近く引き寄せて鞘の鑰をトシ疊へ突き立て、臆銀に高彫した松に鷹の縁頭のあたりに眼を据ゑました。

「此の刀を試す事を忌がる机龍之助の氣が知れぬ、と云つて拙者の腕で試して見ようといふ氣にもならぬ」

その途端に何ご思つたのか、神尾主膳の眼中が遽に血走つて、

「お銀、お銀、お銀ごの」

聲高くさうして物狂はしく呼びつゞけました。神尾主膳が續け様にお銀様の名を呼んだ時は、もう酒亂の境まで行つてゐました。その時は思慮も計畫も消滅して、これから燃え出さうとするのは猛烈なる残忍性のみであります。

「お銀ごの、お銀ごの」

二階の梯子段の上まで行つて下を見ながら、またお銀様の名を呼びました。けれどもお銀様の返事はありません。

「お銀ごの、お銀ごの」

例の刀を持ちながら廣い梯子段を覺束ない足ざりで二段三段と降りはじめました。

「はい」

此の時、はじめて廊下をはたたくと駆けるやうにして來たのはお銀様であります。何處にゐたのかお銀様は神尾の呼んだ聲を今聞きつけて廊下を急ぎ足で駆けて來ましたけれど、面は恥しさうに俯向いて兩袖を胸の前へ合せてゐました。

「あゝ、お銀ごの、今、そなたを呼びに行かうとしてゐた處じや、さあ、これへお上がりなされ、誰も居らぬ、遠慮なくお上がりなされ、お上がりなされ申すに」

その言ひぶりが認かでない事よりも、その酔つてゐる事がお銀様を驚かせましたけれども神尾は

お銀の驚いた事も、またお銀様を此んな事で驚かせては不利益だといふ事も一向見境がないほどになつてゐました。

「ちと、そなたに見せたいものがある、そなたで無ければ見ても詰らぬもの、見せても詰らぬものぢや、さあ、遠慮することはない、此方へお出であれ」

主膳は手を伸ばしてお銀様の手を取らうとしました。お銀様はさすがに遠慮するのを、神尾は無理に右の手で、お銀様の手を取りました。左の手には例の梨子地の鞘の長い刀を持つてゐました。

「そんなにして戴いては恐れ多いでございます」

お銀様が遠慮をするのを、主膳は用捨なくグイ／＼と引張ります。お銀様は仕様事なしに其の梯子段を引き上げられて行くのであります。

引き上げられて行くうちに、爛酔した神尾主膳が、その醉眼を凝と据ゑて自分の面を見下ろしてゐるのど打着かつて、お銀様はゾツと怖ろしくなりました。

お銀様は此の時まで、また神尾に就て何事も知りません。知つてゐる事は、その仲媒口によつての誇張された神尾家の噂のみでありました。何千石かの旗本の家であつたといふ事さ、また若いといふ事さ、多少は放蕩をしたけれど放蕩をしたお蔭で、人間が解りがよくて物事に柔かであるといふやうな事のみ聞かされてゐました。さうして父の許へ屢々訪れて來た主膳の面影は、ほゞそれに相當すると思つてゐました。

前の晩には思はぬ處で、その人に逢つて、この屋敷へ送られて來ました。主膳があの際は何の必要で彼の邊を通り合せたかといふ事に疑念が無いではなかつたけれど、自分を勞はつて此の屋敷まで送つて來て、そのうち相談相手になること云つて今日まで此處に待たして置いた持てなしは親切であり行き届いたものでありましたが、お銀様は尠からず神尾の殿様を信賴して居りました。その人が、今此處へ來て見ると、酔つてゐて——然もその酔ひ振りは爛醉であります。爛醉を通り越して狂醉の體であることは、如何しても今までのお銀様の信賴の念を、ぐらつかせずには置けません。神尾が自分を上から見据ゑてゐる眼は貪婪の眼でありました。單に酔つてゐるだけの眼つきではありません。この醉態を見た時に神尾主膳の人柄を疑ひはじめたお銀様は其の眼を見た時に何とも云へぬ厭ふべき恐怖を感じました。それと共に急いで神尾に取られた手を振り放さうとしましたけれど、それは縮木のやうに固く握られてありました。

お銀様は遂に二階の間まで主膳の爲に手を引かれて來てしまひました。

そこは主膳が今まで飲んでゐた處らしく、獅嘴のついた大火鉢に火が熾つてゐるし、猩々足の臺の物も置かれてありました。

「お銀ごの、何ぞ見事な雪ではないか、この松の雪を御覽候へ、これは馬場の松といつて白慢の松の樹じや」

主膳も座に着きました。仕様事なしにお銀様はその向ふにモジ／＼として坐つてゐました。

「結構な松の樹でござりまする」

お銀様は怖々庭を覗きました。池の汀の巨大なる松の樹は鷹が羽を擴げて巖の上に伸して來た形をして枝葉を充分に張つてゐる上にボタ／＼と雪が積み重なつてゐるのは、さすがに自慢の松であり、見事な雪であることに、怖々ながらお銀様も見惚れます。

松を見てゐるお銀様の横顔を神尾主膳は例の貪婪な眼つきで見据ゑてゐました。

「お銀ごの」

「はい」

「可い松であらう、木ぶりご申し枝ぶりご申し、あの位の松は外にはたんごあるまい、あれは馬場の松……武田の名將馬場美濃守が植ゑたと申す馬場の松」

「ほんごに見事な松でござりまする」

「そなたの家は甲州で並ぶ者の無い大家、それでもあの位の松はあるまい、あの位見事な松は、そなたの屋敷にもあるまい」

「わたくし共の庭にも、此のやうな見事な松はござりませぬ」

「左様であらう、この神尾は貧乏だけれど、そなたの家にも無い物を持つてゐる」

と云つて神尾は二三度頷きました。それからニヤリと笑つて、

「また／＼、神尾の家には、そなたの家に無くて神尾の家だけにある寶が一つある、それを見せ

て進ぜようか」

と云ひながら主膳は、又しても例の梨子地の鞘の刀を引き寄せて、

「この刀なんぞも其の一つじや、よく見て置かつしやれ、鞘は此の通り梨子地……鑄の象眼は
面散らし、縁頭は此れ臙銀で松に鷹の高彫、眼貫は浪に鯉で金無垢じや」

主膳は其の刀を取つて鞘のまゝお銀様の眼の前に突きつけました。

「結構なお差料でござりまする」

お銀様は、怖れをそれから迷惑まで、刀はよくも見ないで挨拶だけをしました。

「いや、これしきの物、そなたの眼から結構と云はれては恥しい、そなたの家の倉や土蔵には此の位の刀や拵へは掃いて捨てるほど轉がつてゐる筈じや、神尾の家ではこれだけの拵へも自慢になる、ナニ多寡の知れた鑄の象眼、縁頭の臙銀が何だ、小ぼけな金無垢……」

主膳は自慢で見たものを嘲けり初めました。お銀様は自分の賞め方が氣に觸つたのかと思ひました。

「いゝえ、如何致しまして、このやうな結構なお差料が私共の家なんぞに……」

「無いであらう、そりや無い筈じや、この位結構な差料は、そなたの家は愚か、甲州一圓を尋ねても……いや、日本六十餘州を尋ねても、二本三本は手に入るまい、それを神尾が持つてる、それ故そなたに見せて進ぜたいと申すのじや」

「わたくし共なぞには拜見してもわかりませぬ」

「見るのはお忌か、折角拙者が親切に、秘蔵の名物を見せて上げやうとするのに、そなたは其れを見るのがお忌か」

「さういふ譯ではござりませぬ」

「然らば見て置かつしやい、よく見て置かつしやい」

主膳はお銀様の目の前で其の刀をスラリと抜き放ちました。

「あれ」

お銀様が驚いて飛び上がらうとするのを主膳は無手ご押へてしまひました。

「さあ、刀の自慢さいふのは拵への自慢ではない、拵へは悪くとも中身が宜ければ、それが眞寶の刀の自慢じや、お銀さの、そなたは今此の刀の拵へを結構なものじやさいふて賞めた、中身を見て貰ひたい、この位の縁頭や目貫は、そなたの家には箆で掃いて眞で捨てる程有らうけれど、この中身はかりは左様は參るまい、さい前も申す通り、甲州一圓は愚か、日本六十餘州を尋ねても二本三本は手に入らぬ自慢の神尾主膳が差料、誰にも見せたくはないものながら、外ならぬ和女のお目にかける、篤と鑑定がして貰ひたい」

神尾主膳はお銀様に刀を見せるのではなく、お銀様を捉へて刀を突きつけてゐるのであります。

「わたくし共なぞに、如何致しまして、御刀の拜見なぞが……」

「左様ではござらぬ、篤き御覽下されい」

「如何ぞ御免遊はしまして」

「刀が怖いのでござるか」

「如何ぞお引き下さいませ」

お銀様は鷹に押へられた雀のやうにワナ／＼と顔へるはかりであります。

「まことに刀の見やうを御存知ないのか」

「一向に存じませぬ」

「然らば、刀の見やうを拙者が御傳授申上げようか」

「後程にお伺ひ致しまする」

「後程……それでは拙者が困る、御遠慮なく此の場で御覽下されい、宜しいか、長さは二尺四寸、ちと長過ぎる故、摺上物に致さうかと思つたけれど、これほどの名物に鑢を入れるのも勿體無き故、このまゝ、拵へをつけた。この地鐵の細かに冴えた板見の波、肌の潤ひ」

「さうぞ御免遊はしませ、わたくし共にはわかりませぬ」

「美事な大灣れ、鑢が優れて匂ひが深いこと、見てゐるうちに何とも云はれぬ奥床しさ」

「わたくしは、もう怖くてなりませぬ」

「斬るご云つたら怖くもあらうけれど、見る分には怖い事はござらぬ」

「それに致しまして……」

「たゞ斯うして區から板目の肌に見れた模様を見てみた處では、その地鐵が何となく弱々しいけれど、よくよく見れば潤ひがあつて、何處ごなしに強い處がある」

「もう充分拜見致しました」

「また、潤ひがあつて、何處ごなしに強い處があつて、その上に一段ご高尙で、それから此の古雅な趣……よく見れば見るほど刃の中に模様がある」

「何卒御免遊はしませ」

「お銀ごの、そなたは此の刀にお見覚えはござらぬか」

「え、」

「この刀」

「え、このお刀に、わたくしが、さう致しまして」

「それ故に篤き御覽成されいご申すのじや、怖がつておゐでなさるはかりが能ではない、氣を落着けて御覽なされい」

「それに致しまして、さうしてわたくしが、このお刀を存じて居りませう」

「若し、そなたが知らぬならば、そなたの家の幸内さいふ者が知つてゐる、その刀が此れなのじや」

「え、」

「これは伯耆の安綱といふ古刀中の古刀、名刀中の名刀じや」

「え、これが伯耆の安綱」

「打ち返してよく御覧なされい」

こゝに至つてお銀様は一時恐怖の念がいづれへか飛び去つて、眼の前に突きつけられた伯耆の安綱の刀にすつと吸ひ寄せられました。お銀様が其の刀を凝と見つめてゐる時に、神尾主膳は片手で、近くにあつた朱塗の大盃を取つて引き寄せ、それに片手でまた酒を浪々注ぎました。

右の手では、やはりお銀様の前へ伯耆の安綱の刀を突き出して、左の手では朱塗の大盃を取り上げました。刀を見てゐるお銀様と盃の中に湛へられた酒とを等分に見比べてゐました。

「この刀は、これは、わたくしの家に傳はる伯耆の安綱の刀」

お銀様は斯う云つた時に、

「その通り」

神尾主膳は舌打をして大盃の中の酒をグツと傾けました。

「如何して之が貴方様のお手に」

「は、は、これを拙者の手に入れるまでには大抵な骨折ではない、今も云ふ通り、幸内の手から我物になつた」

「幸内が……」

「幸内から譲り受けた」

「それは何かの間違ひでございませう」

「さあ、それが何の間違ひでもないのじや。お銀さの、そなたは何も知らぬ、それ故、よく云つてお聞かせ申す、抑此の伯耆の安綱といふ刀は有野村の藤原家に傳はる名刀じや、日外拙者の宅で様物のあつた時、集まる者に此の刀を見せてやりたいから、それで幸内を嚇かして、ひそかに其れを持ち出させた、それはお銀さの、そなたもよく御存知の筈……いや、幸内の持参した此の刀を見るに聞きしに勝る名刀、急に欲しくなつて堪まらぬ故……幸内から譲り受けた」

「それは間違ひでございませう、幸内には、わたくしが父に内密で三日の間貸してやつたものでございませう、それを人様にお譲り申す筈がござりませぬ、その様な事をする幸内ではござりませぬ」

「それも其の通り、尋常では幸内が拙者に譲る氣遣ひもなし、拙者も亦、微祿して、恥しながら此の刀を譲り受ける丈けの金が無い、それ故に少し荒つばい療治をして此の刀を分取つた」

「エ、エ」

「は、は、驚いたか」

神尾主膳は二たび大盃の酒を傾けて咽喉を鳴らしながら、意地悪くお銀様の面を見つめて、しばらく黙つて居りました。

お銀様は此の時、下唇をうんご喰ひ締めました。さうして見る見るうちに其の面が土色になつて眼が釣り上るのでありました。

「幸内が、如何して幸内が此の刀を貴方様に差上げました」

「早く云へば奪ひ取つたのじや」

「エ、エ」

「幸内に酒を飲ましたのじや、その酒は毒の酒じや、それを飲ますと酔ひつぶれた上に聲がつぶれるのじや、それを飲まして置いて、幸内が手から此の刀を奪ひ取つておれの差料にしたのじやわい」

主膳は三たび大盃を上げて心地よく其の一杯を傾け盡しました。

「あ、あ」

さお銀様は面を屹と上げて、その釣り上がった眼で神尾主膳を睨みました。

「うむ、それからまた、幸内奴を種に傳つて一狂言を組まうと思ふて、縄でからけて此の屋敷へ隠して置いたが、手ぬかりでツイ逃げられた」

「あ、あ、知らなかつた、知らなかつた、そんなら此の刀を奪ひ取る爲に幸内に毒を飲ませてあんなにしたのは、神尾様、お前様の仕業か」

「それ〜」

「兎か、蛇か、人間としてようも〜、そんな事が……」

「まあ、お聞きやれ、そればかりではないわい」

「幸内の敵！」

お銀様は神尾主膳に武者振つきました。けれども其れは、やはりお銀様の逆上の餘りで、却て主膳の爲に荒らかに組み敷かれてしまつたのは是非ありません。

酔つてこそ居たれ、神尾主膳も亦刀を差す身でありました。お銀様が武者振ついたさて其で如何にもなるものではありません。

お銀様を片手で膝の下へ組み敷いた神尾主膳は落着いたもので、

「逸まるな〜、この屋敷へ隠して置いた其の幸内に逃げられたのは、拙者の落度じや、あれに逃げられては企んだ狂言がフイになり、その上に拙者の身が危ないから、それで拙者は苦心を重ねて、あれの行方を調べた上に、さう〜お銀さの、お前の屋敷に寝てゐるのを見届けた、それは、そなたが屋敷を脱け出して此方へ来たと同じ晩、あの晩に拙者は、忍んで行つて、そなたが屋敷を脱け出したあさへ忍び入り、そして幸内が息の根を止めて来た……」

「エ、エ、エ」

「は、は、は、その歸りにも、そなたに怪我の無いやうに、有野村から後をつけて来たのを、そなたは知るまい」

「それでは、あの晩に、あれからあゝして」
「はゝゝゝゝ」

主膳の酒亂が頂點にのぼつた時でありました。よし此れほど惨酷な男であつても、酔つてさへみなければ、此れほどの事を高言するでもなからうけれど、今は斯うして云へば云ふほど、自分ながら快味が増すのかと思はれるばかりであります。

お銀様の口から唇を噛み切つた血が染むのに拘はらず神尾主膳は高笑ひして、

「さあ、これから幸内が身代りに、お銀ごの、そなたが狂言の玉じや、幸内に飲ませたま同じ酒をそなたに今飲ませてやるのじや、幸内が飲んだやうに、そなたも其の酒を飲むのじや」

「助けて下さい——誰か、誰か来て下さいまし！」

お銀様は、遂に大聲で救ひを求めました。

「それ／＼、それだから酒を飲ませるのじや、その酒を飲むと痛くても痒くても聲が立たぬやうになるのじや、この小瓶に入つてゐるものを、ちよつと此の酒の中へ落して斯う飲まつしやれ」
神尾主膳は、刀は傍へさし置いて、片手ではお銀様の口を押へ、片手では、三組の朱塗の盃の一番小さいのへ酒を注いで、その上へ小瓶の中から何物かを落して、無理にお銀様の口を削つて飲ませようします。お銀様は、

「アツ、忌——誰か、誰か、来て——苦ッ」

「あ痛ッ」

神尾主膳が痛ッ云つて、お銀様に飲ませようとした小盃を盃の上へ取り落して、飛び上がるやうに手の甲を抑へたのは、今、必死になつたお銀様の爲めに、其處をしたゝかに食ひ破られたのであります。

「わたしは死ねない、また此處では死ねない、幸内、幸内、誰か、誰か、誰か来て……」

お銀様は飛び起きて梯子段を駆け落ちました。

「汝れ、逃がしては」

神尾主膳は、さし置いた伯耆の安綱の刀を持つて酔歩躑躅として、逃げて行くお銀様の後を追ひかけました。

梯子を駆け落ちたお銀様は、轉け落ちたのも知らず、直ぐに起き返つた事も知らず、何處を如何に逃げてよいかも知らず、たゞ白刃を提げて追ひかける悪魔に追ひ迫られて、廊下を曲つて突き當りの部屋の障子を押し開いて逃げ込みました。

お銀様が逃げ込んだ其の部屋には炬燵がありました。

その炬燵には横になつて、人が一人、うたゝ腰をして居りました。それに氣のついた時に神尾主膳はもう白刃を提げて此の部屋の入口の處まで来てゐました。

「あゝ、貴方は善い人か悪い人か知らない、わたしを助けて下さい、わたしは此處では死なませ

お銀様はその横にうたゝ寝をしてゐた人の首に、しつかさしがみつきました。

机龍之助は此の時眼が醒めました。眼が醒めたけれども、此の人は眼を聞くことの出来ない人です。たゞ我が首筋へ、しがみついた其の者の聲は女である事を知り、龍之助の首を抱へた腕は火のやうである事を知り、その頬に觸れる血の熱さも火のやうであることを知つたのみです。

「助けて下さい、神尾主膳は鬼でございませぬ、わたしは殺されても構ひませんけれど、神尾主膳の手にかゝつて殺されるのは忌でございませぬ、貴方様は善いお方たか、悪いお方たか知れないけれど、わたしを助けて下さい、助けられなければ、貴方のお手で殺して下さい、わたしは神尾主膳に殺されるよりは知らない人に殺された方が宜しいでございます」

この言葉も息も共に炎を吐くやうな熱さでありました。

「神尾殿、悪處をなさるな」
龍之助は此處で起き直らうとしました。併しお銀様の腕は龍之助の身體から離れる事はありません。龍之助は其れを振り放さうとした時にお銀様の亂れた髪の毛の軟らかい束が、龍之助の面を埋めるやうに群がつてゐるのを知りました。

「はゝゝゝ」

神尾主膳は敷居の外に立つて高らかに笑ひました。その手には、やはり伯耆の安綱を提げてゐましたけれど、その足は廊下に立つて、その面は此方に向いたまゝで一步も中へは入つて來ませんでした。

「助けて下さい」

お銀様は、龍之助の蔭に隠れました。蔭に隠れたけれども、しつかり龍之助に抱きついてゐるのであります。若しも神尾に斬られるならば此の人と一緒に……お銀様は、さうしても自分一人だけ神尾に斬られるのでは死んでも死にきれないさ、たゞそれだけが一念であります。

「如何するつもりじや」

それは龍之助の聲でありました。例によつて冷たい聲でありました。如何するつもりじや、さ云つたのは、それは刀を提げて立つてゐる神尾主膳に尋ねたのか、それとも自分にかじりついてゐるお銀様の舉動を嗜めたのか、さちらか解らない言ひぶりでありました。聞きようによつては何方にも聞き取れる言ひ振でありました。

「はゝゝゝ」

酒亂の神尾主膳は、またも聲高らかに笑つて、

「脅かして見たのじや」

「悪い癖だ」

龍之助は其れより起き上らうともしませんでした。神尾主膳も亦一步も此の部屋の中へは足を入れないで、突立つたなりでニヤ／＼と笑つてゐましたが、

「は、は、は、」

高笑ひして、足許もしごろもごろに廊下を引返して行くのであります。

その足音を聞いてゐた机龍之助が、

「あの男は、あれは酒亂じや」

と云ひました。

「有難う存じまする、有難う存じまする、貴方様のお蔭で危ない處を……」

お銀様は、たゞ無意識にお禮を繰り返すことのみを知つて居りました。

「お前様は」

「はい、わたくしは」

と云つてお銀様は龍之助の面を見るこゝが出来ました。けれども、わざと眼を塞いでゐる此の人の物静かなのを見ただけでありました。お銀様は、その時に、はつと思つて自分の姿の淺ましく亂れてゐる事に気がつかないわけには行きませんでした。髪も亂れてゐるし、着物も亂れてゐるし、恥しい肌も現になつてゐるものを。

それを見まいが爲に、この人は、わざと眼を塞いでゐるのではないかと思はれました。

お銀様は、あわて、自分の身を掻いつくろひましたけれど、其れでもなほ何かの恥しさに堪へられないやうでした。

お銀様も、さすがに若い女であります。この怖れと怒りと驚きとの中にあつて、なほ自分の姿と貌の取り亂したのを恥しく思ふの餘地がありました。

それから髪の毛を撫で上げました。着物の襟を合せました。

それを見て見ぬふりをしてゐる、この人は神尾主膳とは違つて奥床しい處のある人だと思はせられる心持になりました。

前へ廻つて、しごやかに両手を突きました。

「如何ぞ、わたくしをお逃がし下さいまし、お願ひでございまする」

その聲はしほらしいものでありました。起き直つたけれども、やはり炬燵にあたつてゐた机龍之助は其の聲を聞いても、また眼を開くことをしません。

「如何ぞ、このまゝわたくしをお逃がし下さいませ」

お銀様は折り返して、机龍之助の前に助命の願ひをしました。けれども龍之助は、やはり眼を開くことをしないし、また一言の返事をも與へないのでありました。それでもお銀様の言葉は、よく耳を傾けてゐるには違ひありません。

「あゝ、わたくしは一刻も此の家に斯うしては居られぬのでござりまする、神尾主膳は悪人でご

ざりまする、斯うして居れば、わたくしは幸内と同じやうに殺されてしまうのでござりまする、貴方は如何いふお方が存じませぬが、さうか此のまゝお逃がし下さいまし一生のお願いでござりまする」

お銀様は龍之助に歎願の餘り、伏し拜むのでありました。けれども龍之助は眼を開いて其の可憐な姿を見ようともしなければ、口を開いて、逃げることも助けることも云ひませんでした。たゞお銀様の一語一語を聞いてゐるうちに其の面に見る／＼沈痛の色が漲り渡るのみでありました。

「それでは、わたくしは此のまゝ御免を蒙りまする、いづれまた人を御挨拶に遣はしまする」お銀様は惶惶として此の部屋を立つて行かうとした時に、龍之助がはじめて、

「お待ちなさい」

と云ひました。

「はい」

お銀様は立ち止まりました。

「これから何處へお出でなさらうさいふのじや」

「はい、有野村まで」

「有野村へ……外は近來の大雪であるらしいのに」

「雪が降りませうとも雨が降りませうとも、わたくしは歸らずには居られませぬ」

「外は雪である上に、駕籠も乗物も此處にはあるまい」

「そんな物は如何でも宜しうござりまする、わたくしは逃げなければなりません、歸らなければなりません」

「駕籠も乗物もないのに、外へ出れば人通りもあるまい、道で吹雪に打たれて凍えて死ぬ……」

「ださへ、凍えて死にましても、わたくしは……」

「そりや無分別」

「あゝ、思慮も分別も、わたくしには判りませぬ、斯うして居られませぬ、斯うしては居られぬわいな」

「待て、ご申すに」

龍之助の聲は寒水が磐の上を走るやうな聲でありました。お銀様はゾツとして立ち凍んでしまいました。見れば此の人はまた眼を開かないけれど、炬燵の中から半身を開いて傍に置いた海老鞘の刀を膝の上まで引き寄せてゐるのでありました。

その構へは、動かば斬らんといふ構へでありました。その面の色は斬つて血を見ようとする色でありました。

「あゝ、あゝ、貴方様も、やつぱり悪い人、神尾主膳の同類でござんしたか、あゝ、わたくしは如何したら宜うございませう」

主膳に脅かされた時は少くとも抵抗するの氣力がありません。また其の人に追はれた時も逃げる隙がありました。ひざり此の異様な人の前にあつては身の毛が竪立つて動かうとしても動けないで、張り合はうとしても張り合へないで戦慄するのみです。

この時門外が噪がしく多くの人が、此の古屋敷へ來たらしくあります。

それは乗物を持つて神尾主膳を本邸から迎へに來たものであります。酔ひ伏してゐた主膳は其迎へを受けるや倉皇として、其乗物に乗つて本邸へ歸つてしまひました。それで此の古屋敷は主人を失つて全く静寂に歸してしまひました。

机龍之助は、また炬燵槽の中へ兩の手を差し込んで、首をグツタリと蒲團の上へ投げ出して、何事も無く寝た形でありました。お銀様は其前に伏して面を埋めて、忍び音に泣いてゐるのであります。外の雪は、またくぐり敷むべき模様もなく、時々吹雪が裏の板戸を搥で、通り過ぎる、ボタ／＼と雪の塊が積込の梢をたつて庭へ落ちる音が聞えます。

「幸内さんいふのは、ありや、お前様の兄弟か」

「いゝえ、雇ひ人でござりまする」

龍之助は轉寢をしながら靜かに尋ねる、お銀様は忍び音に泣き伏しながら辛うじて答へました。

「雇ひ人」

龍之助は斯う云つて、しばらく言葉を休んでゐました。

「幸内が可哀相でござります、幸内が可哀相でござります」

お銀様は、また泣きました。

「一體、神尾はあれを如何しようといふのだ」

「神尾様は幸内を殺してしまひました、あの人が企んで幸内を殺した上に、わたくしを欺して、わたくしの家を乗取らうといふ悪い企みださうでござります」

「神尾のやりさうな事じや」

さ云つて龍之助は敢て其の悪い企みを聞いて驚くのもありませんでした。また神尾の其の悪い計畫に同意してゐるものとも思はれませんでした。それですから、お銀様に如何も此の人がわからなくなつてしまひました。

「貴方様は神尾様のお友達でござりますか、御親類のお方でござりますか、神尾様のやうな悪いお方ではござりますまい、幸内を苛めたやうに、わたしを苛めるやうな、そんな悪いお方ではござりますまい、そんなお方は思はれませぬ、貴方様は、もつとお情深いお方でござりませう、さうか、わたくしをお遣がし下さいまし」

「はゝゝ、わしは神尾の友達でもないし、もさより身寄でも親類でもない、お前方と同じやうに、神尾主膳の爲に囚へられて、この古屋敷の番人をしてゐるのじや」

「エ、それでは貴方様もやつぱり神尾の爲に」

「擇處なく斯うしてゐる」

「お宅は何方でございます」

「ちと違い」

「御遠方でございませうか」

「武藏國」

「そんなら、あの、此方の大菩薩峠を越ゆれば其處が武藏の國でございませう」

「あゝ、さうだ」

龍之助は荒つぽく返事をしました。お銀様は黙つてしまひました。

「成程、大菩薩峠を一つ越せば武州へ入るのぢやわい、道のりにしては幾らも無いけれど、おれには歸れぬ、歸つて呉れと云ふ者も無いけれど、あゝ、子供が一人ゐる、親の無い子供が泣いてゐる」

龍之助は炬燵の七から頭を持ち上げました。子供が一人ゐる、親の無い子が泣いてゐる、これはまた何さいふ取つても附かぬ遺憾であらう。この人にして此んな言、その面を見るに冷かな蒼白い色に云ふはかりなき苦悶の影があり／＼と現はれましたけれど、それは電光のやうに掠めて消えてしまひました。

消えないのはお銀様の眼の前に、前の晩、穴切明神のあたりで泣いてゐた男の子、親は何者かの

爲に斬られて非業の最後。一人泣いてゐた、あの子は如何なつた——さいふ事があります。

お銀様は机龍之助の傍に引きつけられてゐました。

日が暮れるまで其處で泣いてゐました。日が暮れると其の屋敷の小使が食事を運んで、いつもの通り其の次の間まで持つて来て置きました。

龍之助は夕飯を食べましたけれども、お銀様は食べませんでした。

夕飯を食べてしまつた後の龍之助は障子を開けてカラ／＼と格子戸を立てました、外の雨戸の外に、この座敷には狐格子の丈夫な障子がまた一枚あります。その格子戸を立て切ると龍之助は二箇所ほどピンと錠を下ろしてしまひました。

何の事はない、それは座敷牢と同じことです。

其處で龍之助は、また炬燵へ入つてしまひました。

お銀様は泣いて居りました。斯うして夜は次第に更けて行くはかりです。

夜中にお銀様は物におびやかされて、

「あれ、幸内が」

と云つて飛上りました。

やはり轉寢の形であつた龍之助は其の聲で覺めると、その見えない眼にバツと鬼火が燃えました。

「幸内が……」
お銀様は再び龍之助に、すがりつきました。お銀様は何か幻を見ました。幸内の形をした幻に驚かされました。

机龍之助も亦何者を見ました。何者かに襲われました。お銀様を抱えて隠さうとしました。龍之助を襲ひ來つたものは神尾主膳ではありません。宇津木兵馬でもありません。

前に幸内を入れて置いた長持の中から、茶碗ほどの大きな綺麗な二ツの蝶が出ました。何も見えない筈の龍之助の眼に其の蝶だけはハッキリ見えました。

蝶は雌蝶と雄蝶との二つでありました。然もその雄蝶は黒く雌蝶は青いのまで龍之助の眼には判然として現はれました。

お銀様を片手に抱えた龍之助は、その蝶の行方を凝と見てみました。雄蝶と雌蝶とは上になり下になり長持の中から舞ひ出でました。やゝ上つてまた下りました。その二つは戯れてゐるのではなく食ひ合つてゐるのでありました。

非常に恐ろしい形相をして雌蝶と雄蝶とが噛み合ひながら室内を上になり下になり狂ひ廻るのでありました。

「あゝ、幸内が可哀相……」

とお銀様が慄え上がる其の頭髮の上で二つの蝶が食ひ合つてゐました。龍之助はいよいよ判然

と其の蝶が透き通るやうに見えるのであります。蝶の噛み合ふ齒の音までが歴々々々聞えるのであります。

「あゝ、幸内が此處へ来た」

お銀様は、雌蝶と雄蝶とも云はない。龍之助は幸内の姿を見てゐるではありません。

この二つの蝶は夜もすがら、此の座敷牢の中を狂つて狂ひ廻りました。龍之助は此の蝶の爲に一夜を眠ることが出来ませんでした。お銀様は此の蝶ならぬ幸内の幻の爲に一夜を眠ることが出来ませんでした。

夜が明けた時にお銀様は、さう云ひました。

「あゝ、貴方はお眼が見えない、お眼が見えないから、わたしは嬉しい」

龍之助とお銀様との縁は悪縁であるか善縁であるか、たゞし悪魔の戯れであるかは、わかりません。

けれども甲府あたりの町の人にはこれが幸でありました。その當座、机龍之助は辻斬に出ることをやめました。甲府の人は一時の物騒な夜中の警戒から解放されることになりました。

お銀様は龍之助と共に暫らく此の座敷牢の中に暮らす事を満足しました。龍之助は、このお銀様によつて甲府の土地を立ち退くの約束を與へられました。

神尾主膳が歸國ヶ崎の古屋敷から、あわて、歸つた時分に、駒井能登守はまた、こつそりと其の屋敷へ戻つて來ました。

出て行つた時には都合四人であつたのが歸つた時は二人きりです。その二人は當の能登守と、それから跟いて行つた米友とだけです。

「米友」

能登守が米友を顧みて呼ぶと、

「何だ」

米友は上眼使ひに能登守の面を見上げて、無愛想な返事です。

「大儀であつたな」

「ナニニ」

米友は眼を外らして横を向いて、能登守の勞らう言葉を好意を以て受取らうとしません。屋敷に着いた時も、表から入らずに裏から入りました。

出て行つた時でさへ、家來の者も氣が附かなかつた位だから、歸つた時には、なほ氣がつく者がありませんでした。

主人を送り込んだ米友は、その鐵砲を擔いたまゝで、チロリと主人の入つて行つた後を見送つてあました。

「お歸り遊はせ」

と云つて迎へたのは女の聲であります。女の聲、しかもお君の聲であります。その聲を聞くとき米友は眼をクル／＼と光らせて、大戸の中を覗き込むやうにしました。けれども主人能登守の姿も見えないし、お君の姿も見えません。二人の姿は見えないけれど、其の聲はよく聞えます。

「よく降る雪だ」

「この大雪に、何方までお出で遊はしました」

「龍王の鼻へ雪見に行つて來たのじや」

「ほんまに殿様はお好奇でおゐで遊はす」

さういふお君の聲は晴やかな聲でありました。

「は、は、これも病じや」

能登守も大へんに御機嫌が宜しい。

「また御家來衆に叱られませう、お好奇も大概に遊はさぬぞ」

「それ故、こつそりと此の裏口から歸つて來た、併し誰に叱られても、此の大雪では靜止として居られぬわい……留守中、あの病人にも變る事は無かつたか」

「よくお休みでございます、気分もお宜しいやうで」

「それは何より、さあ、これがお前への土産じや」

「まあ、これをお打ち遊はしたのでございますか」

「さうじや、荒川沿の堤の蔭で」

「可哀相に」

「これはしたり、そなた殺生は嫌ひか」

「殺生は嫌ひでございますけれど、殿様のお土産ならば大好でございます」

「は、他愛ないものじや」

「あの、お風呂が、よく沸いて居りますが、お召しになりましたは」

「それは有難い、では此のまゝ風呂場へ」

「御案内を致しまする」

米友は、大戸の入口から洩れて来る此れ等の會話をよく聞いてゐました。大戸の中をやゝ離れて覗き込むやうにしてゐたが、その額に覺れた小皺のあたりに雲がかゝつて、その眼つきさへ米友さしてはやゝ峻しい位です。

そこで話が断えたけれども、この會話の間にも、お君の口からも能登守の口からも、米友といふ名前は一言も呼ばれませんでした。遺憾ながら「友さんも歸りましたか」といふ言葉が、お君の

口からは出ないでしまひました。それで二人は風呂場へ行つてしまつたやうでした。米友は大戸の入口から、また中を覗んで立つてゐます。

それから米友は軒下を歩いて自分の部屋へ歸らうとする時に、

「誰たい、その節穴から此の屋敷の中を覗いてゐるのは誰たい」

と云つてまた立ち止まつて扉を覗きました。

「また折助の奴等たらう、誰に斷わつて其處から此方を覗くんた、やい、鐵砲を打放して呉れるぞ」

オドかすつもりであらうけれども、米友は擔つてゐた鐵砲を肩から卸しました。

米友が推察の通り、此の扉の外から中を隙見をしてゐたのは折助でありました。折助が三人はかり先刻から節穴を覗いてゐたのを、米友に見つけられて彼等は丸くなつて雪の中を逃げました。

折助は雪の中を、こけつ轉るびつ逃けて、さうく八日市の酒場まで逃げて來ました。これは經暖簾の大きいので、彼等の俱樂部であります。

彼等三人が此の八日市の酒場へ逃げ込むと、其處には土間の大圍爐裏を圍んで、定連が濁酒を飲んだり、芋を突ついたりして、太平樂を並べてゐる最中でありました。

前にも言ふ通り、折助の社會は人間並の社會では無いのであります。人間並の人の恥づる事が此の社會では譽なのであります。これ等の人間が、若し女を引つれて此の酒場へ來やうものならば、

「戀の勝利者！」

と云つて彼等は喝采します、如何かして心中の半分もやり出すものがあるを、彼等は喜悅に堪へないで雙手を舉げて躍り狂うのであります。

「偉い！楠公以上、赤穂義士以上、比翼塚を立てる！」

さういふやうな事になるのであります。

けれども亦、伶俐な人は折助を巧く利用して、評判を立てさせたり露見をさせたりするのであります。それによつて多少成功する者もありませんでしたけれども、やつぱり折助の立てた評判は折助以上に出でないことを知るやうになりました。

今、駒井能登守の屋敷を覗いて、米友に叱り飛ばされた折助も、恐らくは誰かに利用されて、隙

見に來たものでありませうが、此の酒場へ逃げ込むと大急ぎで熱酎を注文して飲みました。

こゝでは前からガヤ／＼と折助連中が馬鹿話をして居りましたから、新たに逃げ込んだ三人の語聲も、夫に紛れて何を話したのかわかりませんでした。彼等は惣榮で熱酎を引かけるに長くは此の場に留まらないうで、また三人打つて飛び出してしまひました。それで彼等は雪の中を威勢よく驅け出して、二丁目を眞直に飛んで、やがて役割の市五郎の屋敷へ飛び込んでしまひました。

それはさうして、米友は彼等を叱り飛ばして、また鐵砲を擔いで自分の部屋として宛がはれた

處へ來て、鐵砲を卸して大事に立てかけて、それから袋を脱いで外へ向けて、よく振りました。袋に積つてゐた雪をバツバと振つて壁へかけ、それから、腰を卸して雑巾で足を拭きはじめました。

足を拭いてゐる時も、米友の面は曇つてゐました。そこへ不意に鼻を鳴らし、尾を振つて現れたのはムク犬であります。

「ムク」

米友は足を拭きかけた雑巾の手を休めてムク犬をながめました。

「雪が降ると手前も機嫌がいゝな」

ムクは米友の前に膝を折つて兩手を突くやうにして、米友の面をながめました。

「今、飯を食はせてやるから待つてゐろ」

米友は足を拭き終つて上へあがりました。

「ムクや、手前は良い犬だ、何處を尋ねても手前のやうな良い犬は無えけれど、やつぱり犬は犬だ、外を守ることは出来ても、内を守る事が出来ねえんだな」

と云ひながらムクの面を見てゐた時に、ふと氣がつけば、その首に糸が巻いてあつて糸の下には結び状が附けてあるのを認めました。

「おや」

さ米友は其の結び文に眼をつきました。して見ればムクは食事の催促に此處へ来たのではなく、此の結び文を届ける爲に此處へ来たものさしか思はれません。

「誰たらう、誰が此んな事をしたんたらうな」

さ云つて米友は不審の眉を寄せながら、ムクの首から其の糸を外して結び文を取り上げました。兎も角も、ムクを捉まへて此んな手紙のやり取りをしようといふ者は、米友の考へではお君の外には思ひ當らないのであります。けれども其のお君ならば何も、わざ／＼こんな事をして自分の處へ手紙をよこさねはならぬ必要はない筈であります。お君の外の人で、こんな使を犬に頼む者があらうとは、米友には思ひ當らないし、ムク犬も亦他の人に、こんな用を頼まれるやうな犬ではない筈であります。

米友は、いよ／＼不審の眉根を寄せながら、遂に其の結び文を解いて見ました。讀んで見るさ文句が極めて簡單なものであつた上に、然も餘の誰人に來たのでもない當に自分に宛て、來たもの

「米友さん裏の潜り戸を開けて下さい」

さ書いてあるのであります。

「譯らねえ」

米友は、その文面を見ながら、いよ／＼困惑の色を面に現しました。それは確に女の手でありま

す。女の手筆で美事に認められてあるのであります。

「愈、わからねえ」

米友の知つてゐる唯一のお君は手紙の書けない女であります。この頃、内密で文字の稽古はしてゐるらしいが、それにしても、こんなに美事に書ける筈は無いのであります。そのお君を別にして……まさか米友を見初めて附文をしようといふ女があらうとは思はれません。

「誰かの影だ」

さ疑つて見ても、此のムク犬がそんな悪戯の中立ちに立つやうなムク犬でない事によつて、打ち消されてしまうのであります。

「ムク、兎も角もまあ案内して見ろやい」

米友は下駄を突つかけました。ムク犬は其の先に立ちました。

これより前の晩に、ムク犬は此れと同じやうにして米友さお君を引合せました。今はまた別の何者をか米友に引合せやうとするらしいのであります。

けれども其の潜り戸を開ける爲には、是非共一度お君の部屋まで行かねはならないのであります。お君の部屋に其の鍵があるのですから。

米友は此の頃、お君の部屋へ行くことを忌がります。其の前を通ることさへ忌々しがる事があります。けれども今は仕方がないから番傘を擴げて庭へ廻つて、そつとお君の部屋へ入りました。

其處にはお君は居ませんでした。留守の間は化粧の道具が一杯に取り散らされてありました。米友の面には見る／＼不快の色が満ち渡つて、壁にかけてあつた鍵を引たくるやうに手に取りました。

紅や白粉や軟かい着物を脱ぎ捨てられたのを見た米友は、其の場を出るに物凄く眼つきで湯殿の方を睨みながらまた番傘を握りました。ムク犬は常に變つた容子もなく、米友を扉の潜り戸の方へ導くのであります。

米友が裏の潜り戸を開けて見ただけで、其處には誰も立つてゐませんでした。

米友は往來を見廻したけれども、雪が降つてゐるばかりで、誰も居ないし、通る人もほごんご稀であります。

こいつは、やつぱり欺がれたかなと思つて、首を引込めるに、ムクが勢よく外へ飛び出しました。ムクが此方から飛び出すと一緒に向ふの木蔭から蛇の目の傘が一つ出て來ました。雪は掃いてある處もあり、掃いて無い處もあるから歩きづらい中を、蛇の目の傘を傾けて足許危なげに此方へ歩んで來るのは女でありました。面は見えないけれども、その着物と足許でまた若い女の人であるといふことが米友にもよくわかりました。

其の人の傍へ飛んで行つたムクは、丁度それを迎へに行つたやうなものです。誰たらうと思つて米友は、その傘の中を早く見たいものたと思ひました。

「米友さん」

と云つて、直ぐ眼の前へ來てから、傘を取るのと言葉をかけるのと一緒に一緒であつた、その人の面を見て、

「やあ、お前はお嬢さんだ」

と米友が云ひました。

お嬢さん、と米友が云ふのは、それはお松の事でありました。お松と其の伯母さんといふ人を米友は江戸から笹子峠の下まで送つて來た縁があります。

「米友さん、久しぶりでしたわね」

とお松が云ひました。

「ほんごに久し振だな、お前さん、如何して俺等が此處にゐる事がわかつた」

「さつき、ちよつと見かけたから、それで」

「では、ムクの首へ手紙をつけたのもお前さんだね」

「さうよ」

「そんな事をしなくても、表から尋ねて下されはいゝに」

「それがさう行かない譯があるから、それであんな事をしたの、米友さん、お前に内密で頼みた事があるのだけれど、少しの間、外へ出て貰へないの、さうで無ければ、わたしの中へ入れて

話を聞いて貰ひたいのだけだ」

「うむ、さうさなあ」

と云つて米友は少しく考へて居ましたが、

「俺等は、ちよつと外へ出るわけには行かぬえんだ」

「では米友さん、後生だけだ、此方のお屋敷の誰にも知れないやうにして、お前さんの部屋か何かへ、わたしを通して下さいな、そこで是非お前さんに話をしたいことがあるんだから」

「そりや構はねえ、俺等の部屋で宜ければ、お寄んなさるがい、うゝん、誰にも見られやしねえ、見られた處で、何も痛い事も痒い事も有るめえじやねえか」

「をかした米友さんの事、それは痛くも痒くもないけれど、少し都合があつて誰にも見られたくないのだから、そのつもりで」

「いゝとも、早く申へ入つちまひな、こゝを閉めるから」

お松は其のまゝ潜り戸をくゞつて庭の中へ入りました。米友は其のあさを閉して錠を下してしまひます。

「米友さん、わたしは如何しようかと思つたけれど、お前さんが、簀を着て鐵砲を擔いで裏門を入つて行く姿を見たものだから、こんな仕合せな事は無いと思つて、如何かしてお前さんが、もう一べん出て来るのを待つてゐようぞ、さつきから此の通りを二度も三度も歩いてゐるうちに、

この犬がお屋敷から出て来たものだから、ほんごにいゝ鹽梅でした」

米友はお松を己れの部屋へ案内して、爐の火を焚きました。

「米友さん」

改まつてお松は米友の名を呼びます。

「何だ」

米友は眼を圓にしました。

「わたしが、お前さんに聞きたいことゝ、それから頼みたい事さいふのは、あの、お前さん、此處のお屋敷にお客様がお有りませうね」

「お客様」

「え、え」

「そりや、これだけのお屋敷だからお客様も有るたらうさ」

「いゝえ、そのお客様さいふのはね、人に知れては悪いお客様なのよ」

「はゝゝゝ、米友は苦笑ひして、

「人に知れて悪いお客様なら、俺等にも知れやう筈が無し、お嬢さん、お前にたつて知れる筈が無からうじやねえか」

「それでも、わたしにはよく知れてゐるのよ」

「知れてるなら俺等に聞かなくつてもいゝじやねえか」

「米友さん、お前さんは相變らず理窟を云ふから可けません」

「たつて」

「そのお客様はお前……牢から出た人なのよ」

お松が四邊に氣を置いて小聲で云ふと、

「エ、エ」

米友が、やゝ狼狽しました。

「そのお客様が……」

「知らねえ、俺等は知らねえ」

米友は首を左右に振りました。

「知らないたつてお前、わたしにはよく解つてゐるのだから、隠しても仕方がないのよ、牢から出たお客様が三人ほど、たしかに此のお屋敷に隠れてゐる筈」

「エ、エ」

米友はお松の面を凝ま見ました。

「米友さん、これはわたしの外には誰も知つてゐる人はないのだから心配しないやうに、さうして其の三人の中で、一番若い方に、これを差上げていたゞきたいの」

「何だ、それは」

「お薬」

「薬が如何したんだ」

「如何か、これをお前さんの手から、その若いお方に差上げて下さい、頼みます」

「う——む」

さ云つた米友は腕を拱いて考へ込んでしまひました。

「それからね、米友さん、いつでもいゝから其のお方に、わたしを一度會はせて下さいな、そつと、誰にも知れないやうに、わたしの處へ言傳をして下さいな」

「う——む」

「後生だから頼みますよ、その代り、わたしはまたお前さんの頼みなら何でもして上げますから」

「う——む」

「米友さん、お前さんは、うん／＼さ云つてゐるけれど、承知して呉れたのかへ、承知して呉れないのかえ」

「う——む」

「後生だから」

「お嬢さん、俺等はホンさに知らねんだ、此のお屋敷に、さんなお客様が來てゐるか知らねえの」

たけれど……お前さんにさう云はれて見るに些さばかり心當りが無えでも無んだ、よし頼まれてやらう」

「有難う、拜みます」

「その若い人の名前は何か云ふんたい」

「それは……あの宇津木兵馬さういふの」

「宇津木兵馬」

米友は口の中で、その名を繰り返して、お松の手渡しする竹筒入の薬を受取りました。お松は喜びと感謝で米友を拜みたい位にしてゐるのに拘はらず、米友の面には、やはり前からの曇りが取り拂はれてみません。

お松は米友に呉々も此の事を頼んで置いて、またこつそりさ傘をさして前の潜りから歸りました。お松が神尾の邸の前まで來かゝつた時分に雪を蹴立て、十數人の人が南の方から駈けて來て此の門内へ入り込みました。

あまり其の事が、あわたゞしいので、お松は暫らく立つて容子を聞いて居りました。

「失敗々々」

口々に此んな事を云ひ居ります。

「何うした、各々方」

酔つてゐるらしい主人の神尾が聲。

「物の見事に出し投げを食つた、今までかゝつて雀一羽も獲れぬ、何處を如何したか、目當の鶴は、もう巢へ歸つて風呂を浴びてゐるさうじや」

「此奴が、此奴が」

神尾主膳は、椽板を踏み鳴らしてゐるやうです。それから大勢の罵り合ふ聲、神尾の酔に乗じて叱り飛ばす聲、それが濟むさまた十餘人の連中が、トットと門を走せ出して何處へか飛んで行きます。

七

宇津木兵馬は駒井能登守の二階の一室に横はつて病に呻吟してゐました。

兵馬の病氣は肝臓が痛むのであります。それに多年の修業の辛苦と獄中の冷えや何かゞ一時に打つて出たものが見えます。

こゝへ來てから、ほんの僅の間であつたけれども、手當がよかつたせいも、元氣のつく事が著るしいのであります。今も痛みが退いたから、横になつてゐる枕を換へて仰臥して天井を見てゐました。

駒井能登守とは何者、南條、五十嵐の兩人は何者——さういふことを兵馬は天井を見ながら思ひ浮

べて居りました。

能登守の語る處によれば南條の本姓は眞理といつて北陸の浪士であるとの事でありました。能登守とは江戸にある時分、砲術を研究してゐた頃の同窓の友達であつたといふ事です。

また五十嵐は東北の浪士であるといふ事です。二人は相携へて上方から此の甲州へ入り込んで来たといふ事です。能登守が笑つて云ふには、

あの連中はありや甲州の天嶮を探りに来たのじや、甲州の天嶮を利用して大事を成さうといふ計畫で来たものじや、いくら今の世の中が亂れたからさて、あの二人の力で甲州を取らうといふのはちと無理じや、けれども其の志だけは相變らず威勢がよい、一體、今の浪人達は、あゝして日本中を引掻き廻すつもりである處が可愛い、徳川の旗本に、せめてあの位の意氣込が二人あれば……。

能登守は兵馬に向つて此んな事を云つて聞かせました。

彼等は甲州の天嶮と地理を探つて何か大事を爲すつもりであつたものらしい。それが現はれて捉まつて此牢へ入れられたものらしい。牢を破つて此處へ逃げ込んだ事は我人共に幸であつたけれど、我々を斯うして隠して置く駒井能登守といふ人の爲には幸だか不幸かわからないと思ひました。

能登守は、もう無事に南條と五十嵐の二人を此の邸から逃がしてしまつた。この上は御身一人で

ある。こゝにゐる以上は安心して養生するが宜いと親切に言つて呉れました。兎も角も、南條といひ、五十嵐といひ、それに自分といひ、金箔附の破牢人である事に相違ない。その金箔附の破牢人である自分達を、公儀の重き役人である能登守が逃がしたり隠して置いたりすることは、可成り奇な事に考へられないわけには行きません。

砲術にかけては此の能登守は非常に深い研究をしてゐるこの事を聞きました。それとは別に能登守は醫術に相當の素養があることも兵馬には、直ぐにわかりました。

肝臓が痛むといふ事も、兵馬が云はない先から能登守は見えて呉れました。これが肺へかゝると一大事だといふ事、併し、今は其の憂ひはないといふ事をも附け加へて慰めて呉れました。南條や五十嵐も可なり奇異なる武士であつたけれど、此の能登守も少しく變つた役人と思はせられます。そのうち、此の人に委細を打ち明けて、自分の本望を遂げる便宜を作らうと兵馬は思ひましたけれど、また其れを打ち明ける機會を得ません。兵馬は能登守の事を思ふと共に、それよりも亦因縁の奇妙なる事は、曾て自分が其の病氣を介抱してやつた事のあるお君といふ女が此の邸に奉公してゐて、それが今自分の介抱に當つてゐるといふ事でありませぬ。兵馬は能登守の次にお君の面影を思ひ浮べて居りました。

それやこれやと、人の面影を思ひ浮べてゐるうちに、またうごくさ眠くなつて、そのまゝ、快き顔りに落ちて行きました。

や、あつて宇津木兵馬は何物かの竹音によつて夢を破られ、眼を開いた時、障子を締めて廊下を渡つて行く人の足音を聞きました。多分、食物か薬を、例のお君が持つて来て呉れたものたらうと思つて枕許を見ました。

枕許には竹の筒が置いてあります。その竹の筒には風糸が通してあります。風糸の一端に結び女のやうなものが附いてゐることを認めました。

今まで此んなものを持つて来たことはないのに、何もことわり無しに、ちよこなんぞ、これだけを置き放しにして行つてしまつた事が兵馬には何たか、可笑しく思はれるのでありました。

さう思つて考へて見ると、今、これを置き放しにして行つてしまつた人の足音が、さうも、いつも来て呉れるお君の足ざりではないと思ひ返されました。さいつて能登守の足音とは思はれませんが。

お君でなし、能登守でなしとすれば、その外に此處へ入つて来る人は無い筈である。自分の此處にゐる事さへ知つた人は無い筈である。さ思うにつけて、兵馬には今の可笑しさが多少の不安に感ぜられて来ました。

兵馬は手を伸べて其竹筒を取りました。手に取つて一通り見ると、それは最初にお松をして破顔せしめたと同じ記號によつて、病中の兵馬をも微笑させました。その一端には「十八文」と傍印がしてあるからです。

「十八文」の因縁は兵馬も亦微笑することが出来るけれども、それに就てもお松ほかに、立處に納得が行かないのは、此れが如何して此處へ来るやうになつたか、それと、もう一つは何者が此處へ持つて来たかといふことであります。

その不安を解決するには恰好な此の結び状、兵馬は少しく身を起き上らせて直に結び状の結び目を解きました。解いて見ると二枚の手紙が合せてあります。それを別々にして見ると、大きな方は例の道庵先生の處方箋でありましたが、小さな方は女文字であつたから、兵馬をしていさゞ不審の眼を睜ひらかせました。

道庵先生の「もろこし我朝に……」は兵馬も苦笑ひして、そつと側に置き、その女文字の一通を讀んで見ると、それはお松からの手紙でありましたから、兵馬も我を忘れて讀まないわけには行きません。餘り長い文句ではありませんでしたけれども、一別以來の大意が書いてありました。さうして今は神尾主膳の許にまでゐて、御身の上を案じてゐるさういふことが短いながらも要領を得て、まごころを籠めて書いて、それから是非一度お目にかゝりたいが、さうしたらお目にかゝれるたらうさの意味で、そのお返事を此のお薬の竹筒に入れて、友さんの手によつて返していただきますたいといふ事でありませぬ。

兵馬には、一々それが了解されました。お松の心持ちが充分にわかつて、有難いと思ひ嬉しいとも思ひましたが、たゞ何人の手によつて此の薬と手紙とが此處に持ち來されたかといふことは

大きな疑問です。

「友さんの手によつて」さあるけれども、其の友さんの何者であるかを兵馬は知ることが出来ません。随つて其の友さんなる者に頼むことも出来ません。そのうち、お君が見舞にでも来た時に聞いて見ようと思ひました。

兎も角も、これに對する返事を認めて置かうと兵馬は傍の料紙俵を引寄せましたけれど、少し疲れてゐる爲に、頭を休ませる必要からまた仰向けになつて眼を閉ぢてゐました。

昨日までの雪は晴れて、外は大へんに明るい。窓の下の庭では雪を掃いてゐる物音が、手にこるやうに聞えます。

やがて兵馬はお松の爲に返事の手紙を書いてしまつて疲れを休めてゐると、また窓の下で雪掃をしてゐるらしい人の聲です。その聲を聞くこともなしに聞いてゐると、

「俺等は一體、雪といふ奴は餘まり好かねんだ、降る時は威勢がいゝけれど、あこのザマと云つたら無えからな」

雪を掃除してゐる人が口小言を言つてゐるらしい。突糧食ツクイヌに云つてゐるけれど無邪氣に聞えて、自から可笑しい感じがします。

「道はヌカるし、固めて置けばジク／＼流れ出すし、泥と一緒一緒に混合くわんごになつて白粉が剥けて、痕面あとを露出したやうな此のザマと云つたら」

雪を目の敵かたにして頑こごなしにしてゐるやうです。併し乍ら聞いてゐると何となく前に聞いた事のあるやうな聲でありました。誰であつて何時會つた人だか、ちよつと見當がつかないけれども、慥に兵馬の耳に一度は聞いた事のある聲だと思はせられました。ふとお松の手紙にある友さんといふのは此の人の事ではないかと思はせられました。さうかも知れない、いつまでも此の二階の窓の下で、口小言を云つてゐる事が意味のあるやうに取れば取れる。兵馬は其の容子を見ようと思つて、寢床を起きました。

二階から障子を細目に開けて見ると、成程一人の男が頼りに、ブツ／＼云ひながら雪を掻いてゐます。

兵馬が見ると、其れは米友であつたから意外に感じないわけには行きません。伊勢の古市の町と、駿河の國の三保の松原とで驚き見参した此の男を此處でまた見ようとは、たしかに意外でありました。米友、宇治山田の米友といふ名前も、兵馬は記憶してゐました。

「は、あ、友さんといふのはこれだな」

米友の友を呼んでお松が、さう云うたものに違ひないと兵馬は早くも覺りました。それと共に、さき程、此の藥の竹筒を運んで呉れた男が、あれだなと覺りました。兵馬も米友を珍妙な人物だと思つてゐます。その人物が珍妙であると共にその槍の手筋は非常なる珍物であることを知つて居りました。

そのうちに雪を掃除してゐた米友が、手を休めて二階を見上げて、

「雪さいふ奴は可愛くねえ奴だ、雪なんぞは降つて呉れなくても困らねえや、竹筒つぼうでも降つた方が宜つばさ宜いや」

さういふ事を口走りました。雪なんぞは降らなくてもいい、竹筒つぼうでも降れはい、さいふのは、あまり聞き慣れない響きであります。竹筒つぼうが降れさいふ注文は、あんまり飛び離れた注文でありましたけれど、兵馬はそれを聞いて頷きました。取つて返して例の竹筒を取り上げて、その中に入れてあつた薬を手早く傍の紙へ明けて、その代りに今書いたお松への返事の手紙を入れてしまつて元のやうに栓をして、障子を前よりは、もう少し廣く明けると、覗ひを定めてボンと下へ投げ落しました。間もなく、

「降りやがった、降りやがった」

さいふ聲が聞えました。兵馬はその聲を聞いて安心して、なほ障子の隙から見てゐると、米友は自分が投げた竹筒を拾つて、これも手早く懐中へ忍はせてしまつて、怪訝な面をして此方を見上げてゐたが、何處へか行つてしまひました。

八

年が明けて松が取れると甲府城の内外が遽に色めき立ちました。

平常、何をしてゐるのたかわからない連中達が、大分働きはじめました。勤番支配以下組頭奉行それづくに職務を勵行することになりました。

これは年の改まつて、心機が一轉したからではありません。

如何いふわけか知らないが、此の頃、甲府の城へ御老中が巡視におゐでになるさいふ噂でありました。

然も、その御老中も小笠原登岐守が来るさいふ事でありました。この人は幕末に於て第一流の人物でありました。この間まで謹慎して居られた筈の明山侯が何の必要あつて突然此の甲府へ來られるのたかさいふ事は、勤番支配も組頭も皆計り兼ねて居りました。

多分、上方の時局を收拾する爲に此甲州街道を通つて上洛する途中この甲府へ泊るのたらうと見てゐる者もありました。その他、いろ／＼に此の御老中の巡視さいふことが噂になつてゐます。

兎も角も城の内外を疎略のないやうにして置かなければならないさいふのが、新年の宿醉の覺めないうちから、急に支配以下が働き出した理由なのであります。

御本丸から始めて天守臺、櫓々、曲輪々々、門々、御米藏、役所、お目付小屋、御典館、御破損小屋、調練場の掃除や武器の收めや何か毎日手落ちなく取り行はれます。

駒井能登守も亦此の度の老中の巡視さいふことを何の意味たか、よく知りません。けれども能登守は、あの人が幕府の今の御老中で第一流の人であるのみならず、その學問——殊に能登守と同

じく海外の事情や砲術にかけて中々の新知識の人であることを了解してみました。能登守を甲府へ廻したのは或は此の明山侯の意志ではなかつたかと思はれてゐます。

明山侯と能登守との意氣相違するといふ事は神尾主膳等の一派、及び先任の支配太田筑前守を圍む一派の爲には心持のよくない事でありませぬ。彼等は明山侯の來るのを機會として雌服してゐた能登守が頭を擡げはしないかと思ひました。かねて能登守を甲府へ廻して置いて、今日其の機會が到來した爲に、明山侯がその打合せに來たものたらうとさへ邪推する者もありました。

さうでないまでも、其れに就て、何等かの對抗策を講じて置かなければならぬと思ひました。萬一、能登守が勢力を得る時は、我々が勢力を失ふ時と焦り出した者もあります。これ等の連中は、この度の老中の巡視といふ事を一身の浮沈の瀬戸際のやうに氣味を悪がり、それで自分達の立場を擁護する爲には、能登守の頭を擡げないやうに釘を打つてしまはねばならぬと考へました。

それが爲に駒井能登守の立場は非常に危険なものになりました。登城しても後河へ行つてもお茶一つ飲むことも能登守は用心をしました。夜はほとんど外出しませんでした。明山侯の來る前に能登守を毒殺してしまはうといふ計畫があるとの風説がありました、また夜分忍びの者を入れて暗殺させようとしてゐるとの風説もありました。また能登守の内事や私行を一々探らせてゐるとの忠告もありました。

年が改まつて、さうして變りのあつたのは、此れ等の事のみに限りませぬ。

駒井能登守に仕へてゐたお君の身に重大な變化が起りました。前には戯れに結つて見た片はづしの髷を此の正月から本式に結ふことになりました。いつぞやの晩には恥しさうに密に引掛けた打掛を晴れて身に纏うやうになりました。それと共にお君の周圍には一人の老女と若い女中とがお附になつて、使はれてゐたお君が、それを使ふやうになりました。

お君は我から喜んで美しい眉を落してしまひました——家中の者は皆此の新たなるお部屋様の爲に喜びました。能登守のお君に對する愛情は無條件に濃やかなものでありました。ほこんと感涙するかと思ふほかに愛情が深くなつて行きました。

お君の爲には新たなる部屋と、念の入つた調度と、數々の衣類が調へられました。お君は夢に寶の山へ連れて行かれたやうに、右を見ても左を見ても嬉しいことはかりであります。

お君の血色にも亦著るしい變化がありました。笑へば人を魅するやうな妖艶な色が出て來ました。そして何事をさし置いても、其の色艶に修飾を加へることがお君の第一の勤めとなりました。

お君は、これが爲に費用を惜しみませんでした。能登守も亦、お君の爲に豊富な支給を與へて悔ゆる事がないのであります。江戸の水、常盤香の鬘附、玉屋の紅、それを甲府に求めて得られない時は江戸までも使を立て、呼び求めます。

お君に取つての仕事は、も早や、それより外には何事ありません。其の仕事は出來上がれば出

來上がるほごに、お君の形體と心とを變化させずには置けません。

笑ふにも單純な笑ひではありません。その笑ひの末には毘があつて人を引き落すやうな笑ひになつて行きます。物を言ふにも無邪氣な言ひぶりではありません。そのうちに溶けるやうな思はせぶりを籠めて居りました。物を見る目は自ら流盼になつて、その末には軟かい針をかけるやうになりました。お君は其の愛情を獨占してゐる筈の能登守に對してすら、この笑ひと思はせぶりと流盼をやめる事が出来ませんでした。

能登守といふものは見る／＼此のお君の有ゆる誘惑のうちに溶けて行きました。お君の誘惑は云はゞ自然の誘惑でありました。能登守を誘惑しつゝ、自分も亦その誘惑の中に溶けて行くのであります。お君には殿様を誘惑する心はありません。おのれの色香を飾つて爲にする計畫もありません。

それは新しい春になつて、山國の雪の中にも梅が咲き鶯が音づれやうとする時候になつたとは云へ、此の邸から忍び音の三味の調べをさへ聞かうとは思ひがけぬ事であります。

外に於ての能登守が、あんなに煙がられたり邪推されたりしてゐるのに、内に於ての此の殿様は他愛ないもので、ほんご終日お君の傍を離れぬ事がありました。お君は其の誘惑の有らん限りを盡して能登守を放さうとは思いませんでした。

世に食物を食るもので感潮の戀より甚たしいものはありません。無限の愛情を注がれてもお君は

また／＼満足したとは思ひませんでした。能登守は、嚼んで喰ひ裂いて飲んでしまつても、また足りないほごにお君が可愛くて可愛くて、如何にもならなくなつてしまひました。

この際に於て、お君の心の中の何處にも宇治山田の米友を考へてゐる餘裕はありません。

お君——ではない、お君の方であります。けれども昨日までのお君を急にお君の方に改めることは屋敷のうちの格式では、よしさうであつても何さなく定まりが悪い、お君も亦其の當座は自分の事でないやうに思ひます。

お君の方は今、その花やかな打掛の姿で片手には銚子を持つて廊下を渡つて行きました。少しばかり酔うてゐるのか、その面は櫻色にほのめいてゐるはかりでなく、廊下を走る足もさまでが亂れ勝でありました。

廊下の庭から梅の枝ぶりの面白いのが、欄干を抜けて廊下の板の間まで手を伸ばして居りました。

その面白い枝ぶりには、日當りのよいせいで梅の花の蕾が一二輪綻びかけてゐました。

「ホ、ホ、もう梅が咲いてゐる」

お君の方は立留まつて手近な、その一枝を無雜作に折つて、香を鼻に押し當てました。

「お、好い香、あ、好い香」

心のうちにさきめく香にお君は自分ながら堪へられないやうでありました。

「殿様に差上げませう、この香の高い梅の花を」

お君はそれを銚子の間に挿し込んで歩みに移さうとした途端によくさよめきました。

「おや」

それはほろ酔ひの人としては、あまりに仰山なよろめき方であります。打掛の裾が廊下の床にてゐる釘かなんぞに引かゝつたものたらうと思つて、片手に打掛を捌き、

「おや」

振返つてみるにその打掛の裾は廊下の下にある何者かの手によつて押へられてゐるのであります。

「君ちゃん」

「まあ、誰かと思つたら米友さん」

お君の打掛の裾を廊下の下から押へたのは脊の低い米友でありました。

「米友さん、悪戯をしては困るじやないか」

「何も悪戯をしやしねえ」

「たつて、そんな處で押へてゐては」

「用があるからだ」

「何の用なの」

「君ちゃん、今、お前は、この梅の枝を一枝折つたね、その枝を俺等にお呉れ」

「これかい、この梅の枝を友さん、お前が欲しいのかい」

「うむ」

「さうして如何するの」

「如何したつて宜いじやねえか、欲しいから欲しいんだ」

「欲しければお前、こんな花なんか、わたしに強請らなくても、いくらもお前の手で取ればい、じやないか」

「其んな事を云はずに、それを俺等にお呉れ」

「これは可けないよ」

「如何して」

「これは殿様に上げるんだから」

「殿様に」

と云つて米友は強い目付でお君を見ました。

「これは、わたしから殿様へ差上げる花なんだから、友さん、お前欲しいなら別に好きなのを取つたらいいだらう、ほら、また、彼方にも此方にも幾らも咲いてゐるじやないか」

お君はチラホラと咲いてゐる梅の木の花や蕾を、米友に向つて指し示すのを、米友は見向きもせず、お君の面を凝ら見つめてゐましたが、

「要らねえやい」

「おや、友さん、怒つたの」

「馬鹿にしてやがら」

米友は、そのまゝ、ぶいこ廊下の縁の下を潜り抜けて何處かへ行つてしまひました。

駒井能登守が役所へ出かけた、そのあとでお君は部屋へ行つてホツと息をついて微醺の面を両手で隠しました。

障子の外には日當りが宜くて、こゝにも梅の咲きかゝつた枝ぶりが面白く障子にうつゝてゐます。お君は脇息の上に兩腕を置いて、暫らくの間、熱る面を押し隠してゐましたが、そのうちにウトと眠氣がさして氣ました。

「お冷水を持つて来て」

「はい」

次の間で女中が返事をするこゝ、間もなくギヤマンの美しい杯が蒔繪の盆の上に載せられて若い女中の手で運はれました。ギヤマンの中には玉のやうな清水が一杯満たされてあります。お君はそのお冷水を口に當てながら、

「わたしは眠いから少し休みたい、お前お床を展べてお呉れ」

「畏まりました」

「それから、あの犬に何かやつてお呉れかい」

「いゝえ、まだ」

「忘れないやうに」

「畏まりました」

女中が出て行つた後でお君は水を一口飲んでギヤマンを火鉢の傍へ置き、それから鏡臺に向ひ、髪の毛を大事に撫で上げました。筭を抜いたり指したりして見ました。紅のさした面を恥しきうにながめてゐました。かうしてゐる間もお君は自分の身の果報を思ふこゝで一杯であります。

女中のよく言ひつけを聞いて呉れるこゝも嬉しくありました。鏡がよく我姿をうつして呉れるのも嬉しくありました。撫であける髪の毛の黒い事も嬉しくありました。筭の籠甲から水の滴るやうなものも嬉しくありました。面から襟筋の白粉も嬉しいけれど、胸から乳のあたりの肌の白いこゝも嬉しくありました。殿様の美男であるこゝが嬉しくありました。自分を産んで呉れた母の美しかつたさいふ事も嬉しくありました。

「ムクかい、待つておぬでよ」

お君は斯うして鏡臺に向つてゐながらも、ツイその日當りのよい縁先へムク犬が来たさいふぶに氣が着きました。氣がついたけれども障子を開けて犬を見てやらうこはしないで、やはり鏡に向つて髪の毛をぬぢりながら、さう云つて言葉をかけただけであります。人の愛情は二つにも三

つにも別けるわけには行かないのか知らん。能登守に思はれてからのお君は犬に冷淡になりました。冷淡になつたのではないたらうけれども、以前のやうに打ては響くほどに世話が届きませんでした。ムク犬の爲にする毎日の食事も以前は自分から手を下さなければ満足が出来なかつたのに、この頃では女中任せになつてゐました。女中がツイ忘れることもあるらしく、それが爲にか如何か、この頃のムク犬はお君の傍にあるよりは米友の方へ行つてゐることが多いやうであります。

今、ムクはお君のゐる處の椽先へ来てゐることは其の物音でも呼吸でもお君にわかるのであります。こんな時には必ずムクに然るべき意志があつて来るのだから、前のお君ならば何事を措いても障子を開けるのでしたけれども、今のお君はそれよりも鏡にうつる己の姿の方が大事でありました。

「猫！」

堪まり兼ねたさ見えてムク犬は外で一聲吠えました。吠えられて見るさお君は如何しても障子を開けなければなりません。そこにはムク犬が柔和にして威容のある大きな面を見せてお君の面を見上げたムク犬の眼の色は、早く私についてお出で下さいさいふ眼色でありました。それは何人よりもよくお君に讀むことの出来る眼の色であります。

お君はムクに導かれて廊下傳ひに歩いて行きました。

これは此の前の晩の時のやうに闇でもなければ霧でもありませんで梅が一輪づ、一輪づ、綻び出で様といふ時候でありました。

お君が、さうくムク犬に導かれて廊下傳ひに來た處は米友の部屋でありました。そこへ何気なくお君が入つて、

「おや、友さん」

と云ひました。見れば米友は先方向きになつて今旅の仕度をして上り端に腰をかけて頻りに草鞋の紐を結んでゐる處であります。

旅の仕度さいつても米友のは前に着てゐた盲導の筒袖に、首つ玉へ例の風呂敷を括りつけたので、丁度伊勢から東海道を下つた時、江戸から甲州へ入つた時と同じ事の扮装でありました。

「何處へ行くの、米友さん」

お君は米友の近い處へ立ち寄りながら尋ねました。

米友は返事をしませんでした。

「殿様の御用なの」

米友は尙ほ返事をしません。返事をしないで草鞋の紐を結んでゐます。

「如何したの米友さん」

お君は後から米友の肩に手をかけました。

「如何したつて可いやい」

米友が肩を揺るさお君は少しばかり泳ぎました。

「お前、何か腹を立つてゐるの」

米友は尙ほ返事をしないで漸く草鞋の紐を結んでしまひ、すつと立つて傍に置いた例の棒を取つて、ふいさ出掛けやうとする有様が尋常でないから、お君はあわて、

「何かお前、腹の立つ事があるの、氣に觸つた事があるの、さうしてお前は此處のお屋敷を出て行つてしまふつもりなの」

「うむ、今日限り俺等は此處をお暇だ」

「そりや、また如何したわけなの、お前はさうも氣が短いから、何かまた殿様の御機嫌を損ねるやうな事をしたんじゃないか、そんならわたしが謝罪つて上げるから事情をお話し」

「馬鹿野郎、殿様さやらの御機嫌を損ねたから、それで出るんじゃないや無えや、俺等の好で勝手におん出るんだ」

「そんな事を云つたつてお前、さうお前のやうに我儘を云つては第一わたしが困るじやないか」

「お前が困らうと困るめえと俺等の知つた事じや無え」

「何か、キツトお前、氣に觸つた事が有るんだよ、有るなら有るやうに、わたしに話してお呉れ、他人でないわたしに」

「一から十まで癩に觸つて堪まらねえから其れでおん出るんだ」

「何がそんなに癩に觸るの」

「何でも彼でも皆んな癩に觸るんだ、その疔つちやけた着物は其りや何だ、その椎茸見たやうな頭は其りや何だ、そけえらからして第一癩に觸つて堪まらねえや」

「お前は如何かしてゐるね」

「俺等の方から見りやあ、如何かしてゐるさいふ奴が如何かしてえらあ、ちやんちやら可笑しいや」

「まあ、米友さん、それじや話が出來ないから、兎も角、まあ此處へ御坐り、お前が如何しても此のお屋敷を出なくてはならないやうな譯があるならば、わたしも無理に留めはしないから、さう短氣を起さずに、その譯を話して下さい、ね」

「出て行きたくなつたから出て行くんだ、譯も何も有りやしねえや、一から十まで癩に觸つて堪らねえから此處の家にゐられねえんだ」

「何が其んなにお前の癩にさはるのたか、お前のやうに、さうぼん／＼云はれては、ほんごに困つてしまふ」

「その椎茸見たやうな頭が氣に入らねえんだ、尾上岩麿見たやうな金ピカが癩に觸つて堪まらねえんだ」

「あ、譯つた……」

お君は米友を押へながら、何かに氣の着いたやうな聲で、

「判つた、お前は、わたしが出世したから、それで嫉くんだらう」

「ナ、ナニ」

米友は屹と振返つて凄い眼つきをしてお君を睨みました。

「きつこ、さうだよ、わたしが出世したから、お前は其れで……」

「やい／＼、もう一遍その言葉を言つて見る」

米友はお君の面を穴の明くほざ睨みつけました。

「さうだよ、きつこ、さうに違ひない、わたしが出世して此んな着物を着るやうになつたから、

お前は世話が焼けて……」

「うむ、宜く云つた」

米友はお君の面を目玉の飛び出すほざ鋭く睨んで拳を固めながら頷いて黙つてしまひました。

「如何したんだらう、ナゼ其んなに怖い面をしてゐるの、わたしには譯が判らない」

米友に睨められたお君は、睨んだ米友の心も睨まれた自分の身の事も全く譯が判らないのであり
ました。もう一遍云つて見るさへは何の氣もなしに其れを繰り返すほざに譯が判らないのであ
ります。

「馬鹿！ 出世じや無えんだ、慰み物になつてるんだ」

「おや、友さん、何をお云ひた」

「お前は、人の慰み物になつてゐるのを、其れを出世と心得てるんだ」

「エ、エ、何、何、友さん、そりや何と云ふ口の利き方たえ、いくら、わたしの前だからと云つ

て、そりや、あんまりな言分ではないか、二度言つて御覽、わたしは承知しないから」

「二度でも三度でも言ふよ、お前は殿様といふ人から旨い物を食はせて貰ひ、いゝ着物を着せて

貰つて、その代りに慰み物になつてゐるんだ、それをお前は出世と心得てゐるんだ」

「あ、口惜しい！」

「何が口惜しいんだ、その通りたらうじやねえか」

「わたしは殿様が好きだから、それで殿様を大事にします、殿様はわたしが好きだから其れでわ

たしを大事にします、それをお前は慰み物なんぞ……あんまり口惜しい、殿様は其んな方で

はない、わたしを慰み物にしようなんぞ其んなお方ではない、わたしは殿様が好きだから」

「好きだから、好きだから如何したんだい、好きだから慰み物になつたのかい」

「友さん、よく言つて呉れたね、よく言つてお呉れた、お前から其處まで云はれ、は、もう淨山、

お君は斯う云つて口惜しがつて遂に泣き出してしまひました。

「むつこいしよ」

さ云つて米友は竹皮笠を土間から取り上げて被りました。その紐を結びながら、
 「やいムク州、永々お世話様になつたが、俺等は此れからおさらはた、お前も達者であなよ」
 ムク州は悄然として二人の間の土間に最前から身を横へてゐました。
 「十七姫御が旅に立つヨ、それを殿御が聞きつけてヨ、留まれ〜と袖を引くヨ」
 米友は久しぶりで得意の鼻唄をうたひました。この鼻唄は隠れが岡にゐる時分から得意の鼻唄で
 あります。これたけうたふ笠の紐を結び終つた米友は、例の棒を取り直して、さつさこ此處を
 飛び出してしまひました。

九

米友が出て行つてしまつたあとで、お君は堪へられない心の寂しさを感じました。
 ムク州はさ見れば其處にはゐません。恐らく米友を送るべく其のあさを暮つて行つたものと思はれ
 ます。
 その時に此の米友の部屋の後へ密に忍んで来た人がありました。臺所口から、
 「今日は」
 さ細い聲で昔なふのは、やはり女の聲でありました。
 しはらくするこ、

「今日は」

二度目と同じ聲でありました。

「米友さん」

三度目に米友の名を呼びました。

「御免下さい」

臺所口の腰高障子を密に開けて、忍び足で家の中へ入り、中の障子へ手をかけて、

「米友さん」

さ云ひながら、障子を開けたのはお松でありましたが、米友を呼んで入つて見ると、それは米友
 ではなくて立派な身なりをした奥向の婦人が柱に凭れて泣いて居りましたから、定まりを悪さう
 に、

「如何も相済みませぬ、あの米友さんは、お留守でございますか」

泣いてゐた婦人はその時涙を隠して此方を向きました。

「まあ、お前さんは……」

「あなたはお君さん」

「随分、これはお珍らしい」

「まあ、何さいふお久振な」

さ云つて二人共に面を見合せたなりで暫らく呆氣に取られてゐました。

お松とお君との別れは遠江の海でお君が船に酔つて船に酔つて堪まらなくなつて以來の事であり
ます。あの時、お君だけは意地にも我慢にも船に居られないで上陸してしまひました。

神尾主膳の家と、駒井能登守の屋敷とは、その間が、そんなに遠くは無いのには兩女共に今まで面
を會せる機會がありませんでした。甲府にゐるさいふ事をすらすらお互に知つては居りませんでした。

米友の口から聞けは聞かれるのであつたらうけれど、米友は此の事をお松に語りませんでした。
お松は外へ出る機會が多少あつても、その後のお君は屋敷より外へ、ほさんさ一步も踏み出した
ことはありませんでした。それ故、二人は此處で偶然に會うまで、その健在をすらも忘れて居り
ました。

今見れば、お松は品のよい御殿女中の作りです。これはお松としてさう有りさうな身の上である
けれども、お君が斯うして奥向の立派な身なりをしてゐやうさは、お松には思ひ設けぬ事であり
ました。お君は、久しぶりで會つた人に、涙を見せまいとして元氣を作りました。お松は人の留
守へ入つて来た定まりの悪いのを言譯するやうに、

「わたしは此處にゐる若い衆さんにお頼み申してある事があります故、つい無作法に斯うやつ
て參りました、それを此處であなたにお目にかゝらうさは思ひませんでした、如何して何時頃か
ら此方様におゐでなさいますの」

お松は昔の朋輩の心持で尋ねました。

「これには色々長いお話がありますから、後で終くり申上げませう、そして、お松さん、お君
さんは今何方におゐで遊ばすの」

お君の方から斯う云つて尋ねました。

「わたしは、こちらの勤番のお組頭の神尾主膳の邸の中に居りまする」

「あの神尾様の、さうでございましたか、少しも存じませんでした」

「わたしもお君さんが、わたしのゐる處から幾らも遠くない此の能登守様のお屋敷におゐでなさ
らうさは夢にも存じませんでした、お見受け申せば、昔と違つて大さう御出世をなされた御容子」

「はい、お恥しうございます」

お松から出世さ云はれて見るに、お君は何さなしに恥しい心持になりました。お松は、さう云つ
て氣のつかないやうに綺麗びらかなお君の姿を見直しましたけれど、さうもよく呑込めないやう
な心持がするのであります。

自分はまだ娘であるけれども此の人は、もう主ある人か……さいふやうな不審からお松は何か
昔のやうに姉妹氣取や朋輩氣取で呼びかける事に氣が置けるのであります。

「お松さん、こゝではお話が致し悪うございますから、わたしの部屋までおゐで遊ばせ」

お君はお松を自分の部屋へ案内しようと思つてました。

「はい、あの——此處におゐてなさる米友さんといふお方は」

「あの人は、今、あの何處かへ……お使ひに行きましたから」

「左様でございますか、わたしはあの人は是非會はねばならない用事があります故」

「そのうち歸つて参りませう、お手間は取らせませぬから、さうぞわたしの處まで」

お松はお君の部屋へ導かれて、其處で兩女は水入らずに一別以來の物語をしました。

この物語によつて見ると、お松はお君の今の身の上の大略を想像する事が出来ました。お松も亦甲州へ来る道中の中で駒井能登守の人柄を知つてゐるのでありましたから、其人に可愛がられるお君の今の身の上は幸福でなければならぬと思ひました。

けれども、お松は其んな事のみを話したり聞いたりする爲に尋ねて来たのではなかつた。大事の人に會はんが爲に來たのでありました。晴れて會はれない人に、密まぎ會ふべく忍んで來たのでありました。密まぎ會へるやうに米友が手引をして呉れる筈になつてゐたから、其れで米友を訪ねて來たのですが、その米友がゐないで偶然にも會うことの出來た其の人はお君——却て此れは一層自分の願ひの爲に都合が宜いと思ひました。此の屋敷に於てはズツト地位の低い米友を頼むよりは、主人の寵愛を受けてゐる此の優しい人に打ち明けたのが、ドノ位頼みよくもあるし、都合もよいか知れないと氣がついたから、お松は、やがて其の事をお君に打ち明けて頼みました。果してお君は、お松が思つてゐる通りによい手引をして呉れる人でありました。お松が思つたより以

上に快く承知をして、その事ならば誰に頼むよりも、わたしにといふ意氣込で返事をして呉れました。且、今は幸に主人もゐないから、これから直に、わたしが其のお方の休んでおゐてなさる處へ御案内をませう、さういふ事でありました。お松は飛び立つほご嬉しく思ひました。

お松のやうに沈着いた性質の女がソツ／＼とする様子を見るお君も嬉しくありました。この人を此んなに喜ばせるのは、またあの兵馬さんを喜ばせる事になるのだと思へば尚ほ嬉しくありません。斯ういふ人達の間の手引をして喜ばせる自分の身も嬉しいことだと思ひました。

兩女は人目に觸れないで二階へ上る事が出来ました。お君は、先に立つて其の一室の障子を細目に明けて中を見入り、

「兵馬さん」

この聲に兵馬は夢を破られました。軽い眼の床から覺めて見ると其處に立つてゐる女の姿

「お松どの」

兵馬もさすがに驚きと喜びとを隠す事が出来ならしい。

「御氣分は」

「もう大丈夫」

兵馬は生々とした聲でありました。

「あゝ、わたしは心配致しました」

「どうも色々有難う」

「お手紙を確に戴きました」

「昨日はまた薬を有難う」

「あの友さんといふ人が丁度此方のお屋敷に雇はれてゐたものだから、何かにつけて仕合せでございまして」

「あれは、わしも知つてゐる人……それからまたお君ごのも」

「はい、お君さんにも、わたしは會ふことが出来ました、そのお君さんの手引で斯うして上がりました」

「して、主人の許しを得て」

「いゝえ、此方の殿様は只今お留守なのでございます」

「兎に角も、此の屋敷へ落着いた事は當座の仕合せ、この上は一日も早く全快して、一先づ甲府の土地を立退かねはなりません」

「早く御全快なすつて下さいまし、兵馬様、わたしは此んなものを持つて参りました」

さ云ひながらお松は持つて来た風呂敷包みを解くさ眞綿でこしらへた鬨着でありました。

「お氣に召しますか、さうでございますか」

さ云つて、その鬨着の、しつけの絲か何かを取りました。

「それほど寒いさと思はぬが、折角のお志だから」

兵馬は蒲團の上に坐り直して挿み帯をしてゐたのを解きかけました。

「兵馬様、これから毎日お訪ねしても宜しうございますか」

「悪い事は無いが、人に咎められるさ迷惑ではないか」

「誰にも知られないやうに用心して参ります」

「それでも、此の家の主人に知られぬわけには行かない」

「此方のお殿様はお君さんを可愛がつておゐてなさいますから……」

お松は面を靨らめました。

十

あさを暮つて送つて来るムク犬を無理に追ひ返した米友は、甲州の本街道はまた關所や渡し場があつて面倒だから、一層裏街道を突走つてしまはうと、甲府を飛び出して石和まで來ました。

石和で腹をこしらへた米友は差出の磯や目下部を通つて鹽山の宿へ入つた時分に日が暮れかゝりました。

「もし、其處へ行くのは友さんじゃないか」

袖切坂の下で、やはり女の聲で斯う呼びかけられたから米友は驚きました。

眼を圓くして見ると、

「ほら、さうだ、友さんたらう」

「彼女は慣々しく云つて傍へ来るから、米友はいよ／＼變に思ひました。」

もう黄昏時でよくわからないけれども、その女は此の邊には餘り見かけない洗ひ髪の兵庫結びか何かにつめた年増の娼婦者のやうに見える。着物も亦辨慶か格子のやうな荒いのを着てゐました。はて、こんな人に呼びかけられる覚えはないなと米友は思ひました。

「誰だい」

「まあ、お待ちよ」

「さ云つて女が傍へ寄つて来た時に、はじめて米友は、」

「あ、親方」

「さ云つて舌を捲きました。これは女輕業の親方のお角でありました。何故か米友はその人物が此のお角を苦手にするのであります。此の女輕業師の親方のお角の前へ出るさ、さうも妙に氣が引けて、いぢけるのは可笑しい位です。」

「もさ／＼、黒ん坊にされたのは承知の事であつて、道庵先生に見破られた爲に、その化の皮を被り切れなかつたのは米友の罪でありました。米友はそれは自分が悪かつたさ其れを今でも罪に著

てゐるから、それでお角を怖れるのみではありません。

「若し前世で米友が蛙であるならば、お角が蛇であつたかも知れません。さうも性が合はないで、其れが米友の弱身になつて、頭からガミ／＼云はれても、得意の啖呵を切つて、木下流の槍を七三に構へるさいふやうなわけには行かないから不思議であります。」

「あ、親方」

「さ云つて米友が舌を捲くさ、お角の方は今日は意外に素直で、その上に笑顔まで作つて、」

「如何したの、今時分、こんな處をうるついで」

「これから江戸へ歸らうと思ふんだ」

「これから江戸へ、お前が一人で」

「うん」

「さうして何處から来たの、今夜は何處へ泊るつもりなの」

「甲府から来たんだ、今夜は何處へ泊らうかまた判らねえんだ」

「そんなら、わたしの處へお泊り」

「親方、お前の處さいふのは」

「宜いからわたしに跟着いておめで」

「米友は唯々さしてお角のあさに跟着いて行きました。お角はまた米友を從者であるかの様に扱らつ

て先へさつきと歩いて袖切坂を上つて行きます。

「お前、甲府へ何しに來たの」

「俺等は去年人を送つて甲府へ來たんだ」

「さうして今迄何をしてゐたの」

「今まで奉公をしたり何かしてゐたんだ」

「何處に奉公してゐたの」

「旗本の屋敷や何かにあつたんだ」

「そしてお暇を貰つて歸るのかい」

「さうじゃ無えんだ」

「如何したの」

「俺等の方でおん出たんだ」

「そんな事たらうと思つた、お前の事だから」

「頼に觸るから飛び出したんだ」

「お前のやうに氣が短くては何處へ行つたつて長く勤まるものか」

「さうばかりも定まつてゐねえんだがな」

「定つてゐない事があるものか、何處へ行つたつてキツト追出されてしまふよ」

「俺等はかり悪いんじやねえや」

「そりやお前は正直者さ、あんまり正直過ぎるから其れでおん出るやうな事になるのさ」

「その代り、今度江戸へ出たら辛抱するよ」

「それからお前、日外お前はお君の處を尋ねに兩國まで來た事があつたね」

「うん」

「それたらう、お前は人を送つて來たさいふのは附けたりで、ほんとはあの子を尋ねに此方へ來たのたらう」

「さう云うわけでも無えんだ」

「知らを切つちや可けないよ、さう云うわけで無いことがあるものか、お前を此方へ寄越した人の寸法や、お前が此方へ來るやうになつた心持は、大概わたしの方に當りがついてゐるんだから」
米友は其處で黙つてしまひました。何處まで行つても受身で、根つから氣焰が上がらないで先を打たれてしまふやうな飄梅です。

袖切坂のあたりは淋しい處で、殊に右手はお仕置場です。袖切坂は其んなに大した坂では無いけれど、そこを半分ほさ上つた時に、

「おや」

と云つて、如何したハズミか先に立つて行つたお角が坂の途中で轉びました。物に躓いて前への

めつたのであります。

「危ねえ〜」

米友は其れを抱き起しました。

「あゝ、悪い所で轉んでしまった」

見ればお角の下駄の鼻緒が切れてしまつてゐます。それをお角は口惜しさうに手に取るさ撮みをつけてボンと傍へのお仕置場の藪の中へ抛り込んで、

「口惜しい、浮かりしてゐたもんだから、袖切坂で轉んでしまった」

キリ〜と齒を噛んで口惜しがりました。お角の腹の立て方は、わづかに轉んだ爲の疝癪として

は餘り仰山でありました。

「怪我をしたのかね、かまいたち、にでもやられたのかね」

米友は多少其れを氣遣つてやらないわけには行きません。

「そんな事じや無い、袖切坂で、わたしは轉んでしまつたのだよ、ちえッ」

お角の言ひぶりは自暴のやうな氣味でありました。

「袖切坂が如何したつて」

「こゝが其の袖切坂なんたらうじやないか、處もあらうに、あんまり馬鹿々々しい」

「そりや木鼠も木から落こちる事がある、轉んだ處で怪我さへしなけりやなあ」

「怪我も少さはかりしてゐるやうだよ、向う脛がヒョ〜痛み出した」

と云つてお角は紙を取り出して左の足の膝頭を拭くさベツタリと血がついてゐました。

「やあ血が」

米友も、其の血に驚かされると、お角は、

「怪我なんぞは知れた事たれど袖切坂で轉んだのが、わたしは腹が立つ」

お角は、よく〜此處で轉んだのが癪で堪らないらしい。

袖切坂を登つてしまつて行手に大菩薩峠の山が見えます。所謂大菩薩嶺であります。標高千四百五十米突の大菩薩嶺を左にしては小金澤、天目山、笹子峠がつゞきます。それをまた右にしては鶴冠山、牛王院山、雁坂峠、甲武信ヶ嶺であります。

素足で坂を登りきつたお角は——坂といつても袖切坂はホンのダラ〜坂で大した坂でないことは前に申す通りです。そこで、お角は米友を顧みて、

「友さん」

と米友の名を呼びました。

「よく覺えて置きなさい、此の坂の名は袖切坂といふのだから」

さういふ言葉さへ餘憤を含んでゐるのが妙です。

「袖切坂」

米友は、お角に聞かされた通り、袖切坂の名を口の中で唱へましたけれど、其れは米友に取つて何等の興味ある名前でも無ければ、特に記憶して置かねばならない名前とも思はれません。

「ナゼ袖切坂といふのたか、お前は知らないたらう」

「知らない」

「知らない筈よ、わたしだつて此處へ来て初めて土地の人から、その因縁を聞いたのだから」

お角は坂を見返つて動かうともしません。米友も亦是非なくお角の面を坂を見比べて意味不明に立ち盡してゐました。そこらあたりは畑と森と林が夕霧に包まれてその間に宿はづれの家の屋根だけが見え隠れして、二人の立つてゐる處には、「袖切坂」といふ石の道標に朱を差したのが黄昏でも氣をつけて讀めは讀まれるのであります。

「この坂で轉んだ人は、誰でも、その片袖を切つて此處の庚申塚へ納めなくてはならない事になつてゐる、それを知つてゐながら、わたしは此處で轉んでしまつた、何といふ間の抜けた馬鹿馬鹿しいお人好なんたらう、わたしといふ女は」

お角は、斯う云つて身を震はして焦つたがりました。お角の焦つたがる面と言葉を、米友は怪訝な面をして見たり聞いたりしてゐました。

「人間だから、根が生えてゐるわけではねえ、轉んだ處で如何もこれ仕方が無え」

米友は斯う云ひました。

「あんまり馬鹿々々しいから、わたしは片袖なんぞを切りやしない、この坂へ来ては子供だつて轉んだものゝあるといふ話を聞かないのに、いゝ年をしたわたしが……坂の真中で引繰り返つてお負に此の通り御念入りに削までつけられて」

膝頭の削が痛むのかお角は其處へ手をやつて押へて見ましたが、

「友さん、わたしが此處で轉んだといふ事を誰にも言つちや可けないよ」

「うむ」

「言ふと承知しないよ」

「うむ」

「けれどもお前はキツト言うよ、お前の口から此の事が漏れるに定まつてゐるよ、若しさういふ事があつた時は、わたしはお前を只は置かない……只は置かないと云つても、わたしよりお前の方が強いんだから、して見ると、わたしはいつかお前の手にかゝつて殺される時があるたらう、さうも左様思はれてならない」

「何、何を云つてるんだ」

「轉んだ處を見た人に見られた人が、若し間違つても男と女であつた時は、何方か其の片一方が片一方の命を取るんですさ」

「え、え」

米友は何さもつかず眼を圓くしました。程よく米友の連れて來られた處は鹽山の温泉場から幾らも隔たらない二階建の小綺麗な家でありました。

「この人に足を取つて上げて、それから御飯を上げてお呉れ」

お角は女中に言ひつけました。

米友は御飯を食べてしまふと二階へ案内されました。二階へ案内されて見ると其處がまた氣取つた作りでありました。すべてに於て米友は、この家の容子さ、あのお角さといふ女主人を怪しまぬわけには行きません。

それよりも先に、兩國橋で女輕業の一座を率ゐてゐた親方が、如何して此んな處の佗住居に落ちていたかといふ事が米友には大いなる疑問であります。甲府へ興行に來た間違ひからお君が一人置き捨てられたのは聞いて見れば其の道筋が立ちますけれど、この女親方が此處へ落着いてゐることは、さうも米友には解せないであります。間もなく、お角はお湯に行くさ云つて出て行きました。やがて女中が二階へ來て、あなたもお湯におゐでなさいましましと云ひました。米友は、湯は止さうと云ひました。それではお床を展べてあけませうと云つて、次の間へ寢床をこしらへて、屏風を立て、燈火に氣をつけて、お休みなさいませと云ひました。

「一體、此處の旦那さといふのは何を商賣にしてゐるんだい」

「絹商人でございます」

米友は成程と思ひました。郡内にも甲府にも絹商人では可なり大きいのがあるから、何かの縁で其れに見込まれてあの親方が圍はれたな、と米友は其んな風に感づいて、多少臍に落つる處はあつたけれども、袖切坂の上でお角が言つた異様な一言は、如何も米友には解くことが出来ませんでした。

米友が寢込んだのは其れから長い後では無かつたけれども、其の夜中に格子を開ける者がありました。

米友は亦、さすがに武術に達してゐる人であります。熟睡してゐる時であつても、僅かの物音に眼を醒ますの心がけは何時でも失ふ事はありません。

「うむ、さうか、そんなら宜いけれど、滅多な人を入れちや可けねえぜ」

それが男の聲です。

そこで米友は、はゝあ、やつて來たな、旦那の絹商人さといふ奴がやつて來たなと腹の中でさう思ひました。

そのうちに瀬戸物のカチ合ふ音や爛徳利が風呂に入る音なんぞがしました。それでもつて、お角と其の絹商人とが差向ひで飲みはじめてゐることがわかりました。

二人は飲みながら話をしてゐます。その話聲が高くなつたり低くなつたりしてゐますけれども、

聞いてゐるうちに、米友がまたくわからなくなつたのは、男の方の言葉使ひが決して商人の言葉使ひではない事でありませぬ。

いくら地の商人にした處で、今下で話してゐる人の口調は、反物の一反も取引をしようといふの口調ではありません。

絹商人といふけれども、何をしてゐるんだか知れた者じやないさ米友はい、加減に多寡を括りました。

「おや、妙な事をお言ひたね」

突然さ下から聞えたのは、お角の聲であります。

「だから如何しようさ云ふんだ」

それは男の聲。

「如何もしやしない、これから其の神尾主膳様さやらのお邸へ、わたしが出向いて行つて、ちあやんと談判して来るからい、」

「其奴は面白い」

「面白からうさ、さうして其の序に、百といふ男はがんりきと、二つ名前男で、切り落された片一方の手には甲州入墨……」

「何を言つてやがるんだ」

下の男と女は、いさかひになつたのを米友は聞き咎めてしまひました。

併し、高い聲は其れだけで止んで男女共急に押し黙つてしまひました。

その翌朝、あのがんりきの何さやらいふ小悪黨に會はなければならぬのたなと思ひながら米友は下へ降りて見るさ、お角と女中の外には誰もゐませんでした。

女中の世話で朝飯を食べてしまつても昨夜の男は姿を見せませんでした。お角も何食はぬ面をしてゐました。米友もその事は聞きもしないで、直ちに出立の暇乞をしました。お角はもつと米友を留めて置きたいやうな口吻でありましたけれど、そんならさ云つて幾らかの饒別まで呉れました。さうして遠からず、わたしも江戸へ歸るから彼方でもまた會はうと云つて米友の爲に二三の知人の處を引合せてやつたりなさしました。

さうして米友は此處を出かけて東へ向つて行くさ例の袖切坂です。そこへ来るさ、忌でも眼に觸れるのが、坂の上に立てられてある「袖切坂」の石の道標でありました。

「此處だな」

と思つて米友は其の石を見ると、袖切坂の文字には昨夜見た通りの朱をさしてありましたが、その文字の下に猿の彫物のしてある事に初めて気がつきました。この猿は有り觸れた庚申の猿です。庚申様へ片袖を切つて上げるさか何さか云つたのは、やつぱり此處の事たらうと米友は昨晩のお角の云つた言葉を思ひ出して、再び奇異なる感じを呼び起して見るさ、その庚申の下に、片袖で

はない——下駄が片一方置き捨てられてあることを発見しました。

下駄が片一方、然もそれは男物ではない、問形の女下駄に黒天の鼻緒、その鼻緒の先が切れたままで、宛ら庚申様へ手向をしたもの、やうに置かれてあるのを見さめて米友は眼を圓くしました。想像を加へるまでもなく、この下駄はお角の下駄であります。昨夕この坂の中程で轉んだお角が、焦つたがつて齒咬をしながら鼻緒の切れた其の下駄をボンと仕置場の藪の中へ投げ込んだ時に、米友は怪訝な面をして見てゐました。

それを誰が何時拾ひ出したのか、今朝はもう此處に、ちやんさ斯うして供へられてある——たから米友は眼を圓くしないわけには行きません。

迷信や因縁事で米友を嚇かすには米友の頭は餘りに粗末でそうして弾力があり過ぎます。昨夕、此處であんな事をお角から云はれて其の時は、をかしたな気分になりました。今はもうほごんごん忘れてしまつてゐました。それだから斯うして見ると、誰がしたのか其の悪戯が面悪くなる位のものであります。米友は手に持つてゐた棒をさし伸べて長蟲でも突くやうな手つきで下駄の鼻緒の切れ目へ其れを差込みました。

前後を左右を見廻して、その下駄を抛り込む處を見定めようとしたけれど、生憎あの藪の中へ投げ込んでさへ拾ひ出して此處へ待つて来る奴がある位だから、畑や道端へ、うつかり捨てられないうち、米友は棒の先へ其の女下駄を突掛けたもの、その遺り場に窮してしまひました。

已むことを得ず米友は、その下駄を手許へ引き取つて、片手でブラ下けて、その處を立ち去るより外には詮方が無くなりました。行く行く何處かへ捨て、しまはうと米友は油断なく左右を見廻して行つたけれど、容易に其の下駄一つの捨て場がわかりません。遂には土を掘つて埋めてしまはうかとも思ひましたけれど、さうもしないで、ほごんご小一里の間、米友は其の下駄をブラ下けて歩いてしまひました。

右の足の跛足である米友が、女の下駄を片一方だけ持ち扱つて歩いて行くことは、判じ物のやうな形であります。

十一

その後ムク犬は駒井と神尾と兩家の間を往來する様になりました。お君のムク犬を可愛がる事は昔に變らないが其の可愛がり方はまた昔のやうではありません。自分で手づから食物を與へることはありません。またムクと一緒にある機會よりも能登守に近づく機會が多いので、自然にムク犬に對するお君の情が薄くなるやうに見えました。併し、お君はムク犬を粗末にするわけではなく、ムク犬も亦主人を疎んずるさういふわけではありませんでした。

お君とムク犬との關係が、そんなになつて行く間に、お松とムク犬とが漸く親密になつて行くことが目に見えるやうであります。

それだからムク犬は或時は駒井家の庭の一隅に眠り、或時は神尾の家へ行つて遊んで來るのであります。神尾の家といつても其れは本邸の方ではなく別家のお松の部屋の椽先であります。お松は此の犬を可愛がりました。

神尾家の本邸のうちは、此の頃見ると、またも昔のやうな亂脈になりかけてゐるころがお松の眼にはよくわかります。貧乏であつた神尾主膳が此の春來、めつきり金廻りが宜くなつたらしい景氣が見えました。けれども其の金廻りが宜くなつたといふのは、地行高が殖えたからといふわけではなく、また用人達の財政が旨くなつて神尾家の信用と融通が回復したといふわけでもないやうです。

この頃神家尾へは雑多な人が入り込みます。札附の同役もあれば、やくざの御家人上りもあり、可なり裕福らしい町人風のものもあり、また全然破落戸風のものもある——それ等の人が集まつて夜更くるまで本邸の奥で賭場を開いてゐることが、お松は淺ましいことだと思ひました。神尾主膳に金廻りが宜くなつたといふのは其れから來るテラ饒の様なものでせう。

中奥の間では其の夜また悪い遊びが開かれてゐました。その場の容子では主膳の旗色が大へん悪いやうです。

主膳の悪いのに引替へて、いつも此の場を没つて行くは、が、ん、り、き、の、百、で、あ、り、ま、す。

一座の者が一本腕のが、ん、り、き、の、爲、に、或、は、殺、さ、れ、或、は、斬、ら、れ、て、手、を、負、は、ぬ、も、の、は、一、人、も、無、い、體、だ、

らくでありました。

それを見てゐた神尾主膳は業が煮えて堪りませんでした。

「百藏、もう一丁融通して呉れ、頼む」と云ひ出すと、

「殿様、御冗戯仰有つちや可けません、もうおあきらめなすつた方がお得でございます」

「左様な事を云はずに、もう一丁融通致せ、新手を入れ替へて、貴様と太刀打をして見たい、見ん事仇を取つて見せる」

「駄目でございますよ、新手を入れ替へた處で、返り討に定まつておゐてなさいますから、今宵の處はこの邊でお思ひ切りが肝腎でございますよ」

「如何しても融通が出来ぬか」

「冗戯ぢやございません、この上融通して上げたんぢや、勝負事の冥利に盡きてしまひますからな」

「けれども、貴様、それぢや勝ち過ぎる」

「が、ん、り、き、が、縦、横、無、盡、に、場、を、荒、す、の、を、神、尾、主、膳、も、忌、々、し、が、つ、て、ゐ、た、が、一、座、の、連、中、も、皆、ん、な、忌、々、し、が、つ、て、ゐ、ま、し、た。主、膳、は、堪、り、兼、ね、て、

「が、ん、り、き、を、それでは抵當の品を興へる、それによつて融通致せ」

「宜しうございます。相當の抵當を下さるのに、それでも融通をして上げないご、左様な頑固な

事は申しませんが、さうして其の抵當さ仰有いますのは」

「此品だ」

神尾主膳は青地錦の袋に入れた一振の太刀を床の間から取り外しました、それは多分伯耆の安綱の刀であります。

神尾主膳は秘藏の刀を當座の抵當に與へて、それで、がんだりから幾らかの金を融通して貰ひました。けれども不幸にして其の金も立處に、がんだりの爲に取られてしまひました。案の如く見事な返り討です。

片手で自分の膝の前に堆うづたかくなつてゐる場金を掻き集めながら、

「ナニ、今日はわつし共の目が出る日なんでございます、殿様方の御運の悪い日なんでございませぬ、殿様方がお弱いといふわけでもございませぬし、わつし共が馬鹿に強いといふわけなんでもございませぬ、勝負事は時の運なんでございませぬから、これでまた、わつし共が裸になつて、殿様方がお笑ひになる日もあるんでございませぬから、わつし共は決して愚痴は申しませぬ」

場金を掻き集めて胴巻に入れてしまひ、

「それから此の一品、如何やら、わつし共には不似合な品でございませぬが、折角殿様から抵當に下すつた品でございませぬから、持つて歸つて大切にお預かり申して置きます……」

「がんだりき、ちよつと待つて呉れ」

神尾主膳が言葉をかけました。

「何か御用でございませぬか」

「其刀は置いて行つて貰ひたい」

「宜しうございませぬも、抵當にお預かり致したものでございませぬから……」

「知つての通り、今、其の方に支拂ふべき持合せが無い、明日までには都合致すが、其の一振は家の寶じや、其方に抵當に遣はす云つたのも一時の座興、手放せぬ品じや、置いて行つて貰ひたい」

「これは恐れ入りました、その手で、いま、で殿様には随分御奉公を致して居ります、今晚も亦一時の座興なんぞと仰有られてしまつては、友達野郎に對しても、がんだりの面が立ちませぬ、殿様の御都合の宜しい時まで此刀は確にお預かり申し上げました」

片手で青地錦に入れた一振を取つて押したゞき、

「皆様、御免下さりませ」

お辭儀をして、さつさ立つてしまひました。

神尾主膳はじめ一座の者は、険しい眼をして其の後影を見送るはかりで、さすがに身分柄手荒いところも出来ませぬ。

がんだりきの百は神尾の屋敷を出た時に、青地錦の袋に入れた刀を背負つてゐました。

上弦の月が中空にかゝつてゐるのを後ろにして、スタ／＼と歩き出すと、

「もし百さん」

と云つて塀の蔭から出たのは女の姿であります。

「誰だい」

「わたしだよ」

「お角か」

「あい」

「何しにそんな處へ來てるんだ」

「お前さんが來るのを待つてゐたのだよ」

「家に待つてりやあ可いじやないか」

「さうしてゐられないから出て來たんじやないか」

傍へ寄つて來たのは女輕業の親分のお角であります。

「如何したのだ」

「如何したのじやない、お前、また此のお邸へ入り込んだね」

「入つちや悪いか」

「悪いとも……だけれど、今は其んな事を云つてゐられる場合じやない、手が入つたよお前、手

が入つたから彼處には居られない、彼處へ歸ることも出來ない」

「さうか」

「此れから如何するつもり」

「如何しようたつて、如何かしくちやあ仕方が無え、やつはり逃けるんだな」

「何處へ逃けるの、わたししたつて着の身着のまゝで此處まで抜けて來たのだから」

「だから、俺は俺で勝手に逃けるから、お前はお前で勝手に逃げる」

「そんな事を云つたつて」

「まあ此方へ來ねえ」

「がんりきは、お角を塀の蔭へ連れて來て、」

「幸、今夜は此方の目と出て、これこの通りだ、山分けにして半分はお前に呉れてやるから、此

奴を持つて何處へでも行きねえ」

「さうしてお前は」

「俺は俺で、臨機應變ごやらかす」

「そんな事を云はないで一緒に連れて逃けてお呉れ」

「其奴は可けねえ、お互の爲に悪い」

「お爲ごかしを言つて置いて、お前は此のお邸のお部屋様の處へでも入り浸るんたらう」

「馬鹿、そんな事を云つてられる場合じや有るめえ」

「それを思ふと、わたしは口惜しい」

「何を云つてるんだ」

「もし、お前が其んな事をしようものなら、わたしはわたしで持ち前を出して、折助でも何でも相手に手あたり次第に食つ着き散らかしてお前の男を潰してやるからい、このお金だつてお前、あの後家さんたかお部屋様たかわからない女の手から捲き上げて来たお金なんたらう」

「そんな事があるものか」

「さうに定まつてゐる、そんなら丁度面白いや、あの女から貰いた金をわたしの手で使つてやるのが却て氣持がい、皆なお寄越し」

「持つて行きねえ」

「もう無いのかい」

「それつ切りだ」

「その脊中に脊負つてゐるのは其りや何」

「こりや脇差だ、これも欲しけりや呉れてやらうか」

「そんな物は要らない」

「さあ、それだけ呉れてやつたら文句は有るめえ、早く行つちまへ、お前、てゐるのが危ねえ」

「それでも」

「また何か不足があるのかい」

この時、二人の方へ人が近づいて來ます。がんりきとお角は離れ離れに塀の側で辻燈籠の影へ身を忍はせようとした時、

「何をしやがるんだい」

矢庭にがんりきに組みついて來たものがあります。

それと見たお角は前後の思慮もなく其の場へ飛びかゝりました。

「貴様は」

覆面の侍の後から飛びかゝつたお角は直に突き倒されてしまひました。

「神尾の廻し者たらう、大方、さう來るたらうと思つてゐた」

がんりきは片手を後へ廻して侍の鬘を掴んで力任せに小手投を打たうとしました。侍は其の手を抑へて、がんりきが差し置いた青地錦の袋入の刃を取らうとしました。

「それを遣つて堪るものか」

片腕のがんりきは、片腕の利く侍よりも喧嘩が上手でありました。侍の腰が定まらない處を一押し押して振り飛ばすと、覆面の侍は前へのめつてしまひました。

「態あ見やがれ」

いつしか其の後から、また一人の覆面の侍が出て来て、

「ぞつこい」ぞ組みつきました。

「また居やがる」

がんだりきは其れぞ組打をはじめ。その隙に前にのめつた覆面は起き上がりながら、その袋入の刀を奪ひ取らうとする。

「可けない」

ぞ云つて、ほど一緒に起き返つたお角が其の侍の手に持った刀へ噛りつきました。

「この女、小癩な奴」

「泥棒、泥棒」

お角は斯う云つて大聲を立てようとした其の口を侍が押へる。お角は必死になつたけれど男の力には敵はない。

「此の野郎」

喧嘩にかけて敏捷ながんりきは、尻を拗つて組みついてゐた方の覆面の侍を打倒して、今お角を蹴倒して、刀を持って逃げようとする侍の行手に立ちはたかる。

「お角、無言つてゐねえ、泥棒々々なんて言つちや可けねえ」

ぞ云ひながら持つて逃げようとする袋入の刀を、また引たくらうとする。前に投げ倒されたのが

また起き直る。蹴倒されたお角が静止さしてはゐない。

この四個の人影が此處で組んづほぐれつ大落闘をはじめてしまひました。争ふ處は其の袋入の刀にあるらしい。

お角は何たか、わからないけれども、がんだりきの危急を見て格闘の仲間入をしました。女たてらに負けてはゐないで、前後も夢中で武者振つてゐました。

「苦ッ」

さいふ聲でお角は慄え上がりました。

「百さん、如何おしたエ」

お角は我を忘れて、がんだりきを呼ぶ途端に、一人の覆面の爲に烈しく地上へ投げ出され、その拍子に路傍の石で脾腹を打つてウンと氣絶してしまつたから、其の後の事は何とも分りません。

それからドノ位経つたのか知れないが、お角は介抱される人があつて呼び醒まされた時に氣が叫いて見れば、やはり覆面の侍が傍にゐました。

併し、同じ覆面の侍でも今度の覆面の侍は前の覆面の侍とは慥に相違してゐる事がわかります。人品も相違してゐるし、風采も相違してゐる事がわかります。

「お女中、氣を確かにお持ちなさい、お怪我は無いか」

ぞ脊を撫で、ゐるのは、その人品骨柄のよい覆面の侍ではなくてその若黨とも覺しき覆面をしな

い侍でありました。

「はい、有難う存じまする、別に怪我はござりませぬ」

お角は直ぐお禮を返事をしました。

「何しろ危ねえ事でございます、血が此んなに流れてゐるから、わつし共はまたお前様が此處に殺されてゐなさはかり思つた」

氣味悪さうに提灯を突き出して四方を見廻してゐるのは、やはり此の人品骨柄のよい覆面の侍のお伴をして来た草履取りの類であらうと見えました。

「血が流れてゐて人が殺されてゐないから不思議なのじゃ、お女中おんなは何れの何といふ者」

「い、え、あの」

「包まず、申すがよい」

「あの、わたくしは」

お角は問ひ糺されて自から口籠ります。その口籠るので若黨草履取はお角に漸く不審の疑をかける。

「これには何ぞ仔細があるらしい、兎も角屋敷へ同道致すが宜らう」

と云つたのは人品骨柄の善い覆面の武家でありました。その聲を聞くに爽かな、またお年の若いお方と思はれるのみならず、その聲に何とやら聞き覚えがあるやうに思はれるが、お角は急には

思出されません。

「い、え、わたくしは此處で失禮を致します、もうあの大丈夫でござりますから」

と云つて、暗雲に袖を振り切つて駈出してしまひました。

一行の人は其の舉動を呆氣に取られて見てゐたが、別に追蒐ける模様もなく屋敷へ歸つてしまひました。

其屋敷といふのは駒井能登守の屋敷であつて、覆面の品のよい武家は主人の能登守でありました。此の事に就て、その翌日、何か風聞が起るたらうと思つたら、更に起りませんでした。あの附近を通つた者が血の痕のあることをさへ気がつかずにしまひました。恐らく昨夜のうちに其れを掃除してしまつたものがあるのでありませう。その頃の事はそれだけで過ぎてしまひました。

十一

甲府の市中にもこの頃は辻斬の噂が暫く絶え、御老中が見えるといふ噂も、さうやら立消になつたやうであります。それで甲府の内外の人氣も如何やら氣抜けがしたやうであつた處に、端なく士民の間に火を放つたやうな熱度で歓迎される催しがつつ起りました。その催しといふのは府中の八幡宮の社前で盛大なる流鏑馬りやうじやうばを行はうといふことでありました。

八幡の流鏑馬は古來の吉例でありました。それは上代から毎年八月十五日を期して行はれたので

ありましたが、久しく廢れてゐたのを此の二月初卯を期して——後代の佳例に残るか如何かは知らないが兎も角もやつて見たいといふのが發企者の意見で、それに輪をかけたのが賛成人と市中村々の人民とでありました。

此の發企は駒井能登守から出たものと云つても宜ろしいのであります。能登守の家の重役が八幡の古例を調べ出して、ふさ此の事を能登守に話すと、能登守はそれは面白い、その古例を復興して見たいものだ云ひました。それを上席の勤番支配太田筑前守に話して見ると、筑前守も喜んで同意を表しました。それに並み居る人々も、單に上役に對する追従からでなく、心から其の企てを面白いことに思つて羨みました。

すでに其の邊から纏まつた事であるから、それが城下へうつる時は一層の人気になるのは無論の事でありませぬ。

二月初卯の日、八幡社前に於て三日間の流鏑馬が行はれるといふ事は城下から甲州一圓の沙汰になりました。

初の二日は古例によつて、甲州一圓の選はれたる人と馬——あこの一日は甲府勤番の士分の者。それに附隨して神樂もあれば煙花もある。道祖神のお祭も馳せ加はるといふ景氣でありましたから女子供までが、その日の來ることを待ち兼ねて居りました。

能登守の家來達は、八幡社前の廣い場所に繩張りをしました。大工が入り人足が入り、馬場を設

けたり機敷をかけたります事で、八幡のあたりはまた當日の來ないうちから町が立つたやうな氣であります。

能登守自身も亦、馬に乗つては、この工事の景氣を時々巡視に行きました。これは元より能登守一人の催してはなないけれども、最初に言ひ出した人であるのと、地位の關係から、ほごんで能登守が全部の奉行を引き受けたやうな形勢であります。

能登守の家中は、この催しの世話役に當つて力を入れてゐるばかりでなく、士分の者から選手を出す時に、是非共自分の家中から誰をか出さねばならぬ。その時に自家の選手が他家の者に後れを取るやうな事があつてはならぬ。さういふ其の責任から或ひは勇み、或ひは用心をするといふことになりました。

殊に主人の駒井能登守が砲術の名手として聞えた人であるだけに、その家中から、ロクでも無い人間を出してしまつては、其れこそ取り返しのつかない名折れであると思つて、重役や、側用人達はもう其の事で心配してゐました。

それが爲に例の重役や側用人等が苦心を重ねてゐるうちに、如何しても聞き捨てにならぬ事が出來た。見えて、重役が主人の許へ出て來ました。

「此の度の流鏑馬のお人定めは誰をお指圖でござりませうや……就きまして我々共容易ならぬ心配を致し居ります、さ申すのは彼の神尾主膳殿の許に、信州浪人とやら申す至つて弓矢の上手

が昨今滞在の由にござります、それは必ずや此の度の流鏑馬を當込んで、例の意地を立て我が手に功名を納めんとの下心と相見えまます、あの神尾主膳殿は何の宿意あつてか一々當家に楯を築くやうな事は致されまます、よつて此の度の流鏑馬の催しに、功名を我手に納めんとの下心より、一層當家に對して腹黒き計略が歴々見え透くやうでござります、それ故に、この度のお人定めは疎略に相成りませぬ、萬一の事がありますれば、お家の恥辱、また神尾主膳が此の上の増長計りがたなく存じまする」

家來達は心から此の事を憂ひてゐるのであります。また憂ふことに道理もありませんが、能登守は其れを知つて知らずにか、

「そりや其の方達が思ひ過ごし、この度の催しは寸功を争ふ爲にあらずして、國の兵馬を強くせんが爲……併し、その方達の申すことも疎略には思はぬ、追つてよき人を見立て、沙汰を致さう」

「仰せながら、最早餘日もいくらもござりませぬ、一日も早く御沙汰を下し置かれませぬと、本人の稽古と準備の爲に……」

「その邊も心得てゐる、それ故、家中一同に其の用心を怠らず、いつ沙汰をしても驚かぬやうにしてゐるが肝腎」

能登守自身も必ずや、この事を考へてゐない筈はない、事は些細ながら家の面目と責任といふやうな事へ延いて行くことも考へてゐない筈は無いでせう。

この時分神尾主膳の屋敷では、この頃召し抱えた信州浪人の小森といふのが、主人の御馳走を受けながら、頻りに用人達を相手に氣焰を吐いてゐました。小森の年配は四十位、名は小森だが實は大きな男でありました。

「拙者の流儀は信濃國の住人諏訪の大夫盛澄から出たもので……この盛澄は依懸太秀郷の秘訣を傳へたものでござる」

と云つて得意げに語る處を見れば騎射に相當の覺えのあるものであることに疑ひないらしい。

「この審ひ方といふ奴が……人によつては此れを舞から審うものもある、また左から審うものもあるけれど、これは何れも善くない事」

小森は柱に立てかけてあつた塗弓を手に取りながら審ひ方の仕形話をはじめました。

「一途に斯うして鐵はかりで審うと、鐵の當はよくても、桿の通りが碓でもない事になるさ矢の出様が眞直に行かない、また弓の左から審うと、矢といふものは、元より右の方にあるものだから鐵が目に見えなくなる、それでの見透しが明瞭させぬ故、遠近の見定めがつかぬ……それ故に審の本式はまづ弓を引き分くる時の見、さて弓を引込めたる時、日尻で斯う桿から鐵を見わたし、それからの見透すといふと、是は大、これは小、これは東、これは西といふことが明瞭さわかるのでござる」

と云ひながら小森は中黒の矢を一筋取つて弓に番へて審ひの形をして見せました。成程、よい形

で、さすがに手練の程も飽はれないことはありません。

「併し、これは遠い處を射る時の審ひ方で、もし五十間より内ならば、その節には皆弓の左より審うやうにせねばならぬ、流鏑馬の時すべて騎射の時は、大低十間二十間の際に於て射ることをござるから、やはり左から審うが宜しい……かるにより近い處を射るには、押手を勝手よりも低くすること、また其の時は右より審はずに左より審ふのが本式でござる、つまり遠近によりて審ひに左右の差別があることは、拙者が申上ぐるまでも無く各方も御存知の處でござらう」

「平地にて射る時、馬上にて射る時にも、其の心得に種々の差別がござりませうな」

「座中から問うものがありました。

「如何にも」

「小森は領きながら弓から矢を外して仕形話をやめ、

「騎射といふても元より流鏑馬に限つたことはござらぬ、朝廷にては五月五日の騎射、騎射、左近衛、右近衛の荒手結、真手結、帯刀騎射といふやうな儀式、武家では流鏑馬に犬追物、笠掛、皆、馬上の弓でござる、この度當所にて催さる、流鏑馬は何れの古式に乗取られるか知らねど、多分は小笠原の流儀によることならんぞ存ぜらる、兎も角、明日にも馬場を拜借して一責致して見たいぞ存じ申す、その節、實地につき拙者の心得申したる處を聊かながら御参考の爲にお話し申上りたい、また拙者の流儀が他流と異なる處をも多少なりと御覽に入れたい

斯う云つて諄々語る處を見れば必らずや相當の自信がないものではないと誰も思はせられるのであります。

主膳は此の人を招くことに於て非常な苦心をしました。人を遣はして信州から、わざ／＼招かせたものであります。それは無論、流鏑馬の當日に手柄を現はし、己れが面を立てると共に駒井能登守に鼻を明かさせたい心からでありました。表向きは自分の家中さいふ事にして置くけれど、この事が濟めは多分の禮を與へて送り歸すさいふ客分の待遇で迎へて来たものです。

宇津木兵馬は其の時分、もうすつかり身體が癒つて居りました。身體は癒つたが、また此處を立つさいふわけには行きません。

今は日に増し元氣も血色もよくなつて行くのに、兵馬はひさり其の部屋で机に向つて讀書に耽つて居りました。

その時に、二階へ上つて来る人の足音を聞きました。それが二人の足音であつた時にはお君がお松の手引をして来るのであるし、それが一人の足音である時は、能登守が見舞に見えるのが例でありました。今は一つの足音であつたから、能登守に定まつてゐると、兵馬は襟を正して待つてゐると、

「兵馬どの」

果して其れは能登守でありました。

「これはく」

と云つて兵馬は褥を二つて禮をしました。能登守は今研究室から来たものと見えて、竹袖狩籠に袴でありました。

「退屈でござらうな」

「斯うして讀書を致して居りますれば、さのみ退屈にも感じませぬ」

「毎朝一度づゝは、庭へ出て散歩をなさるが宜からう、いづれ近いうちには、自由の身にして上げたい、もう暫く此のまゝで辛抱される様に」

「有難き事に存じまする、何分のお指圖をお待ち申上げまする」

「時に宇津木さの、ちと保養をして見る氣はないか」

「保養と仰せあるは」

「氣晴しに面白い遊戯をして見る心持はないか」

「それは、永々の鬱屈故に、何なりと仰付け下さらば、お相手の御辭退は仕りませぬ」

「別に拙者の相手を所望するのではない、如何じや兵馬さの、馬に乗つて見ては」

「それは一段と結構な事に存じまする、承はりてさへ心が躍るやうに存じまする」

「馬に乗るゝこの外に、定めて御身は弓を舞くゝことも得意でござらうな」

「弓……それも聊かは心得て居りますれど、ホンの嗜み、得意といふほどの覺えはござりませぬ」
「兎も角も、馬に乗りて弓を舞くゝこの保養をして御覽あれ、明日さも云はず、只今より庭へ出で、馬を調べ、弓矢を擇んで試みては如何でござる」

「それは願うてもなき仕合せ、然らば仰せに従ひて、これより直に」

「既へ案内致させ申さう、その中にてよき馬を遠慮なく擇み取り給へ、弓矢も望み次第のものを」
兵馬は喜んで能登守のあとに従ひました。

其の日から宇津木兵馬は能登守の邸内の馬場で馬を賣めました。馬は有野村の藤原家から、すぐつて来た栗毛の逸物であります。

十三

さうしてゐるうちに二月初卯の流鏑馬の當日となりました。

八幡の社前で流鏑馬が行はれるのみならず、龍王の河原では花火が打ち上げられました。町々の辻では太鼓の會がありました。それで甲州一圓の人が甲府の市中へ流れ込みました。最初の二日は名は流鏑馬であるけれども實は競馬であります。

馬場の一面には八幡宮の鳩と武田菱の幟が張りめぐらされてあり、その外は竹矢來でありました。

南の方の真中に兩支配の棧敷があり、其の左は組頭、御武具奉行、御破損奉行、御假目附、それから同心小人などの士分の者の棧敷であり、右の方は其れ等の人達の奥方や女房の爲に設けられた棧敷でありました。その他は近國から招く客分の人たの、國內の待遇のよい人々の爲に設けられた棧敷であります。

一般の見物は東の口から潮のやうになたれ込みました。これ等の者の爲めには地面へ蓆を布いてありました。我れ勝ちに前へ進んで其の蓆の下へ腹物を押し込んで片唾を呑んで見物します。市街からの道々へは露店が軒を並べてしまひます。

少し風がある分の事で、天氣は申分がないから、朝のうちに廣場は人で埋まつてしまひました。やがて合圖の花火が揚つた時分に、棧敷が黒くなりはじめました。先任の支配太田筑前守は小姓をつれて其の席に着きましたけれど、相役の駒井能登守は、また其處へ姿を見せませんでした。組頭や、奉行や、目附、同心、小人の士分の者も續々棧敷へ詰めかけて來ました。その前から沙汰をして近國の士分の者も同じく其の棧敷に招かれたのが少からず見えるやうです。

それよりも人の目を引いたのは、これ等士分の者の奥方や女房達が侍女や女中をつれて此の棧敷に乗り込んだ時でありました。

棧敷の上には同じく鳩さ菱さを描いた幔幕が絞つてある。其の下の燈壇のやうな處へ、平常餘り人中へ面を見せない奥方や女房や女中達が、其の装ひをして坐つてゐることは、場内のすべての人

氣を其の方へ集めました。

そのうちに、競馬のはじまる時刻が近づいて、國內から選りすぐつて既につないである馬は男んで嘶きながら引き出されました。同じ國內から選り出された騎手は武者振ひして、馬の平首を搦でながら我こそさいふ意氣を眉宇の間にかゞやかしてゐます。けれども斯うして、すべての棧敷も埋まり見物も稲麻竹葉の如く集まつてゐるのに、今日の催しの主催者であるべき駒井能登守が見えないのに何さなく物足りない氣持をしてゐるものもありました。併し、其の心配は直に取り拂はれてしまひました。

「御支配様」

さいふ聲のする東の口を見れば、其處から黒く逞しい馬に乗つて馬丁に馬の口を取らせ、自分は陣笠をかぶつて筒袖の羅紗の羽織に緞子の馬乗袴をつけ、朱い總のついた勝軍麩の鞭をたづさへ、磨き澄ました鏡を踏んで靜々と棧敷の方へ打たせて行くのは駒井能登守でありました。

「好い男たなあ！」

と見物の者が感歎しました。それは漸次で云つたのではなく、ほんさに感心して、

「好い男たなあ！」

と動搖めたことほど、能登守の男ぶりは水際立つた美男子でありました。それは先づ大入場の際中を唸らせた外に、彼の燈壇の連中をして、

さ云つて恍惚とさせてしまつた事ほど能登守の男ぶりが立ち優つて見えました。斯うして能登守は先任の太田筑前守がある様敷の前まで来て馬から下りて、筑前守とお互の會釋があつて席に着きました。

能登守の後には小姓が附いてゐないで、若黨の一學が跪まつてゐました。

能登守が着座しても、また競馬の初まるまでには時間があります。その間は、見物が見物を見ることによつて興味がつながられて行きました。

見物は其れど、勝手に上下の人の噂をし合ひました。

けれども其の噂の中心が、さうしても能登守に落ちて行くのは争ふことは出来ません。

「あゝ、美しい男には生れたいものだなあ」

と思はず大きな聲で歎息して笑はれたものもありましたけれど、笑つたものも亦同じやうな思ひで能登守の姿をながめてゐました。

雑壇の連中は、さすがに口に出して其れを云ふものは無かつたけれども、其の眼が一人として能登守の後ろ姿を追はないものではありません。

さきには人氣の焦點であつた此の赤い雑壇が、能登守の姿を現はし、ことによつて其の人氣を奪はれてしまひました。場内の人氣の焦點から暫らく閑却されたのみならず當の自分達までが、能

登守の人氣に引ずられて行きました。

大入場では、あれは誰方様の奥方である、あれは誰様のお嬢様、あのお嬢様より侍女の方が美しい、奥様のうちでは身分は少し軽いわれども、結局あの奥様が一番の別嬪たなごさ、品評をしてゐたのが此の時、

「それで一體、あの駒井能登守様の奥方様は何方におゐでなさるのだ」

さういふ問題が出て、一方は能登守の様敷へ、それから一方はまた一時閑却してゐた雑壇の方へ向いて、

「あの美しい殿様の奥方さういふお方の面が見てやりたい」

さういふ物色にかゝりましたけれど、不幸にして其れは誰にも見當がつきませんでした。そこでまた議論が沸騰します。

あの殿様にはまた奥方が無いのださういふ説が起りました。いや、あの位の身分になつて奥方が無い筈はないさういふ説も出ました。それでは見た事があるかさういふ反駁が出ました。見た事はな

いけれど……さういふ受太刀があります。

けれども、その何れにしても皆んな想像説に過ぎません。煽次と喜多さが拾はぬ先の金争ひをするやうな事になつて行くことが可笑しくあります。

あゝ、いふ美しい殿様の奥方は嘸美しからう、一對の内裏雜のやうな……さう云ひ出すものがあるぞ、

いやさうでない、あゝいふ殿様に限つて奥方が醜女みにくめで嫉妬が深くて其の癖、殿様の方で頭が上がらなくて、女中へ手出しもならないやうに出来てゐる、よくしたものと、何たか一人で痛快がつてゐるものもありました。

餘計なお世話ではないか——大入場では、先から此の餘計なお世話で沸騰してゐましたけれど、元々影を追つての沸騰ですから、議論の結着しようがありません。

結局、三日のうちには、必ず其の奥方が一度は姿を見せるであらうから、その時に鐵札か金札かを見届けようといふ事で議論が定りかけた時分に、裏庭で一發の花火が揚りました。それを合圖に烏帽子直垂ウサカの世話役が出て來ました。

例の雑壇のうちには、此の日は、さちらかさ云へは奥方連の方が多いのであります。その奥方連も若い奥方連が此の日は多く見えてゐました。その若い美しい奥方連の中に、太田筑前守の奥方はかり四十を越した年配の權のありさうな婦人でありました。

兩支配の次の棧敷には神尾主膳が其の同役や組下の連中と共に、ほごんご水入らずで一つの棧敷を占領してゐました。

こゝでは主膳が大將氣取りで、座中には酒肴や茶菓子置いて、主膳は眞中に今刷物の競馬の番組を見てゐました。その他の連中は番組を見たり冗談を云つたり、對岸の棧敷と場内に稻麻竹いなまけと集まつた群衆をながめてゐたりして、競馬の初まるのを待つてゐます。

そのうちに、人が動揺めいたから、主膳は何氣なく番組の刷物を眼から離して馬場の方を見ると、今、駒井能登守が前を通り過ぎた處です。

能登守の男ぶりが、場内の人氣となつて騒がれてゐる時でありました。それを見るに神尾主膳は何ともなしにグツと頬にさはりました。それで險はしい眼つきで能登守の後姿を、それを見送る群衆を睨めました。

神尾主膳に取つては駒井能登守といふものゝ、總てが頼に觸るのであります。その第一が自分のと席にあるといふことでもあります。能登守を戴いて少くとも自分が其の次席にあるといふ事が主膳に取つては堪へられない残念でありました。事毎に能登守に楯を突かうといふのも抑々其處から出てゐるのであります。

その後は、見るもの聞くもの、する事爲す事が能登守とさへ云へば腹が立つ種であります。殊に、こんな晴の場所に於て、能登守に主人面に振舞はれる事は、自らの存在を蔑あやうしるにされたやうに侮辱を感じて其れが一層憎惡に變るのであります。

己れが威勢を此の際、多くの人に見せつけるが爲に、わざと棧敷の前をあゝして打たせて歩くのたなご思ひました。如何かしてあの鼻先を挫いて此の際、思ひ入り、恥辱を與へてやりたいものと、番組を持つ手先がブルブルと慄えるほどに残念がりました。

主膳は自分、主人役になつて酒肴を開かせました。一座は何れも酒盃を手にしたが、やはり見物

をながめては、色々の品評がはじまります。

こゝに集まつた人は大よそ何人位あるたらうといふ答案を算るものもありました。その答案が三萬と云つたり五萬と云つたり、また飛び離れて十萬と云つたり、思ひ切つて區々であつた處から、昔、信玄公が勝千代時分に、疊に二疊敷はかりも蛤を積み上げて、さて家中の諸士に向ひ、この敷は何程あらん當て、見よと、各々戰場敷の功者に當てさせた處が、或は二萬といひ或は一萬五千など、云つた、その實、勝千代丸が豫め小姓の者に敷へさせて置いた敷は三千七百しか無かつた——そこで勝千代殿は、あゝ人數といふものは多くは無いものじや、五千の人數を持ちさへすれば何事でも出来るものたわい云つて老功の勇士に舌を振はせたのは僅かに十三歳の時の事であつた。後年名將となる人は異つたものたさ、いふやうな話も出ました。

けれども、また一方に於て對岸の棧敷の婦人連を遠目に見て、大入場の中とほさんと選ぶ處のないやうな品評を試むる者が多くありました。また棧敷以外にゐる町民や農家の子女達を物色して、却て野の花に目のさめる者がゐるなんぞと、興がるものがありました。上役の手前もあり、身分の嘴もあつたから此の席では、そんなに不謹慎な處まで行きませんでしたけれど、追々に陽氣になつて行くのに、ひさり主人役の神尾主膳のみが、苦り切つて、酒を飲むこと薬を飲む様にしてゐるのはいつもに似氣なき容子であります。斯うして當日の八幡社前へは甲州一割の有らゆる階級の人が集まる事になりました。

あごからあごからと蟻の這ふやうに、馬場を目ざして人の行列が續きました。この分ではトテも落々と流鏑馬の見物は出来まいからと諦めて龍王の花火の方へ河岸を換へたのもあつたから、龍王河原も亦夥しい人出でありました。

この等の有らゆる種類の見物のうちに、また一つ閑却するこゝの出来ない種類の見物があります——それは例の折助の一連でありました。

手の空いた折助連中は其の俱樂部である八日市の酒場に陣取つて、これから隊を成して馬場へ押し出さうといふ處であります。

一口に折助と云つてしまふけれども、團結した折助の勢力には侮り難いものがあります。また彼等は渡り者であるだけに、皆、相當の歴史を持つてゐるのであります。食話者であるだけに可なり道樂の経験のある者であります。また意外に學問の出来る者もあるのであります。

これから馬場へ押し出さうとする折助連中の面振を見ても、その折助として雑多な性格を見るこゝが出来るのであります。

その中には、貸本の筆耕をして飲代に有りついてゐるものもありました。四書五經の講義が出来る位のものもありました。

江戸で芝居といふ芝居を見つくしたと自慢するものもありました。寄席といふ寄席に通ひつくしたと得意なもありました。中には淫賣婦といふ淫賣婦を買ひつくしたと云つて威張るものもありま

した。

その他、折助のうちには、なか／＼の批評家も居りました。皮肉屋も居りました。今日のやうな時には其の連中は靜止せよとして居られないのであります。また其れを靜止せよとして居らせやうものならば、彼等は折助式の反抗と復讐をすることに、抜目のあるものではありません。

それ故に、何かの催しのある時には、この折助に渡りをつける事を忘れてはなりません。今日の流鏝馬は、官民合同さはいふやうなもの、官僚側の主催のやうなものだから、そんなに折助に憚る處は無いのだけれど、それでも彼等の爲に棧敷下の可なり見よい處を世話役が割いて呉れました。

酒樽と煮しめを澤山に仕込んで八日市の酒場を繰出した之等の折助の一隊何十人は、程なく馬場へ繰込んで、この棧敷下へ陣取りました。こゝで彼等のうちの批評家と皮肉屋は何か見つけて、腹をエグるやうな、胸の透くやうな文句を浴びせかけてやらうと待ちかけてゐます。

生憎の事——世話役が少し氣が利かなかつた。この折助席の向ふは例の赤い雜壇の婦人席の棧敷でありました。その間は可なり隔たつてゐたけれども、少くも其れと相對してゐることは、折助連の批評と皮肉の爲に、よい標的であつて、その標的に置かれた善良なる婦人達の爲には實に不幸な事でありました。

折助が此の席に着いた時分は、駒井能登守はもう着座してゐた後の事であつて、折助は、棧敷下

の席の上へ胡坐を掻いて、人集りの模様には頓着なく、先づ酒樽の酒を片口へうつして、それを茶碗へさして廻り、それから蒟蒻や油揚や芋の煮縮の經木皮包を擴げ、冷で其の酒を飲み廻し、煮縮を摘みながら、徐に棧敷から棧敷、見物から見物を見廻すのであります。

處が、はじめて氣がついたやうに赤い雜壇の處で眼を据ゑてしまひました。何か云はうとして咽喉をグビ／＼させただけれど、幸に、丁度其の時に合圖の花火が揚りました。

この外に、また一つ大目に見なければならぬものがありました。それは名物の博徒——長脇差の群であつて斯ういふ場合には、ほこんど大手を振つて集まつて來て、各々然るべき格式によつて賭場を立てるのが慣例でありました。

これは、取締りにそんなに骨の折れる事ではありません。それ／＼の親分なる者の權力を默認して置きさへすければ、取締りに別に流鏝馬を見たいわけではなし、また見物を見に来るのでもなく、盆の上の勝負を

この連中は別に流鏝馬を見たいわけではなし、また見物を見に来るのでもなく、盆の上の勝負を争ひに來るのだから、一見して此の社會の者さいふ事が知れるのであります。

處が、こゝに何とも見當のつかない二人の者が此の日、東山梨の方の何處かの山の中から出て、裏山傳ひをドシ／＼歩いて甲府の方へ出て行くのは、やはり流鏝馬を目あてに行くものさ見なければなりません。

人に見えない處を歩いて行く間の二人の足は驚くべき迅さを持つてゐましたけれど、甲府へ近づ

いてからの二人の足ざりは世間並でありました。

二人共笠を被つて長い合羽を着て、脇差を一本づゝ差してゐました。先に立つてゐる方が年配で、あとから行くのが若いやうです。

「大へんな景氣だな」

と云つて立ち留まつた處は要害山の小高い處であります。こゝから見下ろすと、馬場を取り巻いた今日の景氣を一眼に見ることが出来ます。

「大當りだ」

と云つて若い方が笠の紐を結び直しました。さうすると年配の方は松の根方の石へ腰をかけて煙草を喫みはじめました。

若い方は別に煙草も喫みながらず腰もかけたがらずに、頻りに馬場の景氣、機敷の幔幕、或黒く波を打つ人出、八幡宮の旗幟、小屋掛の蕭張などを、心持ち宜かりさうにながめてゐました。

年配の方は七兵衛であつて、若い方は、がんだりきの百藏であります。何處に如何してゐたのかこの二人は、流鏑馬を當て込んで、また性も懲りもなく、この甲府へ入り込もうとするらしい。

さの道此の二人が當て込んで来るからには、ロクな目的があるわけではなからうけれど、ドチラにしてもこの面であつて甲府へ眞晝間乗込まうとするのは、餘り圖々しさが烈しいと云はなければならぬ、けれども、二人としては此の機會に何かして見なければ氣が済まないのでありませう。

たゞ此の機會に何かして見たいといふ盗人根性が二人を静止させさせて置かないのみならず、また此の甲府に何か仕事の仕残しがあればこそ、此の機會を利用してその片をつけてしまふ爲に協同して乗り込んで来たものさ見れば見られない事もないのです。

だから、二人が斯うして小高い處から、夥しい人出を見下ろしてゐる眼つき面つきにも、いつもよりはすつと緊張した色があつて、乗るか反るかの意氣込も見えないではありません。

二人が仕残した仕事といった處で七兵衛は兵馬の消息を知りたいこと、それとお松を取り出して安全の地に置きたいこと、そつ上で本望を遂げさせてやりたい事、それ等多少の善意を持つた物好があるのたらうけれど、がんだりきさ來ては、何をいたづらを遣り出すのたか知れたものではありません。

二人が此の小高い處から下りて、人混の中へ紛れ込んだのはそれから幾らも経たない後の事でありませう。

その日の競馬は其んなやうな景氣でありました。その翌日の競馬は其れに彌増した景氣でありました。

兩日共に日は暮れるまで勝負が争はれ、勝つた者は馬も乗手も揚々として村方へ歸り、負けた者は後日を期した意氣込を失ひませぬ。斯くて第三日となりました。今日は最終の日で、さうして晴の流鏑馬のある日でありました。

それが土分の者によつて行はれようといふ日であります。

この日になつて、雑壇と棧敷の二番目へ前二日の日には曾て見かけなかつた美しい女房が老女と若い侍女をつれて姿を見せたことは、早くも初日以来の見物の眼に留まらないわけに行きません。これを見つけた者は早くも其の噂をはじめました。

「あれだ、あれだ、あれが、ソレあれだよ」

この二日の日に於て、支配の太田筑前守の老女を初め、重立つた人の奥方や女房や女中達の面も大抵わかつたし、その品評も略ぼ定まつたけれども、今日其處の棧敷に姿を現した美しい人は、その例外でありました。前二日には全く姿を見せなかつた人であるのみならず、その棧敷も一間を占めて、太田筑前守の夫人にもおさく劣らぬほどの格式で見物に來たものですから、疑問が大きくなりました。

「あれが、それ駒井能登守様の奥方よ、さうだ、おれの言つた通り素敵なものではないか、醜態で嫉妬が深くて、浮かり女中にも手出しが出来ないと思つたのは誰だ、此處へ出て來い」

「成程」

それ等の見物の眼は一齊に此の棧敷へ向ひます。

さう云はれて見れば、其れに違ひないと思ふものゝみであります。奥方さはいふけれども、そこ

に威女のやうな可憐な處が残つてゐました。その可憐な中には迷はしいやうな濃艶な色香が萌え立つてゐました。人に遠慮して、わざと横を向いてゐる面には初々しい恥しさがありません。一絲も亂れずに結び上げた片はづしの裾には人の心に食ひ入るやうな油がありました。

これは大入場の観客の問題となつたのみならず、土分の者や、町民の由緒と富裕さを持つた者の棧敷に至るまでも、やはり注目の標的となりました。

太田筑前守は、席を占めてゐたけれど、駒井能登守はまた見えません。

神尾主膳は其れよりも先に例の一味の者を語らつて、例の棧敷に詰めてゐましたが、やはり評判につれて向ひ合つた此の棧敷に現はれた美しい女房の姿を目につけないわけには行きませんでした。

「成程」

主膳の左右にゐる者の小聲で噂する處によれば、あれこそ、新支配の駒井能登守が此の頃新たに手に入れた寵者といふことであります。

「さうか」

神尾主膳は遠くから、皮肉のやうな好奇のやうな眼をかゞやかして、其の美しい女房の現けた棧敷に驚き目を注ぎました。

「あれが……」

さ云つて主膳は、其の目を細くして、わざさらしい不審の色を浮かはせました。そのわざさらしい不審の色が、険しい眼の中へ隠れて行く時に、ハタと膝を拍つた神尾主膳は何故か、

「は、は、は、」

さ其んなに高くは無かつたけれど四邊の人を驚かすほどに笑ひました。それは皮肉と陰險と、その外に此れ等の人物によく現れる得意と侮蔑とを裏合せにしたやうな笑ひ方でありました。

そのうちに太田筑前守の老夫人が、また前の日のやうに多くの女中を連れて、婦人席の第一の棧敷へ來ました。

第一の棧敷、第二の棧敷といふけれども、それは長い一棟で、金屏風を以て仕切られてあるのみです。

老夫人の一座が、そこへ席を占めて後に、その召つれた人々によつて囁やかれたのは、第二番の棧敷の客の事でありました。

それ等の婦人達が、姦ましく物をいひ、或はワザさらしく囁やくのが、金屏風で隔てられた次の棧敷へはよく響くのであります。駒井といひ能登守といひ、それから指を出したり手眞似をしたりする模様まで、手にこるやうにわかるのであります。

第二の棧敷に來て噂の種となつてゐる美しい姿は其れは、お君の方であつた事は云ふまでもない

のであります。

お君の方は、この日老若四人の婦人達を連れて——さいふよりは其の婦人達にせがまれて、この席へ見物に見えたものであります。

お君は此處へ見物に出ることを忌やがりました。人中へ出るのが嫌ひたさ云つて断らうとしたのを、殿様が御主人役で晴の備である此の流鏑馬へ、一日もお面をお出しなさらなくては、殿様へ對しても失禮であらうし、自分達も肩身が狭いから、せひ／＼お出で遊ばせさ云つて左右の女達がせがみました。左右の女達はさうしななければ自分達も出ることが出来ないであります。

其れで是非なく、お君の方は斯うして棧敷の人となりました。棧敷の人となりて見ると勢ひ評判の人となりには居りません。さうも多くの人の見る眼と、囁く口が自分の方にはかり向いてゐるやうに思はれて、お君は、こゝへ來てから度を失うやうにオド／＼してゐました。

連れて來られた女中達は、そんな事は知らずに大喜びで、馬場や、見物席や、打ち揚がる花火を見てそわ／＼としてゐました。お君の眼では馬場も、見物席も、晴れた空も、ポーツと霞のやうに見えました。暫らくして、

「御免遊ばしませ」

第一番の棧敷から女中の取締でもしてゐるやうな女房が一人案内を乞ふ聲によつて狼狽したのはお君の方ばかりではありません。その召連れて來た女中達までが不意の案内で驚かされました。

「誰方様」

三二八

お君の方の老女は迎へに出ました。

「筑前守内より使に上りました」

「筑前守様のお内から」

それでお君の方の一座はハツさしました。

「これは、まことに粗末な品でござりますれど、能登守様のお内方へ差上げ下さいまするやう主人からの言付けでござりまする」

使ひに來た女中が捧げてゐるのは蒔繪の重に酒を添へて來てゐるものらしくあります。

「それは」

お君の方の一座は恐縮したり當惑したりしてしまひました。

此の際、こんな事をされては有難迷惑の至りで、若しそれをせねばならぬ禮式があるならば、こちらから先にするのが至當でありませう。それを向ふから持つて來られて見ると、好意を受けなわけには行かないし、また其の好意なるものが、形式一通の好意ではなくて、何さなく底氣味の悪い好意として見られ易いのです。

「此方から御挨拶に出ねばなりません處を、斯様な下され物、何とお禮を申上げまして宜しいやら……兎も角、有難く頂戴いたしまする、後刻改めて御禮に……」

老女は詮方なしに斯う挨拶して、筑前守の奥方からの贈り物を受けました。

兎に角、斯うして贈物を受けて見る。其の返しに苦心しないわけには行きません。こんな苦心はお君に取つても、女中達に取つても忌な苦心であります。

仕方がなしに、使をワザ／＼邸まで飛ばせて、筑前守の奥方から贈られたのと同じやうなものを調へて、それを老女に持たせてやりました。

老女が歸つて來ると隣席ではヒツ／＼と囁やき合つて、やがてドツと笑う聲がしました。それが可なり意地悪いことにお君の方の胸に響きます。

それが濟むと、やがて隣席から二度目の交渉がありました。前の女中がやつて來ての口上には、お互ひに斯うして窮屈に見物をするよりは、一そこの隔ての屏風を取拂つて、仲よくお附合をしながら見物しようではないかとの交渉でありました。

此方の老女は、これを聞いてまた當惑して主人のお君の方の面を仰ぐと、お君の方も亦同じ思ひでありました。

「折角でござりますれど、手前共は皆んな無調法者はかり故、若し失禮がござりましたは」
さいふ意味で、老女は程よく其の交渉を断りました。

筑前守の奥方の方でも其れを押しては云はないで、左様ならば云つて引下がりました。お君は、重ね／＼それが不安で堪まりません。隣席のする事は如何しても意地が悪い——若し、その

中に自分の素性を知つた者があつての上でする事では無からうか。さうだとすれば自分が此處にある以上は、何かの形で其の意地悪が續くに違ひない。それもあるけれども、また此の多數の見物席の中には自分を其れと感着いてゐる者は無いたらうか——姿と形こそ變つてゐるけれども、この土地へ来て女輕業の一座で踊つた事もある。それを思ふとお君は、座に堪へられないほどに不安に感ずるのであります。

こんな事だから来ない方が宜かつたのにと思ひました。併し来て見れば今更歸るわけには行きません。自分が歸ると云ひ出せば折角興に乗つた連れの女申達を失望させなければならぬ事を思へば、お君は、靜止と針の産のやうな此の席に辛抱してゐるより外はないのであります。

「お君様」

と名を呼んで訪れた者がありましたから、お君は頭を上げて見ると、それはお松でありましたから、

「お松様」

お君は此處でお松を得た事を百萬の味方を得たほかに喜びました。

「お君様、こゝで拜見させて戴いて宜しうございますか」

「宜い處ではございませぬ、さあ／＼此方へ」

お松はお君のゐる處を訪ねて、一緒に見物をさせて貰ひに来たのはお君の方に取つては却て願つ

たり叶つたりの喜びでありました。お君は嬉しがつて、お松に半座を分けて與へます。

お君の方について来た女申達も亦喜んで此のお客を待遇しました。前の筑前守の使ひの者とは打つて變つて、打ち解けた氣持で此の若いお客を待遇す事が出来ました。

お松も亦、他に席があつたのたらうけれども、わざ／＼此處を尋ねて見物を同じにさせて貰ひたいほど、此處へ来るのを喜んでゐました。

お君と並ぶやうにして席を取つて馬場の人出を見渡したお松は、棧敷の方に目を注いでゐるうちに何かに驚かされて、只ならぬ色を現はし、

「お君様、このお籠を少し下げようではありませんか」

總で絞つた幕の背後に籠を高く捲き上げられてあつたのをお君は今まで氣が付きませんでした。

丁度、その時に相圖の花火が揚がりました。今日はこれから今までに見られなかつた流鏑馬がはじまるのであります。

花火の相圖と共に、立烏帽子に緑色の直垂を着て太刀を佩いた二人の世話係が東から出て来ました。西の方からは紅の直垂を着て同じく太刀を佩いた二人の世話係が出て来ました。この四人の世話係が馬場の本と末とに並んだ時——馬見所も棧敷も大入場も一同に鳴を静めました。

籠を下ろさうとしたお松も思はず其の手を控へて立ちながら、多くの人と共に馬場の東の方をながめます。

十六人の射手が今其處から馬場の中へ乗り込む光景は、綾錦に花を散らした様な美しさであります。その十六人は、いづれも優びたる鎧直垂を着てみました。それに花やかな弓小手、太刀を佩き短刀を差して頭に終蘭笠、腰には夏毛の行膝、脊には逆顔の服、手には覚えの弓、太く逞しい馬を曳かせて、それに介添を一人と弓持を一人と的持を三人づゝ引具して、徐々南の隅へ歩み出たのであります。

「お松様、さうしてお置き遊ばせ、御簾が無い方が宜しいではございませんか」

女中達は、なまじい御簾を下ろされて折角の觀物を妨げられることを好みませんでした。お松も亦折角の觀物の初まるに先たつて此んな事をしたくないのであります。

「では、このまゝにして置ませう」

と云つて、御簾を卸ろすことをやめたけれども、心配は自分の事ではなくて、お君の身の上にあるやうでした。だから収めて坐り直す時に、わざと身を以てお君の前へ坐つて隠すやうにしながら、

「お君様、あれに、わたくし共の主人が」

と云つて、そつと前の棧敷を指して示しました。

「ぞのお方」

とお君が何氣なく、お松の指さした方を見て、

「あ」

と面の色を變へました。

その時に、丁度、十六人の射手は此の棧敷の下を通りかかりました。お松は、お君が、面色を變えたことを、其れほどには氣にしないで番組を借りて見ながら、

「第一番は、筑前守様の御家來で正木様、あのお方が其れでございませう」

と番組さんとお松は見比べ乍ら、

「第二番は能登守様の御家來で小川様……」

と云つて、番組さんごをまた引合せながら、

「お君様、あなたの殿様からおゐでなされたお方は、また若いお方で御座いますね」

お松の蔭に隠れるやうにしてゐたお君は小さい聲で、

「主人のお小姓でございます」

と云つてゐる時に、その人は棧敷の下へ来て綾蘭笠を振りかたけて棧敷の上を見上げました。

紫地錦の直垂を着て、纒の錦に金立棒の弓小手をつけて、白重藤の弓を持つてゐましたが、今何氣なく振り仰いで笠の中から見た面を、お松は早くも認めて、

「お君様」

「はい」

「あなた様お家のお方は、薄化粧をしておゐでになりました」

「御覽になりました」

「慥に……」

「その通りであります」

お君とお松とは頷き合ひました。その時にお松の心が遽に勇みをなしました。

十四

古式に装うた花やかな十六騎が南の隅に来てハタと歩みを止めた時に、馬場本に設けられた記録所から赤い直垂をつけて、太刀を佩き立烏帽子に沓を穿いた侍が一人徐々歩んで出て来ました。十六人は、その侍を迎へて進んで、近い處へ来て跪きました。立烏帽子の侍も亦膝を折つて、

「早や流鏑馬を始め候へ」

さいふと十六人が同時に、

「承はりて候」

と云つて一齊に其の馬を下つて各引かせた馬に跨ります。

その時に、四十八人の持は手別けをして北の方の的場へ颯と退きました。そこへ的を立て、その下に衣紋を繕うて坐ると、弓持は北の方の隅の幕へ弓を立てかけました。

射手は順によつて馬を進ませ、八幡社の方に一禮する。再び元へ戻つて轡を並べる。西の方で白

扇を懸して合圖があるさ、東の方で紅の扇をかざして之に應へる。用意がすでに整うと、第一番の射手が馬を乗り出しました。三たび馬を回らした後、日の丸の扇を開いて、笠の端を三度繕ひ、馬を驀然に騎り出しながら、その開いた扇を中天に抛つ、これは古式の通り捨鞭の扇であります。策を揚げて馬を乗飛ばし、矢聲をかけて、弓を引絞つて放つと過たず、一の的、二の的、三の的を見事に碎いて、満場の賞讃の聲を浴びて馬を返す。

第二番は——宇津木兵馬でありました。こゝでは假の名を小川靜馬と云ひ、綾蘭笠を冠つて面が、よくわかりません。棧敷で女たちが見てゐた通り、兵馬は薄化粧をしてゐましたやうです。馬を乗り出すところから捨鞭の扇を投げるまで、すべて小笠原の古式の通りでありました。策を揚げて弓を引絞つて、切つて放した矢は過たず、一の的を打ち碎きました。二の的も亦同じ

こと、三の的も……瞬く間に打ち碎いて、これも盛んなる賞讃の聲を浴びて馬を乗り返しました。第三番は小森蓮藏——これも亦手練なもので、同じやうに三枚の的を打ち碎いてしまひました。さうして同じやうな賞讃を受けました。

斯うして見れば、何等の波瀾もありません。駒井家から出た者も、神尾から出した者も、一樣に功を樹て、見れば、恨意はない。

それから第四番以下は、第三番までとは段の違つた射手でありました。三枚さも的を碎くのは甚た稀で、大抵は三本の矢のうち一本は射外すのであります。それで十六騎のうち三枚の的を打ち

砕いたものは都合五騎ありました。他の十一騎は二本だけ、でも皆相當の面目を拍することなくして流鏑馬を終わりました。

この十六番の射手が流鏑馬を終つて、馬を乗り鎮め、馬場を乗廻して假屋へ歸る勢揃ひがまた見物になります。

その中でも、如何しても評判に上り易いのは宇津木兵馬であります。

「あれは駒井能登守様のお小姓じやさうな、駒井の殿様は鐵砲の名人、其であのお小姓までが弓の上手」

兵馬は成るべく人に見られたくないのので、笠で隠すやうにしてみました。

神尾主膳は過ぎ行く十六騎の射手を見送つてゐましたが、小森は其處へ來るまで得意氣に挨拶する。主膳は其れに會釋しながら其の次に來る宇津木兵馬の面を笠の下からよく覗いて見ようとしませんでした。

流鏑馬が済むと、他の射手は、また假屋にゐる間に宇津木兵馬だけは引き離れてしまひました。兵馬は流鏑馬の時の後兩笠に行騰で、同じ黒い逞しい馬に乗つて、介添や的持を引つれて假屋へ歸つて、直ちに衣服を改めて編笠で面を隠して大泉寺小路さいふのを、ひそかに廻つて、やはり人に知れぬやうに能登守の屋敷へ歸るものと見えます。

兵馬が行くさ其のあとを、二人の同心がつけて行きました。

流鏑馬が終つて花火が盛んにあがりました。そろ／＼歸りに向いた群集と、これから繰り出して來る連中とで人出は容易に滅退の色を見せません。

「お歸りたく、奥様方のお歸りた」

さいふ聲で人波の揺り返しがあります。

前の通り路を、美事な女乗物を真中に盛裝した女中達が附き添うてその前後には侍や足輕が固めて、馬場の庭から、それ／＼の邸へ歸るものらしい。

兵馬も亦此の人波の揺り返しの中へ捲き込まれて押されて行くより外はありません。押され押されて行くうちに、つい其の女中達の行列と押し並んで歩かねはならないやうになりました。この際、

「喧嘩だ！」

この聲はよくない聲であります。この場合に此んな善くない聲の聞えるのは不祥な事であつたけれども、この行列の練つて歸らんとする行手で、

「喧嘩だ、喧嘩だ」

續けざまに聞えたので、スワミ聞く人の面の色を變へました。

噪きの起りは正しく前の露店と小屋掛のあたりから起つたものに相違ないのであります。

「それ、喧嘩だ」

甲州の人間は人氣の荒い事を以て有名であります。今日の催しとても、軍に流鏑馬の神事だけを以て此の景氣を打ち留めにするのは物足りないと思つてゐる處へ、

「喧嘩！」

この聲は、無茶な群衆心理をこしらへ上げるのに充分な聲でありました。

女乗物の行列の前後左右から鬨の聲が起りました。併し此の鬨の聲はまた別段に危険性を帯びた鬨の聲ではなく、たゞ、喧嘩！たゞいふまた内容のわからない叫喚の應ずる意義の不明な合圖に過ぎません。

併し、この女乗物の行列には多分の附添もあるし、沿道の警戒も行き届いてゐるから、それに懸念はないけれども、前に當つて其の騒ぎの爲に、一時行列の進行が留まる事はよくないのであります。それが爲に、混亂を大きくすると困ることになる。それだから駕籠側の侍や足輕達は、屹と用心して眼を八方に配ります。

「喧嘩た、喧嘩た」

前の方の騒ぎが大きくなるにつれて後の方の彌次の聲も大きくなりました。併し、その何れも此の身分のある女房達に危害を加へようとして起つた叫喚でないことは確であります。

今、さある小屋掛の中から跳り出した裸一貫の男がありました。

裸一貫といつても、腹には新しい晒を巻いてゐました。さうして裸體であるに拘はらず、脚絆を

草鞋だけは着けてゐました。その上に釣り合はない事は、脊中に青地錦の袋に入れた長いものを廻して、その紐を口で咬へて居ました。

其の小屋掛から跳り出した時には、左の片手に短刀を揮つて、右の片手はさ見れば、其れは二の腕の附根のあたりからスツボリと斬り落されて——今斬り落されたわけではない、斬り落された腕のあさは、疾うに癒え着いてゐましたが

「如何でもして見やがれ」

短刀を振り廻した左の手首にも血がついてゐるし、面の眉間を少し避けたあたりにも血が滲んでゐました。

「野郎、巫山戯やがつて……」

小屋掛から一團の壯漢が其のあさを追つて飛び出しました。

それ等の者を見るに、何れも博徒であります。

喧嘩！といふのは此れであつた。つまり博徒の喧嘩なのであつた。賭場荒しを取つて押へて簀巻にしようとするものらしい。

この煽りを食つて宇津木兵馬も人波の中に揉まれてゐなければならなくなつたし、奥方様といふ女乗物の一行が、まさにも其れと打突かつたのは氣の毒でもあり慮外千萬な出来事でもありません。

「無禮者、控へろ」

お供さきの足輕や侍が駆つけました。

「如何でもして見やがれ」

短刀を揮つた裸一貫の男は、敢て警固の足輕や侍を畏れようとはしません。

「控へろ！」

棒を持ったのが、追つかけて来る博徒を遮りましたけれども、博徒連中は、そんなものが眼に留まらぬ位に氣が立つてゐました。

「野郎、巫山戯やがつて……」

「無禮者、控へろ」

こゝでお供先の足輕や侍は、博徒連を取り押へる爲に彼等を相手に格闘せねはならなくなりました。

「喧嘩だ、喧嘩だ」

と群衆はいよ／＼沸き立たないわけには行きません。

短刀を左の手で揮つた裸の男は、右の手が無いに拘はらず、其の身體のこなしの敏捷な事は驚くべしであります。

取り押へやうとする同心や足輕の手先の棒先を滑り廻つて、彼方へ抜け、此方に抜ける早業が、

充分に喧嘩と人騒がせに慣れきつてゐるもの、振舞です。

女乗物を圍んでゐる女中達は泣き出しさうです。

宇津木兵馬のあとを追うてゐた二人の同心は此の騒ぎでも兵馬を見捨て、其の騒ぎの方へ出向くことを躊躇しました。

「左様、それでは」

一人が一人の耳に口をつけて囁やくと、囁やいた方が人を分けて前へ進み出し、囁やかれた方は、もごのまゝに、兵馬を監視してゐるらしい。

この時は、すべての催しが濟んで花火が盛んに揚りました。崩れ立つた人の足、歸りに向く人も、出かけて来た人も其處で食ひ留められ、吸ひ寄せられて、押す、踏む、倒れる、泣く、叫ぶ、喧嘩ならぬ處に喧嘩以上の動搖の起ることは免れないのであります。

喧嘩の起りは、たつた一人の仕業らしいが、その及ぼす處が怖ろしいと心あるものは其れを憂へてゐました。

こゝで青地錦の袋へ入れた刀を口に啣へて裸體で荒れ狂つてゐる片腕の男が、んりきの百蔵であることは申すまでもありません。

百蔵一人がエライ譯ではないけれど、百蔵一人の爲に大混亂を引起してその大混亂が阿鼻叫喚の世界に變らうとする時でありました。肝腎の百蔵は何時の間にか、群衆の頭を踏み越えて荒張の

見世物小屋の丸太を傳つて屋根から屋根を逃げて行きます。

「野郎逃がすな」

それと見た博徒や破落戸の連中は同じやうに丸太を足場にして、見世物小屋へ這ひ上つて追つかけてました。

それで下の騒ぎが上へうつつたのさ、役人達の取鎮めが効を奏して、下の方の動搖は鎮まりましたけれども、下の動搖が上へ登つた時に却つて事を一層の見物にしてしまひました。

それは今まで此の事の騒ぎが一體何に原因するのかわからずに騒いで居た連中が、仰いで見れば、兎も角も其の成行が見られるやうになつたからであります。それですから、事を怖がる女乗物の連中などの外は、一人も此の場を立ち去るものがありません。

が、い、い、きは血塗れになつて、丸太から丸太、蓆から蓆を傳つて猿のやうに走つて行きます。それが見えたり隠れたり、眼もあやに走るさそのあさを同じやうに裸體になつた荒くれ男が、

「野郎逃がすな」

と罵つて何人もなく蛙のやうに飛びついて行くのですから、其の原因と人柄はよくわからないながら、慥に面白い見物であることには相違ありません。

この時分に短刀を投げ捨て、しまつてゐたが、い、い、きは、それでも青地錦だけは口に啣へて放すことではありませんでした。

小屋から小屋を飛んで歩いたが、い、い、きは、何時の間にか馬場の棧敷の屋根へ飛び移つてゐました。「それ野郎が棧敷の屋根へ飛んだ」

蛙のやうな裸體が、棧敷の屋根、棧敷の屋根と云ひながら飛びついたられども、これ等の裸體は、が、い、い、きのやつたやうに手際よく、小屋掛から棧敷の屋根まで飛びうつることが出来ません。

彼等は一旦、小屋の盡きた處で飛び下りて、搦手から、この棧敷の屋根へのぼり初めました。

「エツサ〜」

棧敷の柱と屋根とは見る／＼裸體で鈴成になつてしまひました。

棧敷の屋根の上をツーと走つたが、い、い、きの百藏は正面の馬見所の方へ逃げて行きます。こゝは大田筑前守と駒井能登守の兩席のあつた處で、他の棧敷は此處を正面として長く左右の花道のやうになつてゐました。それですから、ツマリ兩花道から追ひ込んだ捕物を本舞臺で立廻りを見せ、捉まへるか逃がすかといふ場合にまで展開されてしまひました。

此の意外の見物を如何して見残して歸れるものか。流鏑馬の競技があまり上品に取り行はれて期待したほどの興味を齎さなかつたのを飽かず思つてゐた大向は、これで充分に溜飲を下けようとするのであります。

沈んだ日暮れは云ふものゝ、白根の方へ夕陽の光が一際赤く夕焼をこしらへて、此の棧敷の屋根へ金箭を射るやうにさしかけてゐましたから、下の廣場から見物するにはまた充分の光であり

ました。殊に夕暮の色は、この活劇の書割を一屏溢いものにしたから、白晝に見るよりは凄い舞臺面をこしらへて、登場の裸蟲共のエツサ／＼云ふ聲も物凄いやら、勇ましいやら。

これから屋敷へ歸らうとした神尾主膳も亦此の騒ぎを見物しないわけには行きません。主膳は其の類の者と共に馬場の下から棧敷の上の舞臺面を見上げてゐるうちに、何に氣がついたか、面を繋めて慌た／＼しく左右を顧み、

「小森殿、小森殿」

と呼びました。

エツサ／＼といふ裸蟲は兩方まら取り詰めて、がんりきの百藏は、正面をきつて、彼等を待ち受けるより外は身動きのならぬ立場に至つてしまひました。右の方は八幡宮の屋根までは距離が遠いし、前は馬場、後は控への小屋、何方へ向いても人が充満しきつてゐます。

「野郎」

裸蟲が一匹飛びつきました。

「何をしやがる」

がんりきは左の拳を固めて、眼と鼻の間を突くと、裸蟲が仰向けに棧敷の上から突き落されました。

「この野郎」

つゞいて飛びかゝる裸蟲、般若の面を背中に彫りかけてある裸蟲。

「手前もか」

がんりきは平手でヒシヤリと横面を撲つて置いて、足を飛ばして腹の處を蹴ると、これも真逆さまに轉け落ちる。

「野郎」

第三の裸蟲。

「巫山戯やがるな」

第四の裸蟲。

「この野郎」

第五の裸蟲。

「野郎、野郎」

第六の裸蟲と其れ以下の裸蟲。

屋根の上の裸蟲は、お互にとつて勝手でもあり不勝手でもありません。捉まへ處の無い事は敵に取つて利益であれば味方に取つても同じく利益であるやうに、味方に取つて不利益な時は、敵に取つても不利益であります。

殊に、片腕の無いがんりきの百は、片腕が無いだけ、それだけ捉まへ處が少いわけであります。

が、んりきの立場から云へば、取り組ませては萬事休するのですから、その敏捷な身體のこなしと、自由自在な一本の腕を以て、敵に組ませないうちに、突き落してしまふに限るのであつて、が、んりきはよく其の策戦に成功しました。

青地錦に包んだ長い物だけは、抜く暇が無かつたか抜かない方が勝手であつたのか、が、んりきの百は、その紐を口に啣へたまゝで其れを以て自分を守らうとしないので、身を以て其の袋を守らうとするもののやうにも見えませぬ。

寄せて来た裸蟲も、が、んりきを取つて押へる目的と、一つには其の青地錦を弓勢らうとする目的と二つがあるやうに見えました。その二つは何れも成功しないで、大の裸蟲が、ズドンボタンと高い處から突き落されたり、尻餅を搦いて其のまゝウオーターシユートをするやうに下へ江り落ちてギヤツと云ふものもありました。

悶かしがつて此の屋根の上の組んづほぐれつの活劇を見てゐた神尾主膳の許へ、小森蓮藏が弓矢を携へてやつて来ました。

小森は流鏑馬の時の姿ではなく、羽織は着ないで袴だけつけて、やはり白重藤の弓に中黒の矢二筋を添へてやつて来ました。

小森を迎へに行つた侍が其のあさから廿四差した船を持つて伴つて来ました。

「小森殿、早う」

「神尾主膳が招きました。

「何事でござる」

「小森殿、大儀ながら、あの悪者を仕留めて貰ひたい」

神尾に云はれて、屋根の上の騒ぎを見てゐた小森の眼には、やゝ迷惑の色がかりました。

「一體、あれは何事でござる」

「あの中での悪者は、あれあの袋に包んだ太刀を持つてゐる其の片腕の無い奴がそれじや、察するにあの太刀を奪ひ取つて逃げようとするのを、多勢に追ひつめられて、逃げ場を失つたものご見ゆる、併し、片腕ながら、多勢を相手に委ままぬ處は面憎なき奴、こゝから遠矢にかけて射て落し、多勢の難儀を救うてやりたいものじや」

「確と左様でござるか、あの真中に立ちましたか一人が、確に悪者でござりまするか」

小森は念を押しました。

「確と左様、あの悪者を射て落せば事は落着する、萬一、此のまゝで同類が加勢すると容易ならぬ騒動になる」

「然らば、仰せに従ひ、あれを一矢仕らう、併し、神尾殿、あの通り組んづほぐれつの中では覘ひは至極困難致す、足を傷つけて下へ落し、命は助けて置きたいと存するが、一圖にさうもなり兼ねる、萬一、一矢で、あの者の息の根を止めても後日の難儀はござるまいか」

「それは念には及び申さぬ、なまじ射的して射損するよりは、聊かも遠慮せず一矢に射落し候へ」
 「然らば、仰の通りに仕る」

「命があつては却て後日の面倒、物の見事に射殺して苦しうない、あこの責は拙者が引き受ける」
 「然らば」

小森運藏は片肌を脱いで白重藤の弓に中黒の矢を番ひました。

「卑怯だ、々々々」

さいふ聲が此の時、周囲の群集の中の誰からともなく起つて、

「また何方が如何なにか判らねえんだ、それを無暗に遠矢にかけるのは卑怯だ、もう些つこはかり待てやい、これからの立廻りが面白いんだ」

やはり誰ともなく叫ぶ聲であります。それには頓着なく小森運藏は弓をキリ／＼と満月のやうに引き絞つて覗ひをつけたのは屋根の上のがんりき、の百であります。

小森は弓を満月の如く引き絞りましたけれども、組んづほぐれつの中に、がんりきたけへ矢先を向ける事が六づかしい。外の奴等へは怪我をさせないで、がんりき一人を射て落さうとする爲に覗ひに時間を要するらしい。

その間に、見物は漸く不穩の色を以て小森の弓勢を眺めるやうになりました。

「何も、あゝやつて、飛道具を用ひるまでの事は無からうじや無えか、悪い者なら行つて引括つ

て来るが宜からうじや無えか、役人が手を下すまでの事が無けりやあ、彼奴等に任せて置いたら宜かりさうなものや無えか、何が何たかわからねえうちに射殺してしまはうさいふのは餘まり亂暴だらうじや無えか、第一、今日は八幡様へ流鏑馬の奉納、その日に神様の前で血を流すさいふのは不吉たらうじや無えか、野郎共は裸體で喧嘩をしてゐるのに、それを弓矢であしらうさいふのは卑怯たらうじや無えか」

さいふやうな考へが誰の胸にも一杯になつたから、其れで程かならぬ色を以て、神尾一派の者さ小森の矢先を眺めました。

「よせやい、よせ／＼、弓なんぞ廢しやがれ」
 「さ遠くから罵るものもありました」

「撲れ／＼」

さいふ者もありました。

見物は、もごより、屋根の上の騒ぎが何に原因して起り、ドチラが善いのか悪いのかわかつてはゐないけれども、それを遠矢にかけようさいふ大人けなない武士達のやり方には満足する事が出来ないであります。そこで人氣は險惡になつて罵詈雑言が湧いて出ました。併しまた石を降らしたり土を投げたりする處までは行きませんでしたけれども、小森の覗ひが容易に定まらないのを痛快がつて噓し立てました。

神尾主膳等は、いつかな屈せず、凄い目をして、やゝもすれば暴動をしさうな左右の群集を睨めてゐました。兎も角も其の威勢で群集は壓へられてゐます。

正面の馬見所の大屋根の上では、がんだりき一人舞臺で多勢を相手に立廻つてゐることは前の通りであります。組ませないで突くといふ策戦が、よく成功して、多勢の命知らずを委ませてゐることも前の通りであります。そのうちに、多勢の命知らずが左右へ散つて、がんだりきの身體が一つ、真中へ丁度よい鹽梅に離れた時分を見済まして、此の時さばかり、満々張つた弓を切つて放さうとした途端、さう間違つたのか知らないが、さしも手練の小森の矢先が竹トンボのやうに狂つてクルクル廻つて右の上の棧敷に張りめぐらした幔幕の上へポーンと當つて、雨垂のやうに下へ落ちてしまひました。

これはと驚く小森の手に持つた弓の弦が切れてゐました。

「無禮者！」

小森は弦の切れた弓を抛り出して刀を抜き打にするこ、

「態あ見やがれ！」

抜き打にした小森の面を目がけて一挺の花鉄を投げつけた旅人風體の男、笠を冠つて合羽を着て草鞋に脚絆なのが、棧敷の下を潜つて身を隠した其の素早い事。

それよりも早いのは、今棧敷の下へ潜つたかと思ふと、もう其の裏から同じ男の姿が棧敷の屋根

の上に現はれた事でありました。

「あれよく！」

さううちに其の男は平地を飛ぶやうに棧敷の屋根の上を飛んで正面大屋根の修羅場へ驅けつけるのであります。

弦を切つて投げつけた花鉄だけは受け止めたけれども、小森は齒齧をして空しく其の敏捷な男の走るのを見送るだけでありました。

小森は齒齧みをしたけれど、見物は一度にドツと喝采しました。喝采して、

「態あ見やがれ！」

と怒鳴つた時は、小森の矢が幔幕へ當つてダラリと落ちた時でありました。彼等は其の大人氣な侍が、見ん事。矢を射損じたこと見たから其れで、

「態あ見やがれ！」

と喝采したのであります。そこに別の人が潜り込んでゐて、花鉄で今張り切つた弓弦をチヨキンと切つてしまつて、態あ見やがれと叫んで、花鉄を投げつけて、棧敷の下へ潜つて行つたといふやうな細かい働きは彼等には認める事が出来ませんでした。

彼等が認める事の出来なかつたのは無理もない事で、すぐ其の傍にゐた神尾主膳をはじめ數多かりし侍達までが、小森の飛んでもない失策が何によつたかを知ることが出来ないうで呆氣に取られ

るばかりでありました。

さすがに小森だけは其れを知つて直に弓を捨て、刀を抜きましたけれど、花鉄を受け留めた。けで、當の敵にはサツパリ手答へがありません。

罵る群集も、驚く侍達も、齒齧みをする小森も、一齊に屋根の上を見上げた時に、前の通り屋根の上を平地を駆けるが如くに飛んで行く旅人體の男を見るのみであります。

その時は、もう小柄を投けても及ばない時で、勿論、弓の弦をかけ直したり、替弓を取り寄せたりする餘裕はありませんでした。

「この缺で、これ此の通り、憎い奴だ」

小森は落ちた花鉄を拾ひ上げて、神尾に示し、人混みの中に紛れ込んでゐた奴が、不意に此の缺で張り切つた弓弦を後から切つたさいふことを、言葉と舉動とで忙はしく説明しました。

「實に言語道斷の敏捷い奴じや、掏摸共の仲間相違あるまい、あれあの通り」

屋根の上の旅人體の男を小森は空しく指して無念の形相を示すのであります。

それで侍達は合點が行つたものの、群集は其んな事はわからないで、屋根の上の裸蟲の處へ、新たに旅人體の笠に合羽の男が一枚駆けつるから、其れは敵か味方かさ片唾を飲んでゐる間もなく、大屋根まで駆けつけた右の男は、いきなり群がる裸蟲を片端から突き落しはじめました。

「それ／＼、面白いぞ、手んぼうの方へ加勢が出た」

其の加勢は幸ひに無勢の方へ出たのだから、見物を嬉しがらせました。一人でさへ、かなりの振舞をしてゐる處へ、また一人、同じやうに身の軽いのが飛び出したから見物は大喜びでありました。

併し、二人になつて見ると、もう大向うを喜ばせるやうな派手な藝がしてゐられなくなつたものが、無茶苦茶に裸蟲を突き落すやうに見せて、不意に屋根のうしろへ隠れてしまひました。

「それ飛んだ／＼、屋根から飛び下りたぞ」

さいふ聲が棧敷の裏の方から起りました。成程、表から見ても屋根のうしろへ隠れたと見た時は、二人は相ついで高い處から僅の地面へ軽く飛び下りてしまつてゐます。

「そうれ、逃がすな」

裸蟲共は續いて飛び下りる、取り巻いてゐた群集は道を開く。

「斯うなりや此方のもつた、芋蟲共、成らは手柄に追つ蒐けて見やがれ」

群集がバツと散つて開いて呉れた道を、笠に合羽の旅人體と、裸體に脚絆のがんりきこが疾風の如く駆け抜ける足の早い事。

二人は街道、人家、畑の中を區別なく北を指して駆けて行く、それを追つ蒐ける裸蟲も彌次馬も、要するに二人の逃げて行く逃げつぶりに比べると芋蟲のやうなものです。

十五

その夕べ能登守の邸から、能登守の定紋をつけた提灯と、お供揃ひがあつて、一挺の乗物が出ました。主人の殿様が公用で何方へかお出でになるのたらうと門番の人は皆んなさう思つてゐました。

けれども、此の乗物はお役宅へも行かず、御城内へも入らず、お代官のお陣屋へもお出でになるのかと思へはさうでもありません。長禪寺まで来て此の一行が止まつたから、さては何か不意の御用があつて此のお寺へ御参詣の事と思はれました。長禪寺は甲州では恵林寺に次ぐの關山派の大寺であります。こゝに能登守が訪ねて来ることは不思議とするに足りない事でもあります。

方丈と暫らく對談があつたらしく、やがて乗物とお供とが此處から歸つて行く時分に、その裏山の宵闇に紛れて行く宇津木兵馬の姿を見ることが出来ました。

さては、能登守の乗物で来たのは本人の能登守ではなくて、此の宇津木兵馬であつたらうと思はれる。

長禪寺の裏山の林の中を潜つて、さある木蔭に腰を掛けた兵馬は、そこで息を吐いて甲府の町の中を見下ろしました。

甲府へ来てから兵馬は色々の目に遭ひました。僅の行き違ひから永久に目の目を見ることが出来

ない事になる處でした。兎も角も斯うして脱け出る事の出来る身の上になつた事は喜ぶべき事でせう。

これから兵馬の落ちて行かうとする目的は、長禪寺を脱けて道もなき裏山傳ひを一先づ甲斐の恵林寺へ行くのであります。

甲府で世話になつた色々の人に名残なごりも残るけれども、長い間、目ざす敵の机籠之助が、また慥に此の市中の何れかに潜んでゐるたらうといふ心残りが一層、兵馬をして甲府を此の儘見捨て難いものにするのでした。

けれども、これは永久に甲府を去るの門出かどでではない、自分は能登守に教へられた通り、これより程遠からぬ松里村の恵林寺へ落ちて、暫らく其處に隠匿かくまひつて貰うのである。その間に、心して斷えず甲府の動靜を伺ふことが出来ると思へば、その名残は、左ほご切ないものではありません。

兵馬はその目的で松の林の中の闇に紛れて道なき山路を進んで行きました。前の日に七兵衛やがんりきが通つて来たと同じ道、そこで馬場を見下した要害山の後から帯名おびなと柵山さくやまとの間を越える甲府からの裏道に沿うて、併し、それも成るべく路を通らないつもりで、山を分けて行くこゝ、前を提灯が三つばかり行くのを見ました。

その提灯の通る處は、西山梨から東山梨へ出る間道であります。大方、此方の方から今日の流鏑馬を見に来た土地の人が夜になつて大勢して通るのたらう。その人達に見つけられたくもなし、

その人達も自分の姿を見たら、驚くかも知れないから、遣り過ごしてしまはうと兵馬は、またも暫らく木の蔭にかくれて、その提灯の通り過ぐるのを待つてみました。

程なく自分の隠れてゐる眼の前へ来た提灯は、初めに兵馬が見つけた時も、たゞ提灯だけで人聲がしませんでしたけれど、今眼の前を通り過ぐる時も、やはり話の聲がしないで甚だ静かなものであります。

淋しい山路を人数の勢で通る時などは、つとめて大きな聲で話をして景氣をつけるのが當り前であります。殊にお祭の歸りであつて見れば、盛んに土地訛の若い衆の聲などが聞えなければならぬ筈なのを。提灯の数が三つもあるのに、さりとは餘りに静かな——と兵馬を不審がらせるほどに静かな一行であります。

いよく前へ来た時に、木蔭から覗いて見れば、それは全體が人ではなく、二挺の駕籠の廻りは数人の人で其の前後は三個の提灯でありました。

は、あ、これはお祭の歸りではない、婚禮かとも思ひました。婚禮にしては、あんまり静やかに過ぎる。さては病人を甲府の町へ連れて行つて其の歸りであらうと兵馬は、さうも思つて見てゐるうちにふと提灯のしるしに眼がさまりました。

前に下り藤の紋が大きく書いてありました。下り藤は自分の家と同じ紋であるから兵馬は、何の氣なしに其れを見ると其の下に小泉と記してありました。はつと思つて其の裏を見ると「八幡村」

さいふ文字が弓張の蔭になつてゐます。

八幡村で小泉と云へば、わが嫂の實家ではないか、嫂とは誰れ、一時は兄文之丞の妻であつたお濱の事——あ、その駕籠の中の主は誰人、兵馬はそれが爲に胸を打たれました。

お濱は死んでしまつたけれども、その母なる人も、兄なる人も、兄の嫁なる人も、その夫婦の間に出来た子供までも兵馬は知つてゐるのであります。

裏街道を越えて其の家まで遊びに来た昔の記憶も残れば、殊に嫂のお濱が、自分の來ることを覚えて、手づから柿の實などを折つて呉れた優しい事の思出も忘れようとして忘れられません。

餘りの懐かしさに兵馬は、あさ追ひ蒐けて名乗りかけようかと思ひました。

けれども、今の兵馬の身では其れも遠慮をしなければなりません。是非なく兵馬は色々の空想に驅られながら、其の駕籠の後を追うて同じ方向へ進んで行きました。

駕籠も提灯も相變らず物を云ひません。何か話でも起つたならば、その駕籠の中なる人が大よを見當がつくので有らうと思ひました。

斯うして暫らく山路を進んで行くうちに、

「その駕籠、待たつしやい」

さいふ聲で、山路の静寂が破られました。「待たつしやい」さいふ聲は少くとも士分にゆかりのある者でなければ、掛けられない聲でありましたから、さては向うから進んで來た侍の何者かによ

つて、其の駕籠の棒鼻が押へられたものたらうと兵馬は、亦其處に止まつて成行を見てゐました。「八幡村の小泉家から、今日の流鏑馬を御見物の客人二人、是非にお泊め申さうとしたのを、如何あつても今夜中に歸らねばならぬ用向がござるさうな、それ故に夜分を厭はず斯うやつてお送り申す、さうか此の儘で失禮を」

「いやもう御遠慮なく、今日の騒ぎといひ、近頃は、さうも世間が落着かない故に、我々も每晚斯うして此の山路を宵のうち一度づゝお役目に廻るのでござる、左様ならはお大切に」

双方で、こんな事を云ひ合つて、疑念も蟠まりもサラリと解けて、其のまゝ、駕籠は前へ進んで行き、此方へ来る人影は、提灯も何も持たないけれど、三人ほごに見えました。

兵馬は木蔭から其れをやり過ぐすと、それからの山路はまた静かなものになつてしまひました。提灯も駕籠も附添のものも何も云ひません。

山路のつれづれに駕籠の中にある人は、何さかお愛嬌に外の人に言葉をかけても宜からうと思はれる位であります。附添の人も亦何か話し出して、駕籠の中の人の無愛想を助けてやればよいにと思はれる位であります。

五里の山路が斯うして盡きて、駕籠は八幡村へ入りました。江曾原へ着くと、著るしく眼につく門構へと、土の塀と、境内の森と竹藪と往來からは引込んであるけれども、其處へ入る一筋路。

二挺の駕籠は其の屋敷へ入つて行きました。その屋敷こそ兵馬には忘るゝことの出来ない嫂のお

濱が生れた故郷の家なのです。

兵馬は其れを側目に見たゞけで、その夜のうちに惠林寺まで急がねはなりません。

惠林寺へ行く宇津木兵馬と前後して、八幡村の小泉家へ入つた駕籠の後ののは机龍之助であります。その前のはお銀様でありました。それを兵馬が其れと知らずに送つて来たことも、計らぬ因縁でありました。机龍之助とお銀様が、斯うして相結はれたことも、計らぬ因縁でありました。けれども、それよりも不思議なのは、龍之助とお銀様が、ごちらも其れと知らずして送り込まれた家が、お濱の生れた家であるといふ事です。龍之助は曾て其の悪縁の爲にお濱を手にかけて殺しました。その人の家へ、別の悪縁につながる女と共に来るといふことは、それは戦慄すべきほどの不思議であります。

二人を此處へ送つて寄越したのは神尾主膳の計らひであります。机龍之助は主膳の手では殺せない人でありました。また殺す必要も無い人であります。お銀様は主膳の手で如何かしなければならぬ女であります。生かして置いては自分の身が危ない女であります。併乍ら、神尾主膳は、机龍之助を殺す必要のない如く、お銀様を亡き者として自分の罪惡を隠さねばならぬ必要が無くなりました。何さならば其れはお銀様が机龍之助を愛しはじめたからであります。机龍之助はまたお銀様の愛情に漸く満ち足りる事が出来たらしいからであります。

お銀様の龍之助を愛することは火のやうでありました。火に油を加へたやうな愛し方でありました。眼の見えない机龍之助は、お銀様を單に女として見る事が出来ました。女性の表面の第一の誇であるべき容貌は、お銀様に於て残る方なく蹂躪し盡されてゐました。ひざり机龍之助にとつて其の蹂躪は理由なきものであります。

お銀様には最早、幸内の亡くなつたといふ事が問題ではない。神尾の毒計を悪むといふことも問題ではなくなりました。お銀様の肉身は此の人を愛すること、この人に愛せらるゝといふことこの炎の中に投げ込まれて他に何物もないらしい。

この體を見て神尾主膳は、ひそかに喜びました。二人を此處へ移すことによつて、自分の罪惡に差障りの來ない事を信するほかに主膳は其れを見て取る事が出来たのでせう。

お銀様の巻了

一五 慢心和尙の巻

一

お銀様は今、龍之助の爲に甲陽軍鑑の一冊を讀みはじめました。

それは高坂彈正と申して信玄公被管の内にて一の臆病者也、仔細は下々にて童子のざれごとに保科彈正と高坂彈正と申しならはすけに候、我等が元來を申すに父は春日大隅とさて……。

それは卷の二の品の第五をはじめから、お銀様はスラ／＼と讀みました。

龍之助が大人しく聞いてゐる爲に品の第六を讀み了つて第七にかゝらうとする時分に、

「有難う、もう宜しい」

「夜分には、また源氏物語を讀んでお聞かせませう」

二人共に満足して、その讀書を終りました。お銀様は書物に疲れた眼を何心なく裏庭の方へ向けるさ、小泉家の後には竹藪があつて、その蔭にまたお銀様の好きな椿の花が咲いて居りました。

お銀様は其れを見るさわざ／＼庭へ下りて、その一輪を摘み取つて來ました。重々しい赤い花に

二つの葉が開いてゐます。

「お目が見えるよ、この花を御覽に入れるのだけれど」

柱に凭れてゐた龍之助の前へ、お銀様はその花を持って來ました。

「何の花」

「椿の花」

お銀様は其の花を指先に挿んで子供が彌次郎兵衛を弄ぶやうにしてゐました。

「他愛も無い」

龍之助は其の花を手に取らうともしません。お銀様は、たゞ一人で其の花をいぢくりながら無心にながめてゐました。

さてお銀様は、机の上をながめたけれども、其處に、有野村の家の居間にあるやうな一輪差の花花活いけも何もありません。

「お銀」

龍之助はお銀様の名を呼びました。それは己が妻の名を呼ぶのと同じやうな呼び方であります。

「はい」

お銀様は斯う呼ばれて斯う答へることを喜んでゐました。自分から願うて其のやうに呼ばれて此のやうに答へることを望んでゐるらしい。

けれども龍之助は呼び放しであさ何の用とも云ひませんでした。たゞ名を呼んで見て、呼んでしまつては、もう其の事を忘れてしまつてゐるやうでしたが、實はさうではありません。

「あなた」

お銀様は椿の花を面に當て、その二つの葉の間から龍之助の面をながめました。

「この花を如何しませう、わたしの一番好きな椿の花」

お銀様はクル／＼と椿の花を指先で操りました。

龍之助は返事をしません。けれどもお銀様は其れで満足しました。

「生きて置きたいけれども、何もございせんもの」

お銀様は、わざとらしく其の花を持ち扱つて机の上や室の隅なぞを見廻しました。この一間に佛壇があることはお銀様も前から知つてゐました、けれども、この花は佛に捧げようと思つて摘んで來た花ではありません。處が、持て餘し氣味になつて見ると、そこが此の花の自然の納り處所であるらしい。

お銀様は其の二葉の椿を持つて、佛壇の扉を開けた時に、また其んなに古くはない白木の位牌がたつた一つたけ薄暗い處に安置されてあるのを見ました。位牌が古くないだけに其の文字も、骨を折らずに讀むことが出來ます。

「悪女大姉」

さ讀んでお銀様は手に持つてゐた椿の花を取り落しました。

「悪女大姉」の戒名は尋常の戒名ではありません。

不貞の女をも尙ほ且つ貞女にし、不孝の子をも尙ほ孝子として彼方の世界へ送るのが人情であり
回向でもあるべきに、これは餘りに執念の残る戒名であります。

何の怨みあつて其の近親の人が此の位牌を祀るのたか其の氣が知れないと思ひました。また何の
意趣があつて引導の坊さんが此戒名を擇んだのたか、その氣も知れないと思ひました。

それがお銀様に取つては、單に文字の示す悪い意味の不快な感じだけでは留りませんでした。悪
女！お銀様はむらくとして、こゝにまで自分を見せつけられる憤りから忍ぶ事が出来ないもの
のやうです。けれども、この位牌はお銀様に見せつける爲に置かれたものでないことは、その木
の肌を見ても墨の色を見てもわかる事であります。

お銀様が此處へ来る、すつと前から、たつた一つ、斯うして此處に置かれてあつたのたといふ事
も、いかに逞しい邪推を以て見ても其れは疑へないのであります。

お銀様は悪女の文字から来る不快と悪感とをこらへて、その事は龍之助に向つて一言も云ひませ
ん。折角の椿の花を拾ひ上げて、わざと後向に花立へ差して、佛壇の扉を締めてしまひました。

その晩の事、お銀様は龍之助を慰める爲に話の種の一つとして、ふと此の事を言ひ出す氣になつ
て、

「そこにお佛壇があります、その中に妙な戒名を書いたお位牌がたつた一つだけ入れてありま
した、何のつもりで、あんな戒名をつけたのたか、わたしには、さうしても判りませぬ」

「何といふ戒名」

「悪女大姉といふのでございます」

「悪女大姉、如何いふ文字が書いてあります」

「悪といふのは善惡の惡でございます、女といふのは女といふ字」

「成程、悪女大姉、それは妙な戒名じゃ」

「ほんまに忌やかな戒名ではござんせぬか」

「戒名には、つごめて難有がりさうな文字をつけるのに」

「それが悪女とは如何でございます、死んだ後まで悪女と位牌に書かれる女は、餘程の悪い事を
したのでございませう」

「誰かの悪戯たらう」

「いゝえ、さうでは御座いませぬ、立派な位牌に其の通り記してあるのでございませぬ」

「はて」

「若しわが子ならば親が無言つては居りますまい、妻ならば夫たる人が、悪女と戒名をつけられ
て無言つてゐやう道理がムいませぬ」

「如何も解せぬ、讀み違へではないか」

「いゝえ」

「その悪女の悪さいふ字が、たゞへは慈さか悲さかといふ文字が墨の加減でさう見えるのではないか」

「さうではございませぬ」

「慈女大姉、悲女大姉、その邊ならば有りさうな戒名だが、好んで悪女と附ける者は無からう、それは御身の讀み違へに相違ない」

「いゝえ、確に」

お銀様は確に自分の眼の間違ひない事を主張したけれども、さう云はれて見るに、掛念が起りました。

「其んならば、もう一度見て参りませう」

お銀様は其れを曖昧に済ます事が出来ない性質です。立つて佛壇を開けて見ましたけれども佛壇の中は暗くありました。

「それ御覽遊はせ、悪女」

取り出してよいものか悪いものか懸念をしながら、お銀様は自説の誤らない事を保證する爲に、行燈の光まで其の位牌を持ち出しました。

「確に悪女？さうして裏には」

龍之助に云はれてお銀様が位牌の裏を返して見るに其處には「廿一酉の女」と記してありました。

その翌朝、龍之助は、お銀様に手を引かれて小泉家の裏山へ上りました。

徑を辿つて丘陵の上まで來ると、其處に思ひがけなく墓地がありました。林に圍まれた芝地の廣い間には多くの石塔と幾つかの土饅頭が築かれてありました。墓地ではあつたけれども其處は日あたりが佳くて眺めがよい。そこから眺めるに目の下に笛吹川沿岸の峽東の村々が手に取るやうに見えます。その笛吹川沿岸の村々を隔て、甲武信ヶ嶽から例の大菩薩嶺、小金澤、笹子、御坂、富士の方までが前面に大屏風をめぐらしたやうに重なつてゐます。それ等の山々は雲を被つてゐるのもあれば、雪を戴いてゐるものもあります。

お銀様は、その山嶽の重疊と風景の展望に心を躍らせて眺め入りました。

山嶽にも河川にも用のない机龍之助は、日あたりの宜い事が何より結構で、お銀様が風景に見惚れてゐる時に龍之助は宜い氣持であたりの芝生の上へ腰を卸して日の光りを眞面に浴びてゐる。

「あなた、其處はお墓でございませぬ」

お銀様に云はれて、さうかと思つたけれども、敢て立たうとはしません。

龍之助の腰を卸してゐた處は墓に違ひありません。他の墓とは別に孤島のやうに少しばかり土

を盛り上げた處に、無縫塔のやうな形をした高さ一尺ばかりの石が一つ置いてあるだけでありました。その前には、竹の花立があつたけれど、誰も香花を手向けた容子は見えず、腐りかけた雨水が一杯に溜つてゐるだけです。

龍之助が動かないから、お銀様も亦、その近い處へ蹲まりました。此處は誰も人の來る疊のない處です。天の日は二人はかりの爲に照らし、地の上は二人はかりを載せてゐるもの、やうです。あたりの林も静かでありました。丸腰で來た龍之助は遂に其處へゴロリと横になつて肱枕をしてしまひました。龍之助の横になつて肱枕をした其の頭のあたりが丁度、無縫塔の形をした石塔のある處であります。

それだから龍之助は墓を枕にして寝てゐるもの、やうです。寝てゐる龍之助は其れを何とも思つてはゐないらしいが、傍で見たお銀様は快よい形と見ることが出来ません。この人に墓を枕にして眠らせるといふことが好ましい事ではありません。それとも知らずに龍之助は、

「此んな處で死にたいな」

と云ひました。けれども其れは嘘です。龍之助が斯う云つたのは、それは、あんまり日の當りが宜くて、そこに足腰を悠々^{ゆる}と伸ばした心持が譬へやうが無いから、さう云つたのだけれど、お銀様は、やはり其の言葉を不吉の意味があるもの、やうに聞いて、

「石になつては詰まりませぬ」

お銀様は斯う云ひながら、ほごんご二人並んで寝るやうに片手を伸べて龍之助の頭の石塔の石を撫でました。石を撫でながら何氣なく石の裏を見るに、其處に、

「廿一酉の女の墓」

と小さく刻んであるのが、圖らず眼に觸れてソツとしました。其の氣になつて見れば、この石塔の前面には何の文字も無くて、裏にだけ遠慮をしたもの、やうに「廿一酉の女の墓」と刻んであるのが異様です。なほ他にある總ての墓とは、ほごんご除物のやうにされて、此の墓だけが一つ此處に置かれてあることも異様です。

それよりも亦、お銀様の胸を打つたのは、昨夜調べて見た「悪女大姉」の位牌の裏の文字が、これと同じことの「廿一酉の女」の文字であつた事です。

この文字を見た時にお銀様は蛇を踏んだやうな心持になりました。寝てゐた机龍之助は何を思つたかむつくりと頭を上げて起き直り、

「お銀ごの」

「はい」

「あの、此處は何村といふのであつたかな」

「こゝは東山梨の八幡村」

「東山梨の八幡村」

「八幡村の大字は江曾原えそげと申す處でございます」
 「八幡村の江曾原！」

龍之助が今改めて其れを聞くのは餘りに事が改まり過ぎる。こゝへ来てからも相當の日數があるのだから、假にも現在の己れのゐる土地の名前を記憶して居らぬといふ事はあるまい。けれども此の人は初めて其れを聞くものゝやうに念を押して尋ねて再びそれを繰返しました。

「して、今、我々が厄介になつてゐる家の主人の名は」

「小泉と申します」

「小泉、それに違ひないか」

「今更、そのやうな御念を」

「八幡村の小泉家、そこへ、拙者も、お前も今まで世話になつたのか」

「其れが如何どうかございましたか」

「小泉の主人といふのは、拙者の身の上もお前の身の上も皆んな承知で世話をしてゐるのか」

「いゝえ、わたしの身の上は知つて居りますけれど、あなたの事は少しも」

「其れと知らずに斯うして隠して置いて呉れるのか」

「左様でございます」

「お銀おんぎんごの、和女わにょの家は甲州でも聞えた大家であるさうじや」

「改めて左様な事をお聞きになりますのは」

「お前は此處から其の實家じつちやへ歸つて呉れ」

「まあ、何を仰おんがひいます」

「小泉の主人に頼んで、實家へ詫をして歸るがよい、今のうちに」

「わたしに歸れと仰おんがひるのでございますか、わたし一人を有野村へ歸してしまはうとなさるのでございますか」

「生命が借かしいと思ふならば、一刻も早く歸るが宜い、若し生命が借かしくないならば……それにしても歸るが宜い」

「何の事やら薩張さつはりわかりませぬ」

「わからないうちに歸るがよい、危ない事じや、これから先へ行くとお前も悪女になる」

「悪女あくにょとは」

「悪女大姉、廿一酉の女が今思ひ當つたよ」

「あなたのお言葉が、いよくわたしにはわからなくなりました」

「わかるまい、悪女大姉、廿一酉の女といふのは、拙者にも今までわからなかつた」

「あれは如何どうしたわけなのでございます」

「あれはな」

「はい」

「あれは、人に殺された女よ」

「可哀相に、さうして如何な悪い事をしましたの」

「お前がした様な悪い事をした」

「妾がした様な悪い事さば」

「男の魂を取つて其れを自分のものにしてさしたからじや」

「妾は其んな事は致しませぬ」

「今に思ひ知る時が来る」

龍之助が石塔の頭へ手をかけて立上がった時に、何處どこもなく一陣の風が吹き上げて來ました。

其の風が颯つし風のやうに颯々四邊の枯葉を捲き上げました。紛亂まごとして舞ひ上がる枯葉の中に立つた龍之助は、今その墓から出て來たものゝやうでありました。

「何だか、わたしは怖ろしいございます」

日はかゞやいてゐるのにお銀様は其の周圍が鉛のやうに暗くなる事を感じました。

二

机龍之助は其の晩ふらくさして小泉の家を出てました。

お銀様は龍之助の出た事を知りませんでした。それは龍之助がお銀様の熟睡を見まして密ひそに抜け出でたからであります。

小泉の家の裏手を忍び出でた龍之助は腰に手柄山正繁やまのしげの刀を差してゐました。これは神尾主膳から貰つたものであります。手には竹の杖を持つてゐました。これも甲府以來外へ出る時には離さなかつたものであります。面かほは例によつて頭巾で包んでゐました。

その歩き方は甲府に於て、辻斬を試みた時の歩き方と同じであります。或處は殆ど杖なしで飛ぶやうに見えました。或處は物陰に隠れて動かないのであります。自然甲府でしたことを此處へ來ても繰返すものゝやうに見えます。

けれども此處は甲府と違つて人家も疎まばらな田舎道であります。笛吹川へ注ぐ小流れに沿うて龍之助は、やゝ下つて行つたけれど誰も人には會ひません。人には逢ふこと無くして水車の車のめぐる音を聞きました。龍之助が其の水車の壁に身を寄せた時に、一方の戸がガタ／＼と音をして閉きました。

「それでは新作さん、行つて來ますよ」

それは若い女の聲。

「あゝ、氣をつけておいで」

それは若い男の聲。

「随分暗い事」

若い女は外の闇へ足を踏み踏みました。手拭を姉さん被りにして粉物を入れた箕を小脇にし、若い女の人は甲斐々々しく外へ出て、外から戸を締めようと思いました。

小屋の中で臼のあたりを小箒で掃いてゐた若い男は其の手を休めて此方へ向いて、

「狸に見込まれないやうにしるや」と云つて笑うと、

「大丈夫だよ、わたしなんぞを見込む狸は居ないから」

女も亦、小屋の中を見込んで笑ひながら戸を締めました。

女は斯う云ひ捨て、スター／＼と草履の音を立てながら小流れの堤を上の方へさ歩いて行きました。

この水車は或一箇の人の持物ではなくて、此の八幡村一郷の物であります。一軒の家が一晝夜づつの権利を持つてゐる共有物でありました。その當番に當つた家では、その機會に於て成るべく多くの米を搗き麥を挽かねはなりません。これが爲に、いつも此の水車小屋には徹夜の働き手がゐます。

若し若い娘がその當番の夜に働いてゐたならば、それと馴染の若い男が手傳ひに來たがります。

馴染でない若い男もやつて來たがります。若しまた出來てしまつた間柄である時には、その馴染であるさ無いに拘はらず、手を引いて此の水車小屋の一夜を水入らずの穢き場として許すので

あります。

右の若い女が土手道をスター／＼と歩いて行く時に、机龍之助は壁の下から軽く飛んで出でました。幾くもなく其の娘のあとから追ひつきました。追ひついたさいふけれど、それはほんご風のやうです。風は微風でも音がするけれど、龍之助の追ひついた時までには音がしませんでした。

でも女は其の音を聞かないわけには行きません。

「おや」

箕を抱えたまゝで振り返ると、其處に眞黒い人影が一はいに立ちはたかつてゐるのを見ました。

「物を尋ねたい」

「はい」

女はワナ／＼と慄へました。

女はワナ／＼と慄へて、立つてゐられない爲に地面へ竦んでしまはうとした時に、龍之助は右の猿臂を伸ばして女の首筋を抱えてしまひました。

「あれ！」

さ叫ぶ口を龍之助は無難作に押へてしまひました。女は箕を取り落して、そこら一面に濃々と粉が散亂しました。

「お前は小泉といふ家を知つてゐるか」

斯う云ひながら龍之助は一旦固く押へた女の口を緩めました。

「はい……」

女は再び叫びを立てるほどの氣力がありません。

「それは何處だ」

「小泉の旦那様は……」

「小泉の主人を尋ねるのではない、小泉の家にお濱さいふ女があつた筈、それをお前は知つてゐるか」

「小泉のお濱様は……もうあのお家にはお出でがございません」

「何處へ行つた」

「お嫁入をなさいました」

「それから」

「それからの事は存じませぬ」

「知らぬさいふ事はあるまい」

「存じませぬ」

「人の噂では其れを何と云つてゐる」

「人の噂では……」

「氣を落つけて、人の噂をしてゐる通りを、わしに聞かして呉れ」

「人の噂では、お濱様はよくない死方をなされたさうでムいます」

「よくない死方とは」

「悪い奴に殺されたのたなんぞさ村では噂をしてゐるものもありますけれど、わたしは其んな事は知りませぬ」

「悪い奴に殺されたさ、何處で……」

「はい、お江戸さやらで殺されて、骨になつたのを、こつそりさ此の村へ届けた人があつて、それでお濱様の幽霊が出るなんぞ若い衆が云つてゐますけれど、わたしなんぞは何も存じませぬから、如何か御免なすつて下さいまし」

「お前は何處の娘だ」

「わたしは……」

「お前の歳は」

「十八でございます、助けて下さいまし」

「十八……それで名は」

「名前なんか申上げるやうなものではございません」

「今、水車小屋にゐた若い男はありや、お前の兄弟か、亭主か」

「あれは新作さんでございます」

「新作さんいふのは」

「この村の若い者」

「お前はあの男を可愛いと思うか」

「それは、あの人は行く／＼わたしと一緒になる人……」

「うむ、わしは此の通り眼が見えないけれど、感で見ると、お前は可愛い娘らしい、お前に可愛がられる若い男は仕合せ者じゃ」

「あなた様は、わたしを如何なさるんでございます」

「小泉のお濱を殺したのは拙者だ」

「エ、エ」

「其供養の爲にお前を頼むのだ」

「あゝ怖い」

「これから後、拙者の差してゐる刀に血の乾いた時は拙者の命の絶えた時じゃ」

「わたしを殺すのでございますか、わたしを何故殺すんでございます、今、死んでは新作さんに濟ませぬ」

「それは拙者の知つた事でない、斯うせねはお濱への供養が濟まぬ」

「あれ！」

「斬つてしまへは雑作はないけれど、これはお濱へ供養の血」

「苦しい！」

「存分に苦しむがれ」

「あゝ苦しい！」

夜中過ぎに机籠之助は歸つて來ましたけれども、籠之助が歸つて來た時までお銀様は籠之助の出た事を知りませんでした。

そつと歸つて來て行燈の下で頭巾を取らうとした時にお銀様は眼が醒めました。醒めて此の體を見るに怪しきには居られません。

「何處へかお出で遊ばしたの」

「つい其處まで」

「お一人で」

「一人で」

「何の御用に」

「眠れないから歩いて來た」

「そんなら、わたしをお起しなされは宜いに」

「餘りよく寝てゐる故、起すも氣の毒と思つて」

「其んな事はございませぬ」

「あゝ、咽喉が乾いた、水が一杯飲みたいものだ」

「お待ちなさい、今上げますから」

お銀様は水指を取るべく起きて寝衣を縮直しました。

「またお火がありますから」

とお銀様は火鉢の灰を掻き起しました。

「お銀ごの」

龍之助は旨さうに水を一杯飲んでしまつてから、

「紙があつた筈、それから筆と墨と」

「何かお書きなさるの」

お銀様は、龍之助の請求を怪しみながらも手近の硯箱と一帖ひとすゝの紙を取り寄せて机の上に載せながら、

「わたしが書いて上げませう、用向を仰有つて下さい」

「えゝご、その紙で帳面をこしらへて貰ひたい、半紙を横に折つて長く逆繰さかまがひにして貰ひたい」

「横に折つて長く逆繰に、さうして何にするのでございませう」

お銀様は龍之助に頼まれた通りに帳面をこしらへ初めました。折擦こすりをよつて其れを繰ぢてしまつて机の上へ置き、

「逆繰といふのは此れはお葬ひや何かの時にするものでございませう」

「死んだ人へ供養の爲にする」

「供養の爲に」

お銀様はいよく龍之助の舉動と言語を怪しみますには居られませんでした。

「今日の日は何日であつたらう」

「二月の十四日」

「それでは、そこへ初筆に二月十四日の夜と書いて……」

「二月十四日の夜と書きました」

「その次へ甲州八幡村にてと……」

「はい、甲州八幡村にて」

「その次へ、少し頭を下けて、名の知れぬ女と書いて」

「名の知れぬ女」

「十八歳と小さく」

お銀様は龍之助に云はれる通りに是れたけの事を書きました。

「これだけで宜しいのでございますか」

「また……左の乳の下さ」

「左の乳の下、それから」

「それで宜しい」

「これが如何して供養になるのでございます」

龍之助は其れには答へることが無く、

「今夜、拙者が外出した事は誰にも語らぬやうに、此後とても其の通り」

「あなたを一人歩きさせたのは、わたしの罪でございますもの」

「寢よう」

その時に何の拍子か行燈の火がフツと消えました。

八幡村を震撼させるやうな恐怖が起つたのは其の翌日の夕方の事でありました。

昨夜水車小屋から出て行方知れずになつたといふ村の娘が一人、水車場より程遠からぬ流れの叢の蔭に見るも無惨に殺されて漂つてゐたのが發見されて、全村の人は震駭しました。

慄へ上つて噂をするのを聞いてゐると、それは大方戀の恨たらうといふ事です。

その娘は村でも指折りの愛嬌者に數へられて、新作と約束が出来るまでに思ひをかけた若い者も少くはなかつたといふ事、それ等の戀の恨みであらうといふ事に一致すると、青年達は何れも痛くない腹を探られる思ひをして恐怖と無氣味と復讐心に駆られて、村の中は不安の雲が彌が上に捲き起ります。

小泉の家は名主でありますから、何者よりも先に其處へ駆けつけて其の處分に骨を折らなければなりません。

主人の妻はお銀様に向つて、

「まあ、當分は夜分なご、外へおいでなさる事ではありませぬ」

と云ひました。

其の出来事の物語を聞いたお銀様は胸を打たれました。

その時に机龍之助は、眠つてゐるのか如何か知らないが横になつてゐました。

お銀様は行燈の下の机によつて、忙はしく昨晚こしらへた横綴の帳面を繰ひろけて見ました。

「もし、貴方」

お銀様は机龍之助の面を睨んで、

「もし、貴方」

二度まで龍之助を呼びました。